

成年向け雑誌

二次元 平成25年8月1日発行第10巻第5号 週巻84号
ドリームマガジン
EDREAM MAGAZINE

cover illustration by カグユツ

ガラビピンナップ
うるし原智志
カグユツ

連載&読み切り小説

大人気姫騎士小説が新作ゲームと共に帰ってきた!

浮墮の姫騎士ジャンヌ

美姫転生
筑摩十幸×木ノ崎由貴×桜沢大

気高き妖狐は悦獄に墮つ
新居佑×sian

対魔忍アサギ3
Kyphosus×竜廻×Anime LILITH

筑摩十幸×助三郎
あらおし悠×牡丹
天戸祐輝×ムシ
高岡智空×ていやなか
空蟬×カグユツ
酒井仁×かん奈

えつちマンガ
&4コママンガ

ばふえ
おおたけし
助三郎
天海雪乃
冬扇

今号の特集

公開調教

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

立ち読み版

vol.71 2013 **08** DIGITAL EDITION
デジタル版

敗戦国将校公開調教

貴族
騎士

レイチェル

小説
NOVEL

うつせみ
空蟬

挿絵
ILLUSTRATION

カグユヅ

公
公開調教
特集

囚われた憐れな女騎士を
牝奴隷に墮とす公開調教！



緑豊かな王国コーネリアは、突如侵攻してきた隣国ランザードの大軍の前に抗戦空しく敗れ去った。終戦から、ちょうど三月経ったその日。王都の広場へと続く街道を半裸の女騎士が一名、敵国の兵に鎖で引かれ連行されていた。

豊かに実った乳房を剥き出しにされた状態で、後ろ手に枷をはめられて拘束され、背筋を伸ばしての歩行を強要されている、若い女。うつむき隠すことも許されぬその頬は羞恥に赤らみ、唇は屈辱の度合いを示すかのようにきつく結わえられたまま。辛うじて下着のみ着用を許された下肢を、やはり恥じらいがちにモジモジと揺らしている。

首輪から伸びた鎖は先導する敵国兵士の手中へとつながっていて、彼女が捕虜となった事実を何よりも雄弁に物語っていた。

女騎士の名は、レイチエル。コーネリアの有力貴族の子女にして、近衛騎士団の副団長を務めた魔法剣士だった。

「レイチエル様が捕まったんじや、もうおしまいだ」

「あのようなお姿で……おいたわしい……」

絶望に沈む者。捕虜となった英傑を案じ嘆く者。心情は様々あれど、女騎士を遠巻きに見やる顔は一樣に覇気なくうつむき、敵兵の顔色を窺っている。敗戦国となったことを否応なく痛感させられた。

「すまない……お前たちのささやかな暮らし。幸せを守る事ができなかつた」

荣誉ある近衛騎士の一員でありながら、国も、王も守りきることができなかつた。信頼を寄せてくれていた民の期待を、裏切ってしまった。己の不甲斐なきを呪ってみたところで、街道に集う数多の視線から逃れられようはずもない。

「わが軍の兵を数多屠った魔法剣の使い手も、こうなつては形無しだな」

囚われる際にはめられた首輪により魔力は封じら

れ、当然、剣も取り上げられている。抗えぬ相手の半裸姿を無遠慮に見つめるその男性兵士の目つきは、酷く下卑て感じられた。

「乳も尻もパツンパツンに育つてやがる」

「歩くたびに揺れてよ。ひひつ、たまんねえ」

虜囚の左右を固めて歩く他の敵兵の口からも、堰を切つたみたいに下品な言葉が発せられる。侮蔑に對する怒りを覚えると同時に、数多くの視線に晒される状況を再認識し、改めて羞恥心が身を焦がす。

（肌が、チリつく。見られているから、か……？ やめろ、見るな……！）

焦れた様子を見て取つてか。隣に立つ敵兵がニヤリと再び下卑た薄笑みを浮かべた。

「おい、その小僧！」

「は、はいっ」

思いがけず指差された少年——まだそう呼ぶにふさわしい背格好だった——が、怯えながら伏し目はこちらを向く。

「小僧。お前はどの裸、どう思う？」

「っ!？」

予想外の敵兵の言葉に言葉をなくしたのは、話題の裸の裸体の主のみならず。問われた少年もまた、負けないくらい頬を赤らめてうつむき黙ってしまう。

「さつきからチラ見してたろうが。答えろ小僧」

「き、きれい……だと思っ」

やつとそれだけ言つた少年は、今にも泣き出ししてしまいそうに眉根を歪めている。

「それだけか？ ならなぜ腰を引いて目を逸らす」

少年の言葉に恥じらいながらも、ほっとしたのも束の間。改めて問いただす敵兵の底意地の悪い薄笑みがこちらに向く。別の兵の手が伸びてきてこれ見よがしに人の乳房に触れて持ち上げ。

「っ！ ふ、触れるな……、下郎っ」

下世話な連中に似合わぬ柔らかな手つきで胸に触れられ、くすぐつたさを覚えた直後。ポヨポヨと乳肉を揺らされて反射的に腰が引ける。と同時に得体の知れぬムズムズとした感覚が胸に広がり、ひとりでに甲高い声が漏れてしまった。

「へへ。どうした貴族騎士さんよ。腰が引けるぜ」

「可愛い声出すじゃねえの。なあガキ。お前もそう思うだろ？ ほれ、素直に言え！」

「うう……」

——もう、やめろ！ 続きを聞きたくない気持ちも相まって、そう声を張り上げようとしたけれど。数秒、遅かつた。

「っ……ひ、う……うう……。レ、レイチエル様のおっぱいっ、エッチな目で見てましたっ」

（そ、んな……）

自国の民に性的な目で見られていたなんて、思いもしなかつた。

「そこのお前も。このデカ乳や尻を、いつもエロい目で見てたよなあ？」

抜身の剣をチラつかせ、敵兵が声荒らげる。

「は、はひつ。レイチエル様が日頃この街道を通られるたびつ、行進に合わせて揺れる胸や太ももに目を奪われておりましたっ」

喉元に剣先を突き付けられた男性——少年の隣に立っていた、おそらく父親だろう——が、震える声を絞り出して言ひ募つた。

（普段から私は、そのような目で見られていた……のか？ 嘘だ……そんな、こと）

脅されて放つただけの虚言だ。そう考えて己を納得させようとするほどに、男性の媚びるようでないがらじつとりと肌にとわりつく視線が気にかかる。

（うう……そ、そんなに見ないで……ああ、視線が胸に集中、してる……うう）

敵兵の指がこれ見よがしに乳肉を揺らすたび。民の視線が一斉にそこだけを注視する。

「ふあっ……！」

また。ひとりでに甲高い声がこぼれ出た。肌のチリつきはますます強まって、無意識のうちに身を隠そうと背を丸め。内股になったところで鎖を引かれ、羞恥の表情を民草に披露することを強制された。

「うぐっ、うううっ……！」

「ご、ごめんさっ……ひっつ、うううっ」

父親の破廉恥な告白を聞き、騎士のみじめな姿を目の当たりにして、少年がしゃくりあげる。膝をついて泣きじゃくる子供の有様を横目に、「そろそろ」
とでも言いたげに顎しゃくる敵兵。

——とことん、見下げはてたやつだ。こんな連中の思い通りの反応をしてなど、やるものか。渦巻いた怒りが束の間羞恥心を掻き消した。

「……泣くな、少年。そのっ……。男が女の肌を見てそのようになるのは自然なこと、だから」

「ひやはははは。こりゃあいや。じゃあ俺らがチ○ポパッキパキになつてんのも自然ってことで」

「民よ、私はならず者に屈したりしないっ、だから、そなたらも希望を失わずっ……つくううっ！」

剥き出しの乳房を乱暴にもまれ、痛みが口惜しさとともに駆け抜ける。必死に連ねた言葉に呼応する顔は、見渡せる範囲にひとつもなかった。そのことがよけいに女騎士の心を沈ませた——。

※

「これよりこの女——我が国の兵を多数屠った大罪人の公開調教を開始する！」

王都の中心に位置する広場。そこに設えられた木造の舞台に着くなり、宣告。

続いて敵兵たちはこそぞつて自らズボンを下ろし、いやらしく盛った肉の棒を取り出した。

「く、臭い！ そのようなものっ、早くしまえ！」
初めて目にする男性器は赤黒く不気味に脈打っていて、見知らぬ異世界の生物のようにすら思われる。

何より臭気が鼻につく。卑しい性衝動を主張して跳ねるそれから目を背けるしぐさにすら、男たちは昂奮を覚えているようだ。

「だからよお。てめえの口の中にキーツチリしまいい込んでやるっつってんだろが」

決して広くはない舞台の上で拘束され、膝立ちとなつている状況下。四方から迫り来る肉棒に視界の逃げ道すら奪われ、否が応にもその醜いフォルムが網膜に刻まれる。

「け、汚らわしいっ。侮辱も大概にっ」

「ちっ。まあだ貴族気分が抜けてねえようだな」

——べちんっ！

「あうっ！」

勃起した男性器で頬をぶたれた。そんな非現実的な事態がすぐには理解できず、呆然となる。

「これから民の前でサーメンまみれになるんだよ。そのためだけに生かされてんだ、お前は」

民の信望を集める女を公開の場で貶めて、徹底的に反抗心を削ぐ。そう、敵兵のひとりが耳打ちした

「てめえが俺らのモノを噛んだり、逃げるそぶりを見せたら、集めた民をひとりずつ殺す」

外道が——吐き出かかった激情をベニスの代わりに噛み潰して、血がにじむほどに唇を噛む。

「わかつたら、民の前でチ○ポに挨拶しな」

青筋浮かせて脈打つ肉棒に左右の頬を打たれ、怒りよりも先に嫌悪が湧き立つ。

見るのも初めてだった男の体の一部分は酷く節くれだつていて、そもそも排泄用の器官であるという認識が、口に含むことをためらわせる。

（う、くうう……民の、ため……だっ）
戦うすべのない今の自分には、他の選択肢はないのだ。繰り返しの胸に言い聞かせる。そうして愛する民に尻を向け、忌むべき敵兵の足元に跪いた。眼前で仁王立ちとなった男の逸物を、恐る恐る手

に取った瞬間。広場に集められた民が一様に息を呑んだのがわかった。

「おほっ。さすが貴族様は手も柔らかいなア」

「きゃっ?!」

手に取るなりビクリと跳ねた肉棒に驚かされ、つい女々しい声を漏らしてしまふ。素手に伝わる温みが、心地の悪さに拍車をかける。

「ごによごによと耳打ちしてきた敵兵が、離れ際に乳をひともみ。加えて、耳たぶに生温かな息を吹きかけていった。」

「っ、う……く……く……！」

反射的に出そうになつた喘ぎ声を懸命に喉の奥に押しとどめ。

（卑劣な手管や言い様をどれだけ持ち合わせているのだ……っ！ つくう、う、ううっ、い、言わなくては、民の命のため……っ）

一字一句たがえずに宣言するようにと耳打ちされた内容のあまりの酷さに、敵兵どもの悪辣な意図をまさまじく感じて、心が恥辱に軋む。

「ああ、レイチェル様……」

民の嘆きを背にしながら、今から敵兵に奉仕するのだと思うと、胸掻きむしられる思いだった。それでも、すがるような目を向けてくる彼らのため。

「ご、これから貴公のたくましい、お、おち、おちんぼ様につ！ ご奉仕させていただきます……っ」

耳まで赤くして言い終えた途端に、ゲラゲラと下品な嘲笑を浴びせかけられた。

尻や背中に感じる民の視線。怖くてそちらを振り向くことはできないが、よりいっそう注視されていることだけは肌で感じ取れる。

「聞いたか！ 今から貴様らの騎士殿が俺のチ○ポに奉仕する」「目見開いてよく見ておけよ！」

民を煽る敵兵どもの言葉が、民の視線の強さを増させる。と同時に、今から行うことの内容を反芻す

るはめとなり騎士の誇り、人としての矜持が悲鳴を上げた。

（民の前で醜態を晒す私を……許してくれ……）
亡き王や同僚、そして多くの民自身に内心許しを乞い、覚悟を決める。

「まずは先つぽを舌で丁寧ねぶれ」
「つう……れ、ちゅつ……」

居丈高な声に従い、そろそろと寄せた舌を、手中に収めた勃起ペニスの先端へと這わせてゆく。

「お、うっ……へへっ。どうだ、美味いか」

「ちゅ、っ……馬鹿を、言うなっ。苦い、だけだ」

それに酷く蒸れていて、軽く含んだだけにむせてしまいそうだ。ゴムのような弾力がありながら硬い芯の詰まった感じもする。不可思議な肉棒の触感も、正直心地の悪さしか感じ得ない。

「味がしなくなるまでしゃぶり倒すんだ」

はなからこちらの意見など聞く気のない男が、心地よさげに鼻を鳴らし、指令を下した。

（耐えろ。そうすれば、きつと決起の時が来る。民の手にもう一度国を取り戻す日まで……）

国の再興、民の再起を諦めぬために。己の誇りが泥にまみれようとも民を守り抜いてみせる。

「ひひっ。乳いだきっ」

「んぐ！」

横にしやがんだ別の兵士の手に剥き出しの乳房をつねられ、危うく舌先のペニスを嘔みそうになった。「うおっ。このっ。嘔んだら、わかってんだろな」
口が塞がっているため、上目遣いで相手の顔を見、小さく頷くことで意思を伝える。

そうこうするうちに我も我もと周囲の兵士どもが、肢体のあちこちへ手を伸ばしてきた。

ある者はポヨポヨと乳房を下から持ち上げて弄び、別の手が乳首をつまんでこね回す。真つ先に腿や腹部をなで擦る酔狂な者も複数いた。

「んふっ、んっ！ んううふうううっ！」

つねられた直後にこね練られた乳首が、ジンジンする。くすぐったく感じていた他の部位も、じつとりと汗ばんで男たちの指を吸いつけていた。
（な、んだ。こんなの、知、らない……）

初めての感覚に戸惑いながらも、機械的に舌先を動かしてペニスをしゃぶり続ける。

「オラ。先つぽを啜えて、吸え。民に見えるようにゆーっくりとだ」

凶に乗って告げられた新たな指令。

行為に没頭することで身体の変調から意識を逸らそうとの思惑もあり。意を決して頬すぼめ、唇で男の亀頭を含んでいく。

（ひあっ！ 舌の上で、お、躍ってっ……な、なにか、びゅってかかっ、た……あっ……）

唇で挟むなり、唾液の浸る舌上に寝床を定めた肉の棒が喜びの脈を響かせる。同時に噴き出した生ぬるい汁の粘り気と勢いを喉元で受け止めさせられ、むせたのも束の間。

ごくっ——。あふれるほど口中に溜まるよだれと一緒に、男の吐き出した汁の嚙下を余儀なくされた（んぐ、っ……の、喉に絡まるっ……）

喉鳴らして飲み込むと、胃に至る道をズルズル滑り落ちていく。淡い苦みに食道まで穢されている気がして、眉をひそめながらもどうにか嚙下した。

食感にえずく一方で、敵兵が胸や尻や腿に施す愛撫に身震いし、腹の底が熱孕むのを自覚する。相反する感覚に苛まれつつ、悦に入る敵の声を聴いた。

「見るか、コーネリアの民ども！ 貴様らが希望にしてた女が、敵のチ○ポを飲んじまったぞ！」

（ああ……言うなあ……）

優越感と侮蔑をたっぷりと含むその言葉は、捕虜の身の無力さを痛感させ、屈辱と恥辱を煽り立てる。「くくっ……おい。自分がどれだけみつともない顔

をしているか、気づいてるか？」

言われずとも、民の視線と空気を肌で感じ、嫌というほど思い知らされていた。
鼻下を伸ばして頬をすぼめ、男性器にしゃぶりつく。さぞや、卑しい顔になっているのだろう。

「……っ、そのまま、派手に音立てて吸え」
口の中と胸に広まる苦みを堪え仰いだ先で、男の目が「従わねば民を殺す」と告げている。躊躇する間すら与えられなかった。

嘲りの視線から逃げるように瞳伏せ。
ぢゅっ、ぢゅちゅりゅりゅるっ……。盛大に音を立て、己の頬ごと引き込む勢いで吸い立てる。

「お、うっ！ つは、ははっ。いいぞ。その調子で、ふやけるまで奉仕しろっ」

喜び勇む牡肉が、舌を跳ね飛ばす勢いで鼓動する。

（あ、ああ……また臭い汁が口の中にあふれて、んぐうあ……っ、暴れるなああっ）

暴れる肉棒の先端を挟んだ唇でモグモグ。甘い刺激を与えてあやしつけ。結果、さらなる先走りの発射を促してしまい、苦みに口中を満たされた。

広場のあちこちから啜り泣きや嗚咽が届けられる。自分が民に悲しい思いをさせていると思うと、なおさら。泣きたくなるほどの恥辱に見舞われた。

「へへ。まゝ腰がくねってやがる」

「んんっ！ ソンうううっ！」

違う——馬鹿を言うな！ 強く否定すべくペニスを吐き出そうとした瞬間。また強く乳首をつねられ、煩悶する。今度は最初からジンジンと甘いうずきか胸に広がり、背筋までもが揺さぶられた。

「休むな！ ベロ絡ませてねぶんだよ！」
再び上目遣いで見つめた先で、男は「命令は絶対」というように顎をしゃくる。そして舌の上の亀頭を軽く前後させながら脈打たせ、先走りのツユをすり込みながら命令の実行を催促した。

あの異種姦ノベルの
名作が再び!



淫墮の姫騎士

THE PRINCESS KNIGHT "JANNE"

ジャンヌ
美姫転生

前編

小説
NOVEL

ちくまじゅうこう
筑摩十幸

挿絵
ILLUSTRATION

きのさきゆき
木ノ碕由貴

原作
ORIGINAL

さくらざわひる
桜沢夫

ゲーム版最新情報は12ページへ!!

わたくしはジャンヌ・フィリエール。聖ルミナス学園に通う普通の女子校生です。
ある日以前から好きだった城嶋先生シロシマに想いを伝えようと、親友のミハルと一緒に中庭で待っていたのです。でも告白しようとした瞬間、突然目映ゆい光に包まれて、わたくしはミハルとともに見知らぬ世界へと飛ばされてしまったのです。

そこでわたくしはリブファール王国の第二王女ユーワと出会いました。

リブファールはオーガ族の襲撃を受けて滅亡の危機に瀕していました。そこでユーワと魔導師アナスタシアは天使の血を引く伝説の姫騎士ジャンヌ・グールノーブルの転生体であるわたくしを召喚したのです。わたくしの前世が天使だとかお姫様だったとかまったく記憶にありませんし、ユーワはわたくしの妹らしいのだけど、全然似てないし、ドジでおっちょこちよいだし……なんだか放っておけなくて。それにミハルのことも探さなくてはいけないので結局わたくしはオーガ族と戦うことになったのです。

「てりやあああつ！」

レイピアに気合いを込めて一閃すると、人間より遥かに巨体のオーガ兵が数十人も軽々と吹き飛ばしました。もちろん剣なんか触ったこともないけれど、なぜか身体が勝手に動いてくれます。

「穢らわしいオーガども、リブファールから出ていきなさい！」

さらに背中中に輝く翼が、わたくしに無限とも言える力を与えてくれました。翼の一振りは風を呼び、竜巻と雷が数千のオーガ軍を一瞬にして壊滅させてしまいます。それは伝説の天使族の力。この世界に

来てから覚醒したわたくしの新しい力なのです。
「ぐわあ……つ、つええ」
「とてもかなわねえつ！ 退却だつ！」

これまで王国と国民を苦しめたオーガ軍は尻尾を巻いて逃走し、久しぶりにリブファールに平和が訪れたのでした。

そしていよいよオーガ族の首領であるギドーとの対決。わたくしはギドーを後一步まで追い詰めたのですが、それを阻止したのはミハルでした。

わたくしより前にリブファールに召喚されていたミハルはギドーに捕まって墮天使として洗脳されていたのです。大切な親友に剣を振ることもできず、わたくしは敗北し囚われの身になってしまったのでした。

「やつとお目覚め？ ジャンヌ」

「はあはあ……ミハル……」

重い臉を押し上げて辺りを見回す。そこはリブファール城の地下牢だった。太い触手に身体を押しえつけられて身動きとれず、その上にミハルが覆い被さっていた。背中まで届く黒髪が美しい活発なスポーツ少女だった東ミハル。そのスレンダーな身体にフィットする漆黒のボディスーツが、ジャンヌの白い姫騎士の軽装服とは対照的だ。

「どう淫魔ウィルスに感染させられた気分は。これでジャンヌは天使の力を失ったの。ウフフ、涎もオシッコも垂れ流しでイキまくっちゃって。とっても可愛かったよお」

淫魔ウィルスとは天使の力を喰らい、光の属性を闇へと転換してしまう魔界のウィルスだ。このウィルスに冒された天使は光の翼を失い、やがて淫魔サキュバスへと墮落してしまうと言われている。

「くっ……わたくしは……あつ、あぁ……っ！」
身体を起こそうとして肌が触手と擦れた瞬間、ジャンヌは悲鳴を放っていた。淫魔ウィルスの効果により、ジャンヌの身体は異様なまで敏感になっていたのだ。

背中やお尻が触手と擦れるだけで、ビリビリと身体の内芯にまで悦楽電流が駆け抜ける。間近に迫ったミハルの体温を感じただけで、ツンと尖った乳首が過敏に反応してしまうほどだ。

「う……うう……ミハル……わ、わたくしから離れなさい……はあ……はあ……」

(ミハル……)

墮天使となった親友の美貌を間近で見、ジャンヌはその美しさにハッとする。睫毛の端に、唇の柔らかなに、普段の元気系美少女とは違う、妖艶なまでの色気が感じられた。同性のジャンヌですら、胸がドキドキときめいてくるほど。

「フフフ、どうしたのジャンヌ。顔が赤いよ」

「なんでもありませんわ！ き、触らないでっ！ あきやあんつ！」

柔らかな唇を首筋に這わされて、甘い悲鳴が迸る。「何百回も連続絶頂させられたからね。身体がその状態を普通だと錯識しちゃうの。クリトリスも乳首もピンピンに勃起したまま。オ●ンコもいつも濡れっぱなし。ウフフ。まだ処女なのに恥ずかしい身体になっちゃったね」

「そ、そんな……」

「早くここにギドー様の逞しいモノをぶち込んでもらいたい、いやらしいこといっぱいされて、オ●ンコでアクメしたいって思っているんじゃない？」

「そ、そんなことありませんわっ！」

ジャンヌは金髪を打ち振って否定するけれど、耳元で囁かれているだけで狂おしい連続絶頂体験が蘇る。エンジェルキラという天使の天敵である魔物に絡みつかれ、身動きできないまま一週間連続で絶頂地獄を味わわれたのだ。思い出すだけでゾクゾクと身体の内芯が震えて、恐ろしくも妖しい気分になつてくる。

「じゃあ、ちよつと試してみようかな」

ピシャンツ!

「はひいんんつっ!」

軽く乳房をぶたれただけで、飛び上がるほどの肉悦が襲いかかり、ジャンヌは甘い悲鳴を放った。まさに全身が性感帯といった感じだった。

「ほらほら! どうなの? 感じてるんでしょ!」

反応の良さに気をよくしたミハルが、往復ピンタを乳房に見舞う。熱れ始めた初々しい乳果が右へ左へとブルンブルンと激しく揺れ、アメリカンクラッカーのようにぶつかっては弾力たつぷりに弾け合った。

「ンあぁっ! 感じてませんわ……ああ……やめな……た、叩かないでっ! あっひいんんつ!」

胸を反り返らせて、淫らな乳振りダンスを踊らされてしまふジャンヌ。乳房はたちまち赤く染まり、灼けるような痛苦を伝えてくるのだが、同時にそれを遥かに超える快感も湧き起こり、ジャンヌを戸惑わせる。

「アハハッ。こんなことされて感じるなんて、もうすっかり変態じゃないの、この淫乱天使!」

サディスティックな興奮がこみ上げてきたのだろう。ミハルは頬にもピンタを飛ばしてきた。

「パシッ! パシッ! パシッ!」

「うあぁ……いやっ……あぁっ……やめて……あぁっ……あうんっ!」

「変な声出しちゃって。いやらしい牝。どうしようもないマゾだね。どうしてギドー様はあなたみたいな変態牝豚天使にご執心なのかしら」

嫉妬めいた情念を込めた張り手が、柔らかな頬に何度も何度も叩きつけられる。

「うあぁんっ! いやっ……あああぁんっ!」

「あ、ああ……どうして……」

頭を揺さぶるほどの容赦ないピンタだったが、感じるのは痛みだけではなかった。ジンジンと疼くよ

うな熱さが身体の中に蓄積され、とろけるような心地よさに満たされていく。特に赤く尖った乳首は焦れたいようなむず痒さに包まれ、ともすればもつと翳って欲しいという気持ちもたげてる。

「はあ……はあ……ミハル……もう……やめて……ゆるして……ううう」

赤く腫れた頬に悔し涙が伝う。ピンタの痛みよりも、これ以上打たれたら自分はどうにかなってしまいたいそう、ジャンヌは喘ぎながら懇願してしまつた。「こつちの手が痛くなつてきちゃつた。ウフフ。こんなことでも感じちゃうなんて。その様子じゃあ、天使の力はほぼ失われたようだね」

調教の進み具合に満足したのか、掌をヒラヒラさせながらミハルが嗤う。

「これじゃもう発情した牝淫魔だよ」

ネチネチと囁きながら、今度は一転して優しく乳房を撫で回してきた。くすぐるように爪先で乳輪の周りをなぞつたかと思うと、ギョツと乳首を摘んだりする。

「あああ……わたくしは発情なんて……ンあ……さ、触らないで……はうっ、ううんっ!」

僅かな刺激にも乳腺がカアツと火照りだし、乳首がますますしこつて疼き出す。

「私にはわかる。ジャンヌがどんなに感じているかどこをどうしてもらいたいのか……」

赤く火照つた頬に、チュツチュツと優しいキスの雨を降らせ、脚の間に潜り込ませた腰を擦りつけてくる。指の股に挟んだ乳首を右へ左へひねり回し、快楽神経の感度をジワジワと上げていく。

「はあ、ううっ……いやあ……ミ、ミハル……んんあ……ああん」

まさに鉛と鞭。緩急をつけた妖美な責めに、ジャンヌの情感はトロトロにされていく。強く反発することもできないまま、気がつけばミハルのペースに

どつぷりはまつている。

「ンフフ。ジャンヌ……可愛いよ……もつといじめて、ムチャクチャにしたいよ」

クイクイツと腰を蠢かせ、恥丘をぶつけてくるミハル。だがジャンヌはそこに違和感を感じた。何か熱く硬い感触が押しつけられてくるのだ。

「だめ……正気に戻って……わたくしは友達同士だったじゃない……思い出して……あぁっ!」

その違和感が同性愛の背徳感を掻き立て、ジャンヌはブルブルと首を小刻みに振る。クラスメイトで唯一無二の親友と言つて良いほど仲が良かったミハルが、今や墮天使となつてレズっぽく淫らに責めてくるなど悪夢のようだった。だがその背徳感にすら、肉体は勝手に反応してしまう。クレパス全体が火照つて、子宮がキュンキュンと疼き出していった。そこから湧き起こるどす黒い衝動が今にも理性の檻を突き飛ばしてしまふそう、ジャンヌは生汗を噴いた身体をギリギリと突つ張らせた。

「あ……わたくし……なんて身体に……」

ちよつとでも気を抜けばふしだらな誘惑に負けてミハルに甘えてしまふそうだった。これではとてもギドーと闘うどころではない。情けなくて心が折れてしまふそう。

「ンふふ。もうすぐジャンヌはギドー様の望まれる食欲で変態な牝淫魔になるんだよ。それが伝説の真相、あなたの前世の本当の姿なんだって」

「あうう……ち、ちがいますわ……わたくしは……ハアハア……そんな女じゃありませんわっ!」

「強がっちゃって。素直になりなさいよ」

ミハルのしなやかな指が、スカートの奥に忍び込む。金髪ヘアに飾られたワレメを縦になぞると、ヌルりと湿つた感触が粘つた。

「やつぱり、もうグチョグチョじゃん。おっぱいぶたれてオ●ンコ濡らすなんて、今すぐギドー様に抱

に他ならない。

「くっ……やっぱり、まだ力を残していたんだね。さすがジャンヌ。でもね……」

「メキメキッ！ キュバアアアアアアアアッ！

艶やかな黒髪をはね上げるようにして二本の暗紫色の光がミハルの背中から伸びる。

「ッ！ ミハル……そ、それは……翼!?」

驚き目を見張るジャンヌの目の前で、ミハルはエナメルのような光沢を持つ黒翼を、自慢げにはためかせてみせた。

「私は墮天使。翼くらい当たり前でしょ」

「くっ……なんて強い……力……ですの」

聖気と闇気が激しくぶつかり合い、二人の間でバチバチと激しい火花が散った。部屋中の空気が震撼し、頑丈な石壁もミシミシと軋むほどだ。

だが天使と墮天使の相克は、意外なほどあっさりとした勝負がついた。すでにウィルスによる弱体化を受けた今のジャンヌでは、圧倒的なミハルのパワーに抗いきれない。

「アハハハッ。弱い、弱すぎだよ、ジャンヌ！ そんなんだから、誰も救えないんだよっ」

黒翼が三つ又の槍のように変形したかと思うと、ジャンヌの光翼を刺し貫いてベッドに縫いつけ、完全に制圧してしまった。

「ううっ、ミハル……ぐうう……っ」

暗黒のパワーに圧倒され、ジャンヌの光翼は急速に光を失っていく。完敗したことよりも、親友がここまで悪に染められてしまったことがショックで、ジャンヌは無念そうに呻くばかりだ。

「わかったでしょ。あなたは私に勝てない。諦めて、牝豚天使になろうね」

膣口にあてがわれた産卵管の先端が細く変化し、処女粘膜を掻き分けてゆつくりと侵入を開始した。

「ムフフ。処女膜はギドー様のためにとっておくか

ら安心してね」

「そんなもの入れないでっ……ンあああ……っ！ ミハルの言うとおりに、寄生体の産卵管の先端は細く処女膜を傷つけることなくぐり抜け、さらに奥深くに潜り込んでくる。

「はあああ……これがジャンヌの中……あああ……温かくてヌルヌルして……きもちいい……」

「やめてっ……ああああ……お、奥まで……くる……ハアハア……ふ、深い……あああ……」

小指ほどの太さの細管だが、処女を拓かれるジャンヌにとつては恐怖以外の何物でもない。まだ誰も触れたこともない聖なる処女粘膜が一枚ずつくつろげられ、押し開かれていく。魂まで串刺しにされるような異様な感覚に身を強張らせて、ジッと堪えるしかなかった。やがて――

「はあああ……ここがジャンヌの……オ……ンコの奥……ハアハア、子宮の入り口なんだ」

産卵管は子宮の底にコツンと当たつてようやく止まった。

「あ、うああ……だめ……う、動かないでっ……は、早く抜いて……はあうんっ」

ツンツンと子宮口を突かれて、ジャンヌは恐怖に引き撃る肢体を足掻かせた。しかししつかりと食い込んだ産卵管は抜ける気配もない。

「ハアッハアッ……まだまだ……これからだよ」

クチュッ……クチュルッ……ジュブジュブッ！ ミハルが腰をゆつくり円を描くようにグラインドさせると、産卵管もジャンヌの膣内を掻き混ぜるように蠢きながら、子宮口を集中して責めてくる。

「うあああ……こ、これ以上……なにを……？」

「はああん……もちろんジャンヌの子宮の中にオ……ンポ入れるんだよおっ。そこにいっぱい、いっぱい、卵を産みつけちゃうのおっ……あはああんっ」

「ひっ！ そんな……んあ、あううっ……やめて……

……し、子宮の中なんて……入ってこないでえ！」

ジャンヌの哀訴も、墮天使となった元親友の耳には届かない。

むしろ昂奮した様子で、プリプリした尻を振り立ててジャンヌの子宮に産卵管をねじ込んでくる。あたかも寄生体に精神まで乗っ取られてしまったかのように、赤い瞳が凶暴に煌めく。ゼエゼエと荒い呼吸を繰り返す唇からは、涎まで垂れている。

「やめてミハル……うああ、あああ……っ！」

子宮頸管を通り抜け、ついに背徳の産卵管がジャンヌの子宮内へ突入する。痛みはほとんどないが、子宮の最奥に感じる挿入感は相当なもので、とても細い管とは思えない。ミハルに身体をすべてを支配されていくようだ。

「はあおんっ！ 入ったよお、ジャンヌの子宮に……はあっ、はあんっ……繋がつてるのお……ジャンヌと私の子宮があ……つながっちゃったのお……ああ……ヤバイ、これ、すっごく気持ちいいっ！」

ミハルはウツトリと微笑みを浮かべ、胎内の感触を堪能していた。産卵管はミハルの子宮から伸びており、牡と牝の快感を同時に感じる事ができる。

まるで無限の海をたゆたうような浮遊感に、魂が身体から浮き上がりそう。さらに産卵管を食い締める子宮口と膣肉の締めつけがたまらなかった。

「ああ、ジャンヌ……ジャンヌをもっと穢したい……私のオ……ンポで……ハアハア……もっど、身体

の奥の奥まで……メチャクチャにしたいっ！」

双眸を淫欲に燃え上がらせ、ミハルはリズムミカルに腰を振り続ける。U字に湾曲した産卵管を双頭パイプのように使つて二人の蜜壺を掻き混ぜ合う。

ジュブッ……ズブッ……クチュクチュンッ！

しなやかS字曲線が生み出すウエストラインが二つ、少女とは思えないエロスを振りまきながら、絡み合うようにペアダンスを踊る。

「ああんっ……やめて……ミハル……ううんっ……子宮の中、掻き混ぜないで……うああっ！」

産卵管が子宮口に入りするたび、お腹の底から湧き起る強烈な陶酔感が脳をぐらぐらと揺さぶる。(……な、なんですの……これえ……?)

それはボルチオ性感と呼ばれる最も強い女性の性感帯の一つなのだが、通常はセックス経験を積んだ女性が会得するものであり、処女であるジャンヌにとってはあまりにも強烈すぎる。膣孔に電極を突っ込まれて高圧電流を流されているような凄まじさに、意識まで吹き飛びそうになるのだ。

「やめないよ……はあっ……ジャンヌの中に産むまでえ……ジャンヌを牝に変えるまでえ……絶対やめないんだからあ……あ、ああん……ジャンヌももつとオ●ンコ締めつけて……私を感じてえ」

「うあああ……ミハル……だめえ……な、なに……? お腹の中で……お、大きくなつてる……っ!」

その情念が乗り移ったように、子宮内に侵入した産卵管の先端部分が、大きく硬くコブのように膨らんでくるのではないか。

「あはああんっ……これでもう抜けないよお……ジャンヌの子宮中に卵出すまで抜けないのおつ……ああああ……ジャンヌと私の子宮が繋がってえ……オチ●ポピンピン感じて……たまらないよつ!」

勃起したことで感度も増したのだろう、ミハルは恍惚の表情を浮かべ、リズムカルに腰を振り続ける。産卵管がうねるたび、連結された二人の子宮が同時に攪拌され、グチュグチュと淫靡な音を響かせた。

「ハアハア……ミハル、正気に戻って……ああ………た、卵なんて産まないで」

「はあっはあっ……ジャンヌの子宮もどろけてきたあ……んあ、んふっ、あああん……ここがイイ……ここに産むのおつ! いっぱい産んで、ジャンヌを

オーガ様専用の変態淫魔にするのおつ!」

ジュブツッ! グチュルツッ! ズチュンツッ! 完全に寄生体の産卵本能に支配されているのだろう。ジャンヌの言葉など耳に届かない様子で、目尻はトロンと下がり、緩んだ唇から舌がはみ出し涎まで垂れている。

「ンああっ……そんな……はげしい……ンあああ……だめえ……くああああんっ!」

体積が増したぶん、一発ごとの威力も倍加していた。ズンズンと杭打ちのような衝撃を子宮に叩き込まれるたび、胎内で快感の爆発が起きて、ジャンヌは顎を突き上げ拘束された身体を仰け反らせた。化け物の卵を産みつけられるなど、おぞましく恐ろしいはずなのに、肉体は発情させられ、受け入れ準備を整えさせられていく。

「あはあん。ジャンヌも私の卵が欲しくなってきたんじやない? はああはああ、ほらほら、子宮がピクピク締めつけてえ……あああん、イイよお」

「ち、ちがう……ああうん……欲しくなんかあ……あ、あああん」

抽送される産卵管から染み出す先走り汁は、一滴で巨象も発情させるほどの強力な催淫媚毒だった。それを直接子宮に注がれては、さすがの天使姫も欲情を抑えられない。膣粘膜が大量の愛液を溢れさせながら、産卵管を熱く包み込む。数段にも渡って締めつける蠢きは、処女とは思えない淫靡さでミハルに快感を与えた。

「んはあ……締めつけちゃって……可愛いよジャンヌ……好き……はああ……大好きだよお」

「ミハ……んむむっ!」

昂奮したミハルの顔が急接近する。避ける間もなく、唇を奪われていた。ぬめる舌が甘い吐息とともに侵入し、ジャンヌの舌を搦め捕る。一見すれば美少女同士のレズビアン

だが、その実は強姦に他ならない。

「んちゅっ……むちゅっ! 好き、ジャンヌ……チュツチュツ……ああああん……すすききつ、らい好き! ちゅっ、ちゅばあつ!」

食うような舌使いで唾液を混ぜ合い、菌茎を舐め回しては顎の裏側をくすぐってくる。粘膜と粘膜を擦り合わせ、互いの体温を交換し合う。

「んふっ……ひやめ……んあ……くちゅ……ちゅるう……あ、ああ……んんっ!」

舌を吸われるとビリビリと甘美な電流が喉奥から延髄に突き抜ける。顎に力が入らなくなり、次第に意識も朦朧としてきた。

(ミハル……)

もともと仲の良い二人だった。そのかけがえのない友情までも、淫らな同性愛の情欲に変えられて悔しさと悲しみがこみ上げる。しかし子宮に愛欲のピストンを撃ち込まれるたび、悲哀すらも淫狼な色で塗り潰されていく。変化はジャンヌにも伝染し、ミハルに犯されて嬉しいという気持ちがあふとこみ上げてくる。

「はああ、はああん……ジャンヌのオ●ンコも唇も大好きだよ……ンあああ……好きだから、メチャクチャにしたいのおつ」

ミハルは一旦唇を離し、そのぶん腰のピストンを強めた。

ズブツ……ジュブツ……ズブズブズブツ!

寄生体の狂った愛に取り憑かれたミハルの動きに容赦はなく、より深くよりしつこく、乙女の子宮を責め続ける。しかも単純に突き上げるだけではない。女同士だからこその急所を狙って、ドスンと最も奥を抉ったかと思えば、浅く退いて子宮口を裏側からゴリゴリ擦り上げる。倒錯した愛情に子宮の隅から隅まですべてを可愛がられてしまうのだ。

えっ……そんなにされたらあ……あ、ああ、ああ
あああ……んんん

それが偽りの愛情だとわかっていても、淫魔ウィルスに冒された肉体はこの異常な状況にすら淫らに反応してしまう。産卵管に攪拌される子宮から、串刺しにされた処女膜から、肉も骨も、魂までもとろけそうな自堕落な快感が湧き起こってくるのだ。

「ハッハアツ。オ●ンコだけじゃなくて、子宮でも私のオ●ンポしゃぶりついて……あふん……全然放してくれないんだものっ……これで処女だなんて……やっばり、ジャンヌは淫魔の素質十分だよ……はああ、ああ」

膨らんだ亀頭部は温かい子宮内膜に包まれ、溶けてしまおう。そのすぐ下のカリ首の辺りは子宮口がキツキツに食い締めてくる。そして陰茎全体に、まだ男を知らない処女褰がびったりと密着し、熱い蜜液をバッテリーのように塗りつけてきた。並の男なら一瞬で射精してしまうであろう快美の泉に、ミハルは今にでも出してしまおうな衝動を必死で抑え込む。

「いやよ……淫魔になんてえ……ああ……なりたくない……んんっ！ なりたくないのに……ああ、ああ、ミハル……んんっ、はあ……ミハルのオ●ン●ンが……あ、ああ、あああつ」

これが淫魔ウィルスの影響なのだろう。まだ男も知らない身だというのに、同性の少女に子宮を犯されるという異常な責めに、ジャンヌの女体は淫悦に燃え上がっていた。

一突きごとに哀しくも愛らしい媚声を振りまきながら、ジャンヌの腰がミハルと息を合わせて動き出した。とめどなく蜜を湧かせる処女孔が収縮と弛緩を繰り返す。次第にその間隔を狭めていく。濡れ輝く粘膜がヒクヒク痙攣しながら産卵管に絡みつく様子は、寄生体の卵を欲しがっているようだった。

「あ、はああ……そんなに暴れたら処女膜破れちゃうよ？」

「う、うああんっ……そ、それはだめえ……わたくしにはセンセイが……」

担任の城嶋の優しい笑顔がふと頭を掠めた。元の世界に帰るまで、何としても純潔を守りたい。それは少女としての儂くも純粋な願いだった。

「私がこんなにしてあげてるのに、城嶋先生のことを言うなんて。牝豚天使のクセに生意気だよ……はああ、出しちゃうんだから……ああ……魔物の卵を、産みつけてやるんだからあつ！」

親友を犯す異形ペニスの中を、嫉妬にも似た癡狂な感情が暴れ回る。

ミハルの官能が昂るにつれ、ビクッビクッと痙攣する産卵管の中を、成熟した赤い卵が一つまた一つと這い上がっていく。間近に迫った産卵への切迫感が、激しい血流となってフタナリ勃起に流れ込み、亀頭部をドクンドクンと脈動させた。

「ああ……陣痛きてる……はああ……もう……産まれそうなお……はっはあつ、ふうううん」

美貌を上気させ息み始めるミハル。下半身に力を込めて、テンポの良い呼吸を繰り返す様はまさに妊婦のようだ。

「はああ……いやいや……ミハル……だ、出さないで……わたくしの中に……う、産まないで……ンあ、ああ……それだけは許してえつ」

子宮内で産卵管がさらに熱く膨らむのを感じとり、ジャンヌは絶望の悲鳴を上げる。それは天使の姫にとつて死刑宣告と言つて良い。しかし手足を触手に拘束され、翼の力も封じ込まれた天使の姫に逃れる術はなかった。

「はあ、はあつ！ いいよ、その顔……ああん、昂奮しちゃう。もつともつと嫌がつて……ンああああ……もつと泣きなさいよお、アハハハツ」

部活で鍛えたしなやかな筋肉が、鋭い突きを子宮にズンズンと食い込ませる。早馬を駆るような腰つきで、処刑のカウントダウンを刻むのだ。

「ああ……だめ、だめえ……もう……だめえ」

子宮まで突き抜ける衝撃と、肉も魂もドロドロに溶かされるような快楽責めにジャンヌは目を剥いて仰け反り、ヒイヒイと顎を裏返らせることしかできない。それにつれて腰もブリッジするように反り返り、濡れた蜜肉は淫棒をさらに奥へ奥へと呑み込もうとするように蠢いた。

「はっはっ、はあつ……いくよお、ジャンヌ……んんっ……ジャンヌのオ●ンコに……ああ……出すのおつ！ 産卵するのおお……っ！」

狂ったように腰を振るミハルの渾身の一撃が、処女褰も子宮口も押し広げ、子宮の最も奥深いところで爆ぜる。

ドビュツッ！ ドビュウツッ！ ブッシャアアアアアアアアアツッ！

「あひいひい……ツツ!!」

ドブドブツと灼熱の塊を胎内に注ぎ込まれ、ジャンヌは身を引きちぎらんに振って悶絶させられた。寄生体の卵は、カエルの卵のようにゲルに包まれて数珠状に連なっており、それが子宮の内側を次々とノックしてくる感覚がたまらなかつた。

「はあああつ！ ジャンヌの子宮の中……最高に、気持ちイイツッ！ あおお……出るう……まだまだ、出ちゃううつ！」

ブリュツ……ブチュツ……コブンツッ！
それはミハルも同じことで、細い管の中を卵の粒がぐぐり抜けていくたび、擬似的な出産の悦びと射精の快感を同時に味わうことになるのだ。

「ひい、ひい、いやあああつ！ 中に……ああ……子宮に入ってくるうつ！ あ、熱いのが……お腹いっぱいにつつ！ ンああ……っ！」



爆発のように急速に膨れ上がる快美を振り払おうと首を左右に振り絶叫する天使の姫。しかし雪崩の勢いで押し寄せる官能の波から逃れる術はない。目映ゆい閃光に網膜が灼かれ、白い闇に意識が呑み込まれる。

「ンああ、あひいつ！ アクメ……くるつ……きちやうつ！ ンああおおお……イクツ！ イクツ、イクツ！ 子宮でイクツううつ！」

ギドーに教え込まれた絶頂の言葉を、獣じみた咆哮とともに迸らせる。

「イクツ!! またイクツッ！ あ、ああ、おおお！ イクのがあ……とまんないっ！ ひい、ひいっ……はひいひい……んっ！」

まるで機関銃の銃口を子宮に突っ込まれて快楽という弾丸を次々にぶち込まれているよう。一つまた一つと卵を送り込まれるたび、絶頂アクメの痙攣が走り抜けた。

紅潮した肌の下で筋肉と腱が生々しいほどに痙攣する。乳房がブルンブルンと波打ち、バラバラに乱れた金髪から汗の滴が飛び散り、開ききった花弁から濃厚な牝の芳香がムンツと強く立ち上る。眉根を寄せた美貌は苦悶とも快楽ともつかない妖艶なイキ顔を晒してしまう。処女とは思えないほどの生々しい牝の痙攣だった。

「あ、あああつ！ ジャンヌの……オ……ンコ……キユウキユ縮まるうっ！ あああ……チ……ポ食いちぎられるうっ……おお、チ……ポ溶けるうっ！」

ゼリーのようになめらかく包み込んだかと思うと一転してゴムのようになめらかに食いつめてくる。搾り取るような絶頂淫肉の蠢きが、ミハルの産卵欲求を刺激した。

「ンあああつ！ ジャンヌ、好きっ、好きなのおつ！ あふんっ、むふうんっ！ 好きだから産むのお……ああ……壊してあげる……大好きだからあ

……メチャメチャに壊してあげるよおつ！」
ゴブツ！ ドピュルルツ！ コポコポツ、ドックン、ドブンツ！

再び唇を奪い、お尻を振り立てながら、何度も何度も産卵を繰り返すミハル。

「んふぐうううっ！ ミハリゆ……ミハルの卵が……ぶはああ……入ってくりゆうっ……ああ……またイクツ……イクツ、いつちやううううっ！ ンああ……んっ！」

我が身を確実に破壊させる大量の産卵を注ぎ込まれながら、ジャンヌはこれまでで最大のエクスタシーを極めさせられていた。魂は肉体を遙か後方に引き離して飛翔し、闇と光の交錯する世界を突き抜けていく。そこが天国なのか地獄なのかも、もうわからない。

「ンあ……はああ……ジャンヌ……んふ、くちゆ」
「あ、ああ……ハアハア……ミハ……ル……はああん……んちゆっ、あふんっ」

心地よい倦怠の中、脱力し汗まみれの裸身を重ねたまま、二人はいつまでも唇を合わせ続けた。奴隷の絆を深め合うかのように……。

こうしてわたくしは淫魔ウィルスに肉体を淫らに蝕まれ、寄生体によって子宮をオーガ専用の生殖器官へと造り替えられていくことになったのです。

ギドーたちの責めは過酷を極め、アソコを呪符で封印された処女のまま、わたくしの身体は徐々にいやらしい牝の肉体へと馴致されていくのでした。そして数日が経過し、ついに処女を奪われる日が来たのです……。

気がつくときジャンヌは円形ベッドの上に仰向けにされていた。
「ハア……ハア……う、うう……ここは……？」

起き上がろうとしたが、手足は革ベルトで拘束されて、大の字に寝のまままったく身動きがとれない。いつの間にか身体中につけられたケール状のモノや頭に嵌められた金属製のリングも不気味な存在だ。しかしそれ以上に、ジャンヌ自身の肉体に異変が起きつつあった。

「うあ……あ、あつい……か、身体が……燃えるようですわ……ハアハアツ」

お腹の奥に赤熱した溶岩を流し込まれたような灼熱感で、肌という肌から夥しい汗が噴き出していた。おそろく体温は四十度近いだろうが、不思議と気分は悪くない。むしろ血湧き肉躍る奇妙な高揚感がこみ上げてくる。

「身体が火照って仕方がないのじゃろう。ククク」
「う……アナスタシア……」

部屋に入ってきたのはアナスタシア・セプティエム。ジャンヌをリブファールに召喚した魔導師の少女だったが、突然裏切り今はギドーの仲間となった。様々な淫術に長けており、寄生体や淫魔ウィルスを創ったのも彼女なのだ。

「寄生体がそなたの子宮と卵巣に定着したのじゃ。その証拠に……」

「ピリピリピリッ！
軽装服のお腹の部分が剥ぎ取られ、滑らかなお腹の肌が露出させられる。そこには、紅い痣のようなモノが浮かび上がっているではないか。

「こ、これは……」
ハートと子宮の形を組み合わせたような紋様からは、ふしだらな淫気が漂ってくる。ジャンヌの身に何かおぞましい変化が起こっていることは確かだった。

「これで亜人の仔も妊娠可能となったのじゃ。史上最強の牡であるギドーの仔を孕めるのじゃよ。嬉し

戦いは熾烈を
極めた

悪の組織
デスタリアンの
力は強大で

太陽パワー
充電!!

人類は劣勢に
追い込まれて
いた

変身!

平和を守る
正義の使者推参!

だがついに
敵本拠地を
つきとめ
逆襲に成功
した

ククク
目論見通り
現れたな

だがすでに
日本全土は
我が手中よ

負け戦と
分かってなお
戦うか

ソル!レイカ
!!

シャイニング・フォース ソルレイカー

漫画 ぱふえ
COMIC

お前さえ
倒せば戦いは
終わる!

覚悟しな
さい!!

小娘一人
でか?
よからう
直々に相手
してやる



太陽ハワー
全ッ開!!

行くわよ!

必ッ殺!!



ハアッ



さすがに
やるな!

面白いでは
ないか!!



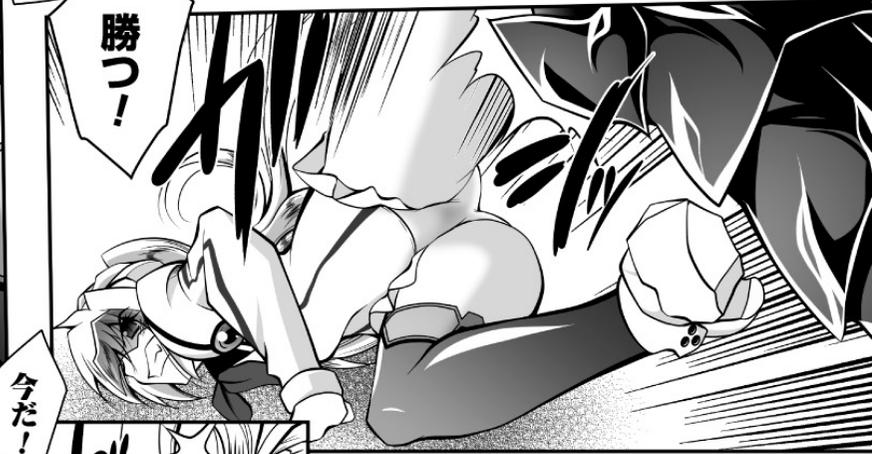
くっ
これまでの
戦いで

エネルギーが
もう…

だけど

私は…
絶対に

勝っ!



今だ!



ソル!

プラスチック
オオオオ!!

やった!?

カカ…カ
どうかな?

あれを
見ろ!

人質の命が
惜しければ
スーツの力を
オフにしろ

あの爆破装置が
見えるな?

よし
よしよし

く…
すまない

助けて!
ソルレイカー

!!
みんな!



その罰
うけて
もらうぞ

これまで
幾度も
煮え湯を
飲ませて
くれたな



変身は解除
するなよ
その格好で
闘ってやり
たいからな

くっ
…変態



ツツ
あああつ

はうッ



ああつ
卑怯者!!

正々堂々と
戦いなさい
…よお



んー?
その目は
なんだ
人質がどう
なっても良い
のかね?



いたあッ
おの…れ



あはああ

ふ...あ

くうん

あうっ

はんっ

ハハハハ
どうした

まさか鞭で
打たれて

感じている
のではない
だろうか!?

随分色っぽい
悲鳴をあげる
じゃないか!

く...は
ひゃう

な...何か
おかしい

痛い...
はずなのに
熱くて...
ムズ痒くて

ククク
媚薬に半年
漬けたんだ

調教用の鞭の
お味はどうだ

またそこを
打たれると

良い格好に
なったな
鞭の跡が
痛々しくて
そそのわ

こ…のお
変態い…
見る…なあ

ハハハハ
羞ずかしいか
だがまだまだ
これからだぞ

だっため！
やめて！！

さわらな
いでえ！

おっと
そう言えば

人質の爆弾を
止めねばな

ひあっ

歩け牝犬！
散歩の時間だ

奴らも目が
離せないだよ

ほーれ
貴様らの
憧れの

ソルレイカーの
乳だぞお

みんなに
見せないで
いやあっ

貴様ら目を
そらすなよ

惨めな牝犬に
堕ちた様を
とくと見よ!

我に逆らった
正義の味方が

待…って!
もう…打た
ないでッ

歩く…
からあ

あぁっ
痛…ああ

縄が…に
食い込んで

擦れ…て

はう

く…うう

歩けないっ
こん…な…

カッ…



打たれたくて
わざとゆっくり
歩いているな？

この淫乱
マゾめが

違…あつ
そんな…
わ…け…

ああつ

そのわりには
美味そうに

縄をくわえ
込んでいる
ではないか

愛液が溢れて
おるぞ

やああ

縄があ
擦れて

ああ…あ

すまない
ソルレイカー

俺たちが
つかまった
せいで…

ハハハハ

乳首も
ピンピンだ

歩か…
ないとお

ああ…もう
熱すぎて

く…
気に…
しないで

痛いのか
気持ちいい
のか？

私は…
大丈夫…夫
ですからあ

何でも
いいから

刺激が…
欲しい

私…何を…？

このままでは
奴の…
思う壺だ



ヒッヒッヒッ

ふあああ

ひっ
……

そおら
おまちかね
のどころに

くれて
やろう!

はううう
ッ
ッ

は…
あ…
は…
あ…

ああ

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説!

風紀
委員長

紬谷美沙緒の 痴態満説

たかおかちから

小説 / **高岡智空**

挿絵 / **ていやなか**

恥辱まみれの
生徒会長選挙が始まる!

ご注意

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~7の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

シーン1

私立鳴里学園——。

生徒総数は二百余人の進学校、その在籍者の半数以上が資産家の子息令嬢である。残りの生徒は、成績やスポーツによって奨学、特待を受ける、いわゆる一般家庭に育った少年少女だ。実力と家柄、両者の持つアドバンテージは時として軋轢を生み、いつしか生徒たちの関係は歪み始めていた。

「——で、ですから、図書委員会の予算をもう少しだけ……んあっ……」

生徒会役員との追加予算会議の席に、予算増額を訴える女子が、場に相應しからぬ甘い声を響かせる。

「わかつてますよ、宮森さん。ですから増額の代償に、役員の仕事を手伝ってもらってるんです、こうしてね」

生徒会長の証であるその男子は、恥ずかしそうに身を竦める少女を膝上に抱き寄せ、勃起した股間で小刻みに彼女のお尻を突き上げた。異性経験のない初心な図書委員長もさすがにその意味を察し、赤面して恥辱に震えるが、会長職権者によるセクハラを止める者は、この場にはいない。

学園での生徒自治は生徒会と、そのトップである生徒会長ら役員に一任されている。彼らに逆らうことはすなわち、学園での円満な生活を放棄するということ——陰湿な嫌がらせを卒業まで受け続けるか、その前に自主退学す

るか、二つに一つだった。

それだけ強大な権力を握る生徒会、特に生徒会長の席は、前会長が指名した生徒を、学園へ多額の寄付をしている資産家の子らが追認し、内定となる。後は茶番として選挙を行い、過半数の票を得た内定者が就任するのだ。

つまりこの学園は、資産家を親に持つ半数以上の生徒たちが、実質的に支配しているということだった。

追認した生徒たちは、体制を支持することで、不利益どころか甘い汁を吸える立場にいる。その権利を持たない三割ほどの一般学生が、役員による横暴の犠牲となっているのだ。いま恥辱を受けている図書委員長の宮森祥子も、そんな力なき生徒の一人である。

彼女には、前年の選挙にて現会長と、生徒会長の座を争った経緯があった。戦いに敗れて牙を折られ、会長の情婦のような立場に貶められる彼女を庇い、同じような位置に立ちたい物好きなど、いるわけもない。

「いい加減にされてはいいのですが、生徒会長。会議の時間は有限ですよ」

「……おや、これは失礼、紬谷くん。まだ君たちの予算申請を聞いていなかっただね。では風紀委員会もどうぞ」

口調こそ変わらないが、愉悦の時間を邪魔された苛立ちを表情の端に乗せしされた女生徒——紬谷美沙緒はフツと鼻で笑うと、束ねた黒髪を揺らして

凛々しく立ち上がった。

「その必要はない、小金井会長。風紀委員の予算は、昨年提示されたもので十分賄えているからな。私が言った有限というのは、こちらの仕事が滞るから早く切り上げろという意味だ」

先輩に対する丁寧な敬語は、最初の呼びかけだけだった。女子にしてはかなりの長身である体軀を誇るような美沙緒は胸を張り、一切の敬意を含まない言葉使いで、遠慮なく己の主張を口にする。凛々しく、美しい顔立ちにはハーフフレームの眼鏡をかけ、いかにもできる女という雰囲気醸しだす。その下の鋭い眼光は、まっすぐに会長を睨みつけていた。

「図書委員の予算は以前の会議で承認されている。それを難癖つけて引き伸ばし、セクハラするあなた方を眺める余裕など委員会にはないんだ」

美沙緒はズカズカと会長の下へ歩み寄ると、小さく震えていた図書委員長の手を取り、彼女の身を引き離して背後に庇う。

「大丈夫ですか、宮森先輩？」

「あ、ありがとう、美沙緒ちゃん」

昨年お世話になった先輩を助け、姫君を守る騎士のように会長と向かい立つ美沙緒。そんな風紀委員長に、小金井生徒会長はため息を吐いて返す。

「セクハラはないだろう、紬谷くん。ただのスキンシップじゃないか」

苦々しい表情を噛み殺す会長だが、その視線はいやらしく歪み、美沙緒の

身体を舐め回すように這っていた。

制服のブレザーを突き上げるバストは、学内ではFともGとも噂されている。それだけ豊満な胸でありながら腰はくびれ、手足もスラリとモデルのように長い。特に脚は、校則に従った短めのスカートから伸びだし、女性の魅力を湛えるムチムチと柔らかそうな太ももが、白い肌を見せつけていた。

階段で先を行こうものなら、脚の付け根まで見るとされるほど短い制服スカートだが、美沙緒のそれはまだ覗かれたことなどない。武道で培った正しい姿勢で歩く彼女は常に凛として、裾に一切の乱れがないからだ。

そして——常にそんな澄ました態度で振舞う彼女を疎ましく思う者は多く、この会長もまた、彼女の豊満な肉体を好きなように弄びたいと、邪な想いを抱いていた。

ただ、そんな会長の視線を受けても、美沙緒はまるで動じない。見るだけならば好きなだけ見る、下衆め——と言わんばかりに蔑んだ視線を返し、腰に手をやって会長を指差す。

「あなたがいますべき仕事は、図書委員への追加予算を承認し、会議の終わりを告げることだけだ」

「先輩に対してその態度はどうかな、紬谷くん？ 君はいいかもしれないが、そのせいで困る生徒が、君の周りにいるかもしれないよ？」

脅迫じみた言葉で圧力をかけてくる小金井、けれどその言葉を正面から受

け止め、美沙緒は微かに笑う。

「忘れたか？ 次の選挙まで、あと二週間——あなたが会長でいられるのは準備期間を除く残り一週間だ。それだけの期間でなにができる？」

「——ああ、そういえば君も立候補申請をしていたようだね。無駄な努力だとは思いますが、精々頑張りたまえよ」

火花が散るような舌戦、周囲が固唾を飲んで見守る中、それを納めたのは温厚そうな糸目の女子だった。

「お二人とも、そのくらいで。あまり選挙のことで揉められますと、両陣営候補の失格も、考慮しますのぞ」

「おっと、これは失礼したね、選挙管理委員長。袖谷くんもすまない、つい言いすぎてしまったよ」

仲裁を落とし所とし、小金井が先に謝罪する。これを受けては美沙緒も引かないわけにはいかなかった。

「こちらこそ年長者に対し、配慮が欠けていました。萩谷先輩も、申し訳ありません……仲裁に感謝します」

美沙緒の謝罪を受けた選挙管理委員長——萩谷美穂は、これにて落着と柔らかに手を叩き、その場を締める。

「では、本日の予算会議は解散ということでしょうか、会長？」

「ああ。図書委員会の予算も、明日までに手続きしておくよ」

小金井がそう付け加えると、宮森祥子も頭を下げて恐縮する。昨年であれば、この状況でも胸を張って快活に笑っていたはずの彼女が、こうまで卑屈

になった姿を見るのは、美沙緒にとつて少々心苦しいものがあった。

「では、私は風紀委員会の業務がありますので、これで失礼します」

その思いも手伝い、まだ息苦しさの残る会議室を一足早く抜けだした美沙緒は風紀委員会に向かって歩きだす。

（宮森先輩の無念、なんとしても晴らさなければ……）

昨年とは違い、今年選挙には勝算があると踏んでいる。というのはいまは、特権階級である、いわゆる資産家組の生徒数が減っているからだ。

先日、一部の資産家組の生徒に不祥事が発覚し、彼らが退学となったのが大元の原因。さらに、騒ぎを受けた別の生徒の親が寄付を渋ったこともあり、その子供たちはいま、一般生徒と同じ立場に甘んじている。

結果、甘い汁を吸えなくなった生徒たちは手の平を返したように、下の立場を代表して立候補する美沙緒を、熱烈に支持するようになったのだ。

（いまの情勢は、ほぼ五分……いや、少しこちらが有利かもしれない。もしかしたら——いや、必ずだ）

この不公平な制度を正し、あるべき学園の姿を取り戻す。美沙緒はそう誓い、眼鏡の奥で鋭く眼光を尖らせた。

◇

しかし——その翌日のこと。

「なっ……なんだとっ、そんな馬鹿な話があるか！ なぜ急に！」

まさに寝耳に水だった。

「事前に聞いた選挙規則には、いまあなたが示した資格——七日以上の役員業務経験など、どこにも書かれていない！——そもそも、そんな——」

「そんなルールであれば、生徒会役員以外の立候補ができなくなる、と言いたいのかな、袖谷風紀委員長？」

妙に落ち着いた態度を見せる小金井の姿に違和感を覚えつつも、美沙緒はそれに同意して頷く。

「ああ、その通りだ。それに役員のみ立候補となれば、同じ役員とそれに従う者に多大な便宜を図り、本来の役目である、生徒会に属する生徒全員への奉仕が怠られるかもしれない」

いまのは、美沙緒にとつてはかなりの切り込んだ言葉だった。けれど会長は動揺も見せず、ただ黙っている。

「——そうならないよう、役員外からも広く立候補を募ることが、選挙の正しい役割ではないのか？」

やむを得ずそう締めくくると、ようやく小金井が口を開いた。

「なるほど、君の言うことも一理あるだが、少し考えが足りないかな」

「なんだとっ……」

「生徒全員へ奉仕するというのが目的なら、それ以前に役員業務を経験しているべきだよ。実際に生徒会役員は、いくつかの業務で生徒たちの協力を求めている。それに参加する意欲があれば、資格は満たせるのでは？」

その返しを受け、言葉に詰まる。

確かにそれはもつともだが、役員欲する協力とは、女生徒による接待のことだ。それに反発し、美沙緒は申し出を無視していたのだが——。

（くっ……まさか、こんな形で選挙妨害を仕掛けてくるとはな……）

相手にカードを与えたことを悔いる。けれどまだ、これは正式な立候補資格として成立したわけではない。

「そ、そもそも……ルールの変更は事前に告知があり、それを協議して決めるべきではないか？」

「もちろん、だからこそ我々は一年以上の時間をかけて協議し、会議で採決もしたのだよ。なあ、萩谷？」

そこでようやく、彼の傍に控えていた萩谷美穂に話が振られた。

（採決？ 馬鹿な、いつのことだ）

美沙緒はその疑問を視線で、選挙管理委員長に訴える。しかし美穂は否定することなく、頷いて答えた。

「はい、滞りなく、昨日の予算会議の後、この件について採決したわ」

「なっ……昨日、ですって……いや、いや、待ってください！ 会議は解散と締めたのは、萩谷先輩だったはずですよ！ あれはどういうっ……」

そう食い下がる美沙緒の言葉に、美穂は小首を傾げる。だが、すぐに思いだしたらしく、いつものようにポーンと、柔らかに手を打って続けた。

「ええ、だから予算会議は解散で——規則の変更会議を、続けて行ったのよ。風紀委員会のために帰った袖谷さんは、

投票放棄扱いにしたのだけだ……もしかして、知らなかったの？」

「え、ええ、そんな話は一度も……」

「おかしいわね、委員会連絡黒板に、一ヶ月前から書いておいたはずなのに……手違いで消されたのかしら」

馬鹿な、そんな重要な事項が手違いで消えるなんて——そう言いかけた瞬間、口元を覆う小金井の手の隙間から、いやらしく歪む唇が見えた。

（まさか……いや、間違いない、こいつ……私に知らさないよう、連絡事項を消したな！ 下衆め……）

だが証拠もないし、狡猾なこの男ならば、こういつた工作には人を使っているはずだ。糾弾しなくなる感情を、理性でなんとか押さえつける。

（どうする、このままでは……）

風紀委員として役員と対立し、柔道部や空手部を使って脅しをかけられたときは、自らの力ではね除けた。予算などの金銭をチラつかせたときも、媚びず屈せず、常に堂々として恥じることなし選択をしたつもりだ。

それもこれも選挙と、その先にある学園改革のため、なのに——。

（それが、終わる……？ こんなところで……嫌だ、それだけは……）

だが、すでに十数人で採決された案件を覆すことは、たとえ経緯にミスがあつたとしても許されない。悔やんでも悔やみきれない失態に、美沙緒は俯いて唇を噛む。と——そのとき。

「では、そろそろ本題に入りましょう

か、紬谷さん？」

「え——」

美穂から急に話を振られた美沙緒は、集中していなかったせいで、つい気の抜けた返事をしてしまった。

「ですから、これから一週間——立候補資格のため、紬谷さんは役員の業務に従事しては、という提案です」

「そ……それは本当ですか！」

天から垂れた一筋の糸、その提案を聞いて美沙緒は勢いよく頭を上げる。

「……ああ、どうもそういう救済措置を取るらしいね、選挙は」

見れば小金井は渋い顔をしていた。なるほど、この委員会は選挙前にのみ結成される、予算を必要としない組織だ。支配外組織からの提案は、会長の一存で蹴れないのだろう。

美沙緒は瞬時に判断し、この提案を逃すまいと口を開く。

「こちらからは、異論などあり得ません。よろしくお願いします」

「うぐつ……仕方ないな、では……これから書類を作成する。紬谷くんは熟読し、サインを頼むよ」

害虫を噛み潰したような表情で、会長がやむなく動く。それを見た美沙緒は、どうにか窮地を脱したと、安堵のため息を吐いた。

その、一瞬前——美穂と小金井がチラリと視線を交わし、ほくそ笑んだことになど、まるで気づきもせず。

◇

美沙緒が役員の仕事を始めた当初は、

なぜ一般生徒の味方である美沙緒が役員の手伝いをしているのかと、一部で疑問の声もあつた。けれど選挙期改定の公布がされると誰もが納得し、さほどの騒ぎにはならず済んだ。

そうして、数日が経過し——。

「なに、新しい制服の試着会？」

「ああ、その通り。詳しい話は、先生方がしてくださるそうだが」

そんな話を聞かされたのは、その日の朝のことである。昼休みにデザインと着心地を試すから協力するようにと、会長から申しつけられたのだ。

昼になり生徒会室へ向かうと、女教師二人と校長、役員らが集まっていた。すでに男子二人と図書委員長の宮森祥子は、試着を済ませているらしい。

「すみません、遅れてしまったようですね。すぐに支度を」

「あら、それじゃあ夏服のモデルをお願いするわ。これに着替えてね」

女教師から紙袋を渡され、臨時の更衣室となった隣の資料室に入り、着替えようと中を開く。だが——。

「なつ……なん、だ、これは……手違いか？ こんな……これが制服ということは、まずないだろうが……」

入っていたのはノースリーブのセーラー服と、ローライズのショートパンツ、学園内で着るに相応しいとは思えない衣装だった。そういえば、あの若い女教師は派手好きの遊び人で、こんな服を好んでいたのだと思いだす。

（まったく、職場にこんな服を持って

くるとは……注意しておかなければ）

布地をしまい、美沙緒は再び生徒会室に戻る。そうして、着替えていない美沙緒を不思議そうに見つめる教師に袋を返し、そつと耳打ちした。

「あの、先生の私服が入っていたようなので……こういったものを学校に持ち込むのは、あまり……」

失礼に当たらないよう、けれど教師としての自覚を持ってもらうため、美沙緒は最低限の苦言を呈す。けれど言われた教師はきょとんとして袋を確認し、噴き出すような笑いをもらした。

「くすつ……なにを言ってるの？ これは正真正銘、新しくデザインされた夏服よ。さ、着替えてらっしゃい」

「なつ……は、馬鹿なことを言わないでください！ これが制服？ 冗談も大概にしていただきたい！」

思わず声を荒らげる、それを聞き留めたのは、もう一人の女教師だった。

「珍しいですね、優等生の紬谷さんがそんな声をだすなんて」

「す、すみません、つい……ですが、先生も確認してください。これが制服というのは、あまりにも——」

そう言っただけで制服を捨てたらうら、結果は同じだった。

「間違いないく夏服よ、これは。学園卒業の有名なデザイナーがデザインしてくれてね、それを推して学園の売りにする、というのが目的なのよ」

「だ、だからと言って……これはあまりにも破廉恥です！ これを売りにす

るなど、不利益にしかありません！
デザインの再考を希望します！」

「意図はわかるが、感情からも倫理観からも納得できない。こんなものが指定制服になれば女子は嫌がり、男子も目のやり場に困るだろう。健全な学園生活の妨げになる異物、それが正直な感想だった。けれど——」

「まあまあ、袖谷くん。あまりわがまを言うものではないよ」

「校長先生、ですが……」

冷静さを欠いて食ってかかる美沙緒を制し、校長がゆったりと話す。

「デザイナーの彼は、卒業後も講演や寄付で、学園を支えてくれている。そんな彼に、学園制服をデザインさせて欲しいと頼まれてね。支援のお礼をかねて、協力を申し出たのだよ」

「言いながら女教師から袋を受け取り、美沙緒の手元に渡してくる。」

「初めてのデザイナーだ、確かに不備はあるかもしれない。その不備を試着してから探し、改善点を提示することは、彼への仁義を果たす目的からして間違っていないだろう？」

「そ、それは……そう、ですが……」

丸め込まれているとは思いが、正論である上に、義理人情を持ちだされては、感情で反対するのは難しい。

「まあまあ、どうしても無理だというなら仕方ないですよ、先生方」

そこへ、追い打ちをかけるような小金井の言葉が響く。

「袖谷くん、残念だけどここまでのよ

うだね。まあ立候補できなくとも、君が得たい人材なのは間違いないさ。これからの活躍も、期待しているよ」

「ま、待て……」

声をかけようとするが、それよりも早く小金井は校長の手から夏服の入った袋を取り、宮森に渡す。

「すまないが宮森くん、次はこれの着心地を試してもらえるかな？ 彼女は着たくないそうだからね」

「つ……は、はい……すぐに……」

半ば命令のような頼みを拒否できず、ビクツと肩を竦ませて、宮森祥子が袋を手にした。すでに中身を知っているのだろう、彼女は顔を真っ赤に染め、おろおろと戸惑っている。

けれど誰も、少女を氣遣ったりはしない。小金井などニヤニヤと笑い、自分に張り合おうとした少女がどんな恥ずかしい服装になるのかと、待ち侘びているようにも見えた。と——

「ま……待てと言っているだろう！」

そこで美沙緒は大声で叫び、彼らの強要を制止する。彼女に恥ずかしい格好を強いる原因が、自分のわがままであることを、公明正大な風紀委員長に看過できるはずもなかった。

「つ……貸してください、先輩……すみません、自分のせいで……」

「う、ううん、そんなこと……ありがとう、ごめんね……」

美沙緒は教師たちに頭を下げ、再び隣の部屋へ向かおうとしたが、その直前で足を止め、女教師に訴える。

「あ、の……せめて、男子生徒と校長先生は、席を外していただけませんか？ お願います……」

これからこの破廉恥なデザイナーの服を着る、それだけでも恥辱の極みだというのに、それを異性に見られるなど、耐えがたい羞恥だった。

「い、いや、それは……そうだ、ワシには確認する義務が——」

「まあいいじゃないですか、校長先生。ここは女性陣にお任せしましょう」

そのとき、なにか企むような視線が会長と校長の間に走ったのを、美沙緒は見逃さなかった。

（なにを企んでいる、小金井——）
だがこうして校長まで追いだした以上、やっぱり嫌だと撤回することもできないだろう。美沙緒はため息を吐き、渋々と着替えに向かった。

◇

「こ、これは、やはり……くっ……」

冬服から、新デザイナーの夏服という薄着に着替え、その露出はとんでもないことになった。

腕はすべて剥きだしで、二の腕から先はもろもろのこと、肩や腋までが真っ白な肌を晒してしまっている。お腹は臍から胸の下まで丸見え、そして下半身を包むショートパンツがローライズすぎるため、下腹部の真ん中くらいまでが布地に覆われていなかった。

ショートパンツ自体もかなりハイレグ気味の形をしているせいで、太ももは付け根まで丸見え、お尻だつて半分

くらい見えている。
（こつ……こんな、制服……やはりあり得ない、馬鹿げている……）
けれど、この格好をするだけなら、まだマシかもしれない。問題は制服チエックを理由に、女教師が美沙緒の身体を撫で回している、この状況だ。

「ふうん、メッシュ生地かしら」

「下着は透けてないわ、安心ね」

口調こそ真面目に確認しているようだが、指先がショートパンツの裾から入り込んだり、胸のスカーフを盛り上げられる乳房を拗り上げたりと、時折いやらしい動きを見せている。ひと言注意すれば手は遠ざかる、けれどすぐにその動きは再開し、美沙緒のあちこちを撫で回し、刺激してきた。

（どういう、つもりだつ……くっ、しかもこの二人、たちが悪い……つ）

小金井とのやり取りを聞かれてしまったせいで、強く抵抗すると教師二人はこぞつてささやいてくる。

やめてもいいけど、生徒会の仕事は手伝えなくなっちゃうわよ——と。
（なるほどな、こんな方法で私に辞退させようとは……つ）

あまりに下卑た策に、頭が痛くなる。けれどその痛みに頭を抱える余裕もなく、女教師らのセクハラは続く。

「はうっ、んっ……んうっ、ま、だ……ですか、もう……くふうっ……」
抵抗もできぬまま女生徒数名の前で辱められ、美沙緒は懸命に唇を引き締める。そうしなければ女教師たちの手

つきに反応して、甘い声が漏れそうだった。そんな美沙緒の反応を看破した教師が大胆に手を動かし、掬い上げた乳房の先端に指先を掠らせる。

「んあつっ！ あつ、ふっ……な、なにをするんですっ……くうっ……」

「あら、ごめんなさい。汚れかと思っただけ、気のせいだったわ」

「そうごまかす三十路教師の唇には、以前に小金井が見せたものと同じ、どこかいやらしい気配があった。」

「あーっ、いつけない！」

と——そのとき突然、若い女教師が頓狂な声を響かせる。そしてカバンから口の広いペットボトルを取りだし、美沙緒に笑顔を向けた。

「ごめんなさい、紬谷さん？ これで制服を濡らしてもらえるかしら。夏にはわか雨が多いから、濡れた状態でも調べておきたいんですって」

「はっ、あ……あい、んっ……」

女教師の指に、または乳首を撫でられる。その瞬間、ピリッと電流のような刺激が胸奥へ伝い、背筋が切なくなっていくのを感じて、思わず美沙緒は身を振って脚をくねらせた。

「なっ……なんだ、いまのは……まさか……いい、いや、ありえんっ……」

経験はないが、知識として知っている「あの感覚」かと一瞬だけ思ったが、こんな辱めを受けている中で、それはないと思ひ直す。

「どうしたの、早くしてよ」

「あ、は、はいっ……んっ……」

ボトルを開けて、中身を手の平に流す。化粧水を少しだけ濃くしたような微かにヌルリとする液体だった。

「これは？」

「ローション化粧水よ。普通の水だったら、床まで濡れちゃうでしょ？」

なるほどと納得し、うつすらと花の香りが漂うその液を制服にかけてゆく。ドロリとした感触はすぐ生地に吸いこまれ、まるで泥のように制服が肌に絡みついてきた。と——

（ふうっ、んっっ?! あつ、くっ……なんだ、また……くふうっ……んっ、む、胸に、刺激が……あうっ……）

肩口から垂らしたせいとか、流れ落ちる薄粘液に、乳房が満遍なく撫でられる。その瞬間、先ほどよりも僅かに強く、心地よい刺激が、背筋を這い舐めながら頭の裏側を痺れさせた。

「んっ……こ、これ……ひうっっ！ 待って……んあつ、ああつっ！」

「ん、なあに？ ローションをかけるの、手伝ってあげてるだけじゃない……変な声ださないでよね」

ボトルは一本ではなかつたらしく、二人の教師もそれを逆さにし、背中と腰に中身を注ぎ込んでくる。同時に、制服越しにその粘液を採みしだき、まるで肌に染み込ませるように、何度も何度も肌を擦られてしまう。

（なっ、んだ……こ、れ……あぐっ、ひふうっ！ んあつ、ああんっ！）

違和感を覚えるのに、どうすればそれから逃れられるか、上手く頭が働いてくれなくなっていた。粘液を擦りつけられると肌が火照り、その熱が身体に食い込んで、思考を蕩かしているような感覚に、全身を支配される。

気がつくとも上半身のセーラー服はグチョドロ、ショートパンツも完璧にローション塗れになって、上下の下着も用を為さないほどに濡れていた。

（あつ、ふっ……んっ、そ、そおだつ、はあんっ！ どうしてえ……下着、ぬ、脱がないで、こんなっ……）

ローションを渡されたときから、そんな判断力を失っていたのだと気づく。だがその原因はわからない、考えようとしても、身体中から立ち上る甘い花の香りが思考を遮る。

「濡れてもブラは透けないわね、なるほど……さ、ちよつとずらすわよ」

「だ、めえ……んあつ……」

両手を取られ、ホックを外されたブラが抜き取られる。その瞬間、押さえつけられていた豊乳がブルンツと跳ね弾み、濡れた制服の裏地で乳首が擦られてしまった。刹那、ニブルを齧られたような刺激を感じ、美沙緒は思わず腰を跳ねさせ、甘く喘ぎをもらす。

「んひやくううっ！ いった、はっ……ら、ひ、ひま、ろお……んああつっ！」

「くすくすっ、すごい効き目ねえ……やるじゃない、化学部って」

腋下から入り込む手の平に、濡れた乳房が採みしだかれる。別の手はショーツの奥に滑り込んで、ローション塗れの淫裂を指先で掻き回していた。

「きゃひいっつ！ ひゃんっ！」

膣口を指腹が押し込むようにして、肉壁に隠れる桃色粘膜が何度も撫でられる。そのたびに喘ぎを震わせ、美沙緒は二人の女教師の腕の中、理性も蕩け落ちたように、繰り返し身を痙攣させて、快感に悶えてしまう。

（あいつ、あえつ、へええつ！ へ、んっ、な……なに、ひゃっ……）

落ちそうになる腰を支えられ、太ももを擦られながら、膝で股間を押し上げられる。ゾクンツと性衝動が突き上げ、胸を反らして喘いだ瞬間、制服に浮かぶポッチリとした乳頭を抓られ、そこを支えに豊乳を持ち上げられてゆく。痛はずなのに甘い刺激が乳房を満たし、全身の筋力が弛緩したようにグツタリと脱力させられていた。

（はひっ、んっ……んああ……）

蕩けた頭で思考が霞む、その耳元へ教師たちの声が滑り込んでくる。

「そろそろかしら……ねえ、紬谷さん？ 実はこれから、教員会議があるの……それで、悪いんだけど」

「生徒会役員の仕事として、そのお手伝いをしてもらえない？ もちろん、その衣装のままだね？」

◆はい、わかりましたあ……

↓シーン2へ

◆だめ、だ……吞まれては……

↓シーン3へ

シーン2

「はあ……い、わかり、ました……」

美沙緒の返事を聞いて、ニヤリと二人の女教師が唇を歪める。愛撫をやめた二人は美沙緒の両腕を搦め捕り、耳元に舌を這わせながらささやいた。

「もう、他の役員のコたちも行つてはらずよ……急ぎましようねえ」

◇

連れていかれた先は、出入りしたところのある職員会議室の、もう一つ奥の部屋らしい。生徒の立ち入りが禁止される資料室と言われていたが、その実態はいくつかのテーブルとソファを並べ、怪しげなアロマを焚き、ムードライトに照らされた大部屋だった。

ソファに座るのは教師たちや、学園理事たち。その各テーブルには制服を着た女子生徒がついて酌をし、あらゆる意味で濃厚な接待をしている。

「さあ袖谷くん、理事長に最高のおもてなしをするのだぞ、ふふふ」

美沙緒がつくのは校長、そして理事長が座る最奥のテーブルだ。どういふ足取りでここまで来たのか、それさえも覚えていないボンヤリした頭は、この部屋に入つてさらに霞んできたように思う。けれど命令されると、それが正しいことだと勝手に思え、疑いも持たずに美沙緒は酒瓶を手にした。

（そう、だ……役員の仕事だと、だから……選挙の、ためにも……）

見れば周囲のテーブルの女子は、参

与という役職を持つ、生徒会役員たちだった。彼女らは制服をはだけさせ、短いスカートとさらけにめくつて脚の付け根を覗かせ、中年男性たちの手を誘い込んでいる。その光景を見るだけで、女教師から与えられた快感を身体が思いだし、淫熱が胸の奥にポツと灯る。

「しかし、随分といやらしい服装をしているなあ、君は。聞けば風紀委員だというのに、いけないコだねえ」

「ふえ……んひやうつ?! あつ、ひやんつ……は、い……んあつ……」

言われてようやく、自分があの破廉恥極まりない制服姿だったことを思いだす。そんな姿で理事長に抱き寄せられ、ゴツゴツとした手が剥きだしの腋を撫でながら、大きく膨らんだノーブラの胸元へ伸びる。

（あ……ら、めえ……んきゅつ!）

揉むのではなく、浮き上がった肉粒を摘み上げ、豊乳を引き上げられる。衝撃に跳ねた身を抱きかかえられ、そのまま着地したのは膝の上だった。

「おおつ、これはなんと……いやらしいサイズだねえ、何かツブだい?」

「あうんつ……ん、じ……Gカップ、れす……んひゅつ、ふああ……」

感嘆のため息をもらした理事長は、すぐに鼻息を荒くし、制服の裾から手を滑らせる。ゴム球を捏ねるような手つきで、美沙緒の肉丘を荒々しく揉みしだき、片方の手でショーツパンツのファスナーを器用に下ろした。

変わった形状のファスナーは股間の

真下まで繋がっており、それを開ききると、すでにグチョ濡れのショーツに形を浮かび上がらせた、美沙緒の淫靡な谷間が姿を覗かせる。

「テーブルに手をつけて、そこに立ちなさい。ほら、腰を突きだして」

「は、はい……あつ、やつ……んつ」

言われるがまま、ソファに座る理事長の顔目がけてお尻を突き出す、卑猥で恥知らずな姿を晒す。淫裂は理事長の前で、倒した上半身からダラリと下がった肉塊は、実った果実のように揺られて、正面に座る校長の前で、見世物となつてしまった。

（はつ、ふつ……ん、み、見られてえ……あああ、でも……ほかの役員もしているし、仕方な——んはあつ?!）

羞恥に頭を火照らせている、そんな美沙緒の虚をついて、理事長の手がショーツの奥に食い込んでくる。途端に、ブチュウウツと音を響かせて粘つこい淫蜜が弾け、指先が蠢くたびにショーツに染みだしながら、太ももを伝う恥ずかしい液が溢れてしまう。

「はひやああつ! んらつ、らめ、れすうつ……そ、そこ……あうつ!」

「ダメとはひどいなあ、君は選挙のために、接待しているんだらう? それならきちんとおねだりしなさいと、触つてくさい、支援してくださいと」

おかしい——と、なにかが警告をささやく。けれど、言葉を催促する理事長に尻肉をビシヤリツと打たれるとその痛みと屈辱に思考が薄れ、反射的

に口から言葉が飛びだしていた。

「んひやうつ! は、はいつ、支援してください、選挙の、ために……あうつ、さ、触つてえ……んつつ!」

ショーツごとショーツパンツがずり下ろされ、お尻の谷間に熱い感触が擦れる。胸と股間を中年の指に弄られ、切ない感覚がムズムズと身を蕩かしてゆく。蕩けた意思と身体をさらに攪拌するように、お尻に押し当てられる熱塊が、尻肉をつつき回す。

「ふやあ……あうつ、はんつ……」

「ぐふふふ、いい顔になつてきたじゃないか、袖谷くん……ほれ、ワシにも接待せい。先の非礼の詫びもな」

「んぐうつ?! ふあつ、んむつ……」

唇になにか、苦い液体を注がれる。それを飲むのかと思つたが、そうする前に生臭い感触が唇を塞ぎ、口内に溜まったそれをジュルジュルと吸り上げた。唇から液体が奪われ、こぼれた分が制服を濡らし、ポタポタと床に滴り落ちる。

（はあんつ、き……もち、いつ……）

身体が熱い、頭が痺れる。いまの液体が少し体内に入ったせいとか、お腹の底に燃えるような熱が渦巻いていた。

「こつちを見て……笑顔を見せろ」

向けられるレンズの輝きがなんなのか、理解も追いつかないままに、美沙緒はピースサインを向ける。

その光景は各教室のテレビへ、昼休みの間中、流れ続けていた——。

BAD END

巨大な竜の生け贄は
哀れな少女……!?

さあ主様この娘が
今回の供物ですわ

そろそろ今宵の
祭も終わりです…

今度の生け贄は
どこの娘に
なったんだ?

さあ…どっかから来た
旅人の娘と聞いたが

女教
竜調教
りゅうかんちようきよう

とうせん
漫画 COMIC 冬扇

ほう…これはなかなか
美味そうな娘だ

では早速
いただきますわ…

オオオオ

レロオ

ぐわ…

ギョッ

ザッ

ザッ

ゴゴゴゴ

よくも汚い舌で
紙めやがって…

油断したな？
ここまで私に
近づくなんて…

む…!?

覚悟は出来てン
だろウなア!?

変態竜野郎!!

ここいらの主でたんまり
財宝持つてるらしいな!!

貴様の首と財宝頂くぞー

…残念そうは
させません

っ!?



なんだこの触手…!?
抜け出せない…体も痺れて…

くっ…
ち力が抜ける…

さっきまでの触手と
全然力が違う…!?

下手に私の本性を現したら
警戒されて逃がすところ
でした…

私も貴女と同じ魔人ですわ
以前不意打ちで
貴女に滅ぼされたね

…その時と全く同じ手口で
仕掛けてくるなんて
貴女も芸がないですわね

ふふまんまと
ひっかかりましたわね

!?

貴様…
手下もろともキッチリ
殲滅してやった
はずだろーが…

そうでもお生憎様
生き延びた私は
ここに行き着いて
主様の配下に
なりましたの

…までラーネアよ
そいつの方
憎しいと思わんか?

こんなところで
あの時の恨みが返せるとは
思いませんでしたわ

ふふじゃあ皆で
鬨り殺しにでも
しましょうか?

主様何を世迷い言を…

確かに魔力は
恐ろしいモノでしたけれど

ならよいではないか
俺の配下にするぞ

は配下…!!
冗談じゃな…

イ
ク
ク
ク

…やめたほうが
いいですわ主様

いつ寝首を掻かれるか
わかったものでは
ありません

おおい…

お前も似たような
ものだったろう…

ならやる事は一緒だ
お前を墮とした方法で
やるまでだ

それならまあ…
でもそんなの私が
面白くないですわね…

そうだしばらく私に
鬱憤を晴ら…いや調教
させてくれませんか？

私の触手を
最大限に使う
いい機会ですわ

うまくいけば—

ままで…私を置いて
話を進めるんじゃねえ!!

い

ん

ん

ん



わ私の財宝と領土の半分…
いいや三分の二をやるう！

それで私を解放しろ!!

…貴女私も含め…
周辺諸国を荒らしまわって

結構お持ちでしたわね…
それは魅力的な条件ですわ

そそうだろう？
私と引き換えに
それだけ手に…

でも駄目です♥

!?

ブルンッ



ほらお前達
たっぷり見てみなさい...

あの怖ろしい魔人の
あられもない姿ですわ♥

あっ



おおお...

あの悪魔のような奴が
こんなにエロい体をして
いるとは...

たぽっ

たぽっ



わ私の体誰にだって
触らせたじつすらならさるの...

え...

それなのに
こんな下賤な奴らに
見られながら...ッ!

ひゃうっひゃうっ!!

たぽっ

たぽっ

たぽっ

たぽっ

たぽっ

あれ？
なんですその反応

随分と敏感みたいですねわ…

へえ…
使い込まれてなくて
綺麗なものですな

あつやめ

あつあつ

あんっ

あれだけ
傍若無人な魔人様だから
てっきり経験豊富なものだ
と
思っていました♡

ん…
おいひ…♡

ひあり

この…

!!



やはりお前のような奴は
快楽と屈辱に
塗れさせるのが一番だね♥

ひい!!

やめろっ…

もう
やめろおおい

おやおおっ
おおっ
おおっ

やめろっ
あぁあぁ
あぁあぁ

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ

おっ

おっ

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ

おっ

おっ

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ

おっ
おっ
おっ



…調教の経過は
どうだね？
…主を取り戻しに来た
奴の手下をとらえてからは
従順なようだが

あふっ…
ももっとお…♡

ああっ

いやあ…
メメリア様あっ

うーん…
表面上は堕ちたように
見えますけど…
油断ならない魔人ですし
自信はありませんわ…

このままで
終わるものか…
あじむにまで
酷いことじゃが…



ふむ…なら念のためだ
やはり俺が犯してやろう

肉付きがよくて
なかなか具合がよさそうだ

少々嫉妬して
しまいますわね…



おお…
久々の主様の伽だ

えあ…？
かっ

これはいいモノが
見られるぞ…

力がたまったら…
貴様ら皆殺した…!!

キリッ

退魔巫女 遥碑村

ひらひ ぼるか

羞悦の調教

小説 あまとゆうき 天戸祐輝

挿絵 ムシ

清廉な巫女を待ち受ける、恥辱の
公開調教が幕を上げる!!



深い森の中にある場違いな洋館。密教の居城と噂されているその不気味な館の中を、巫女装束に身を包んだ少女は歩いていった。

「ここが、あの事件の本拠地なのは確かかなようね」

漂う魔の気配に、退魔師一族の巫女、村碑遙は澄んだ声で呟く。

近年多発している少女消失事件。その事件に、太古から闇に紛れて人々を襲う魔物が関係していたのは気付いていた。

だが、村碑一族はずっとその拠点を突きとめられないでいたのだ。

しかし、先日その状況が変わる。この教団の信者という男が「儀式として連れてきた少女を魔物に犯させている」と伝えてきたのだ。

その情報に信憑性を感じた村碑一族は、最強の退魔刀使いで巫女姫と呼ばれる遙を送り込んだのである。

「ここから入れ。つてことかしら？」

道案内のように開いていたドアを見つめ、教祖らしき者の部屋に入る。

「趣味の悪いこと」

部屋の中を見回し、その内装に呆れた。

至る所に罫紙や悪魔の絵画が飾られ、薄暗い地下へ足を踏み入れる。

「あそこね」

開けられたままの床の上げ扉を見つめ、薄暗い地下へ足を踏み入れる。

もとは洞窟だったらしい壁面には篝火が灯され、彼女の行く先へと続いて

いた。

「地獄への道案内かしらね、クス」

篝火で大人びた美貌を浮き出させた遙は、整った唇で笑みを作り洞窟の奥へと向かう。

切れ長な紫の瞳は少しの変化も見逃さないと壁面を見つめ、いつ魔物が現れてもいいように左手の親指が刀の柄にかかっている。

「あそこかしら？」

洞窟の奥から感じた魔物の気配に引き締め、セミロングの黒髪を靡かせて身を隠す。

「んあッ、あううッ……も、もう許して……くうあああッ！」

「グルルッ、グルルルッ！」

洞窟の先にあつた広いドーム状の空間に出た彼女は、そこで一人の少女がトカゲ型の魔物に犯されているのを見つけた。

その少女の秘孔からは白濁液が溢れ、床に伝わっている。

「遥様、こちらです」

岩陰に身を隠していた男性信者に小声で呼ばれ、退魔巫女は気配を消して彼の下に駆け寄る。

彼女をここへ導いたのは、この男性信者だ。

魔物の仔を孕ませる行いに憤った彼は、危険も顧みず遥の一族に連絡をとってくれた。

そのおかげで、彼女は楽に侵入できたのである。

「（あんなに酷いことを……）」

「んあッ、あッあッあッ、ヤダ、ヤダあああああッ！」

状況を聞こうと信徒に話しかけたときだった。

突然、甲高い声が洞窟内に響き渡る。視線を少女に戻せば魔物がバツクの体位で身体を震わせ、秘孔からゴボゴボと溢れるほど陵辱液を注ぎ込んでいる。

（酷すぎるわ……。人を魔物の性欲の捌け口にするなんてッ）

あまりの非道さに、血が滲むほど唇を噛み締める。

「（そろそろ神魔王様が側近を連れて現れます）」

「（そう）」

彼の言葉に違和感を覚えながらも、遥は怒りを堪えていた。

膣内射精をされても少女は解放されず、そのまま魔物に貫かれている。

「ほっほっほっ。その娘の具合はどうかの？」

教祖の部屋へと繋がる洞窟から、黒い宮司服にどす黒いマントを羽織った老紳士が現れた。

彼の後ろには、くすんだ血色の上着と袴姿の男たちが随伴している。

「もう俺の仔を孕んでいるぞ」

老紳士の声に魔物が答えた。

「それはなによりじゃ。今宵は僕も楽しめそうじゃよ。なにせ、霊力の強い巫女が居るからのう」

「……!?」

彼の言葉に驚愕した遥が隣を見てみれば、男性信徒がニヤリと笑った。

「まさか……」

「気付くのが遅いですよ、巫女様」

もう疑う余地はない。

遥は咄嗟に彼を突き飛ばし、岩陰から姿を現して退魔刀を抜き放つ。

「ほう、自分から姿を見せるとは、ずいぶんと胆の座った巫女じゃのう」

細身にスタイルのいい身体を舐めまわすように見られ、遥は老紳士の視線に吐き気を覚えた。

「僕はこの密教の教祖、神魔王と呼ばれる者じゃ」

「ご親切な名乗り、お礼を言うべきかしら？」

「別にいらぬよ。お主には僕の役に立つてもらう予定じゃからのう」

「私が？ 冗談ではないわっ」

「そうか、それは残念じゃ。しかし、お主の意志など関係はないがのう」

遥の返答を最初から分かっていたのだらう。神魔王は眼を赤く光らせ、背後に居た者たちと少女を犯している魔物に合図を送った。

「女っ、この女も犯すっ！」

一番乗りを声をあげ、少女を犯していたトカゲ型魔物が遙に襲い掛かる。

「この程度の魔物でっ」

退魔巫女は動じず、半回転と同時に刀を振り難いだ。

声もなく上半身と下半身が分離する魔物。だが彼女はその魔物を見ることもなく刀を返し、続いて襲い掛かってくる随伴の者たちと対峙する。

人の姿からトカゲ型や鬼、ゲル状人狼やオークなどに變化した魔物憑きたちは、みな牙や爪を光らせていた。

「くっ」

飛び退いて攻撃をかわす。

上着の合わせ目が乱れ、Dカップの柔房を包む白いブラが見られるが気にしてられない。

この魔物たちの力は、彼女が今まで戦ってきた魔物の力を大きく凌駕している。

「この魔物、いったいなんなのっ」

赤い眼で見られるだけで身がすくみ、身体の動きが重くなる。

それほどまでに魔物たちの気配が強くと、肉体に害を及ぼしているのだ。

「ゲルル、終わりだ小娘っ」

「犯してやる、犯してやるぞっ」

人狼の爪を紙一重で避け、オークの肩を踏み台にして洞窟に逃げ込む。

「これでここからっ」

「甘いぞ、退魔師の女よ」

少しでも有利な地上へ逃げ出そうとした直後。神魔官が突然目の前に現れ、遙のお腹に強烈な拳を叩き込んだ。

「がふっ」

息が詰まり、完全に動きが止まる。あまりに強力な一撃に視界は歪み、意識が闇に包み込まれた。

「ゲルル、俺のものだ」

「犯してやる、犯すぞ」

下卑た魔物の声が聞こえ、身体に幾つもの手が這わされる。

その気持ち悪さを感じる中、遙は完

全に意識を失ってしまった。

※

「ん……んん……」

ひんやりとした空気の中、退魔巫女は頬に落ちた水の冷たさで目を覚ました。

「ここは……」

薄く瞳を開き、見えた薄暗い岩壁で意識を戻す。

「わ、私っ」

硬い岩床から上半身を起こした遙は、確かめるように身に着けている巫女装束を掴んだ。

意識を失う前、幾多の魔物に巫女装束を脱がされた記憶がある。

しかし、身体には陵辱された痕も、肉体を傷つけられた痛みもない。

「これは……?」

確認するように胸元に触れた途端、胸に直接感じた布の感触に美貌を強張らせる。

「な、なんなの、この下着はッ!!」

胸元を覗き込んで言葉を失う。

清楚な下着ではなく、カップのない黒いコルセットを着けられていたのだ。

意識を下半身に集中させてみれば、大事な部分を包む布は小さく、お尻に至っては紐の感触しかない。

「わ、私はなにを……」

自分の身になが起こつたのか分からない。

傷つけられず、陵辱もされずに下着だけ替えられている。

遙は決して自分では身に着けない下

着に頬を染め、合わせが乱れないようにギュッと握りしめた。

「ようやくお目覚めですか、退魔師の小娘」

「神魔官……?」

老紳士の姿に唇を噛み締める。

「危害は加えてませんぞ。お主にはその身体を使って僕の役に立つてもらおう予定じゃからな」

「そんな目にあうくらいなら、舌を噛んだ方がマシよ」

「ほう、さすがは巫女というべきかのう。じゃが、お主の返答など意味はないぞ」

「っ」

服を透視するように身体中を見られ、遙は巫女装束の上から胸と淫部を押さえた。

「しかし、お主を僕の教団のために利用するだけでは面白みに欠ける。そこで、一つゲームをしようではないか」

「ゲーム?」

訝しげな表情で聞き返す。

「そうじゃ、この教団内の人間には魔物が取り憑いている者がある。それらを一時間以内に見つけて倒すのじゃ」

大仰に両手を広げ、老人とは思えない声を張り上げた。

「それじゃあ、先ずあなたから倒してもいいわよね」

無造作に置かれていた退魔刀を掴み、抜き放った刃を神魔官に向ける。

彼は恐ろしいほどの魔の気配を放っている。それは強すぎ、古の時代に

人類を滅ぼしかけた悪魔というべきものだ。

「ほっほっほっ、気付いておったか。僕の命が欲しければ、教団内に散らばった魔物憑きをすべて倒すのじゃな」

神魔官がマントを靡かせて跳び、霧散するように姿を消した。

「もし時間内に倒せなかつたときは、教団に居る人間どもは魔物の餌じゃ。無知な者を守るためにも、早くゲームを終わらせるがよい」

「待ちなさいっ」

叫ぶが、すでに神魔官の姿はない。

「すべての魔物って、いったいどれくらい……、もうっ」

足袋とは違う感触を足裏に覚えながら、遙は洞窟の出口に向かって走る。

「な、なんだこの女はっ」

「どこから……ギイガアアアッ!」

「邪魔しないでっ」

洞窟から神魔官の部屋に出る手前で、見張りに立っていた二人の男が彼女に気付いた。

だが、止まってなどいられない。

遙は迷うことなく刀を抜き、魔物が取り憑いた証である赤い眼を光らせている男を斬り裂く。

「ほっほっ、非道な小娘じゃの」

「うるさい、だまりなさいっ」

どこからか聞こえた声に、洞窟から飛び出しながら答える。

「さて、どれくらい頑張れるのか見ものじゃな」

「この……っ」

苦々しく美貌を歪めながらも、遙は額に汗を滲ませて次の気配へ向かう。

「人殺し」「悪魔」「化け物」

赤い眼をした信徒を見つけては倒す遥の姿に、何も知らない一般信徒たちから罵声が飛ぶ。

（私はあなたたちを助けるためにっ）信徒たちの言葉に悲しみを覚えながらも、退魔巫女は走り続ける。

魔物が憑いているのは教団の中でも身分の高い者たち。だが、その数が分らない。

疲れの表情を浮かべながらも、遥は多数の魔の気配が渦巻く広い部屋へと入った。

「な、なに者……ギヤアアッ！」

最初に遙に気付いた魔憑きを斬り倒した直後、彼女の背後から赤眼の信者が襲い掛かる。

「おとなしくその身を捧げろっ」

「くっ」
魔の気配に気付き、振り向きざまに背後に居た相手に刀を向ける。

しかし……

ズサッ！

「ひいああっ！ 痛い、痛いっ！」
斬り倒そうとしていた魔憑きは刀が当たる直前、近くにいた男性信徒を盾にした。

「そ、そんな……」

手に残る感触に身体が震え、床を転がりまわる信徒から目が離せない。

「わ、私は、斬るつもりなんて……」
男性信徒の悲鳴に、何人もの一般信

徒たちが部屋の中に現れた。

「ひ、人殺しっ！」

「俺たちの仲間をよくも」

「仕返した、同じ思いをさせてやる」

「っ!？」

信徒に続き、地下で神魔官に随伴していた魔物憑きたちが鞭を持って現れ、赤い眼を光らせながら遙を取り囲む。

「あ、あなたたちは……」

彼らに気付くが、人を斬った恐ろしさで身体が思うように動けない。

「神魔官様がおっしゃっていたっ、この女には悪魔が取り憑いていると。我らを殺すこの異教の女を、今から俺たちが調伏してやるっ」

「や、やめ……あうっ!？」

「ピシッ！ ピシッ！ ピシユッ！」

「ひいああああっ！」

風切り音が鳴り、退魔巫女に鞭が叩きつけられた。

まだ動きのとれない身体は複数の鞭に操られるように揺り動かされ、巫女装束に無数の裂け目を刻まれていく。

「くあつ、あぐつ、あうつ、ひいっ」

巫女装束の裂け目から白い肌が見え、彼女の唇から苦痛の呻きが洩れる。

「意外に容易かったのう」

呻く声が続く中、神魔官がゆつたりとした足取りで部屋に現れた。

「巫女に取り憑くとは、おそれを知らぬ悪魔じゃ」

神魔官の言葉に、信徒たちが信じきつた目で遙を蔑む。

「な、なにを言っているの？ 魔物が

取り憑いているのはあなたたち……」

「ピシイイイッ！」

「あああうっ！」

背中叩きつけられた鞭で言葉が止められた。

裂けた巫女装束の背中からは白い肌が見え、うっすらと赤くなっていく様子が窺える。

「まだ、自分が悪魔だとは認めないのかね」

「だ、誰が悪魔なのよ……、はあはあ、私はあなたたちを退治に……」

「ピシッ、ピシッ、ピシッ！」

「ひいっ！ はあはあはあ……」

自分を悪魔と認める言葉以外許さない。とはかりに鞭が振られる。

痛みで体力は削られ、呼吸がどんどん荒くなっていく。

「ほう、まだ認めぬとは、よほど強い悪魔が取り憑いているようじゃな。これは、儂らが愛をもって肉体の内部から祓うしかなさそうじゃ」

「い、いい加減にしなさい。魔物……魔物が取り憑いているのはあなたたちの方じゃなっ」

このままでは自分の身が危ない。

そう直感した退魔巫女は鞭に打たれながらも、刀を持つ手に力を込めた。

「それを放せっ」

「ピシイイイイイイッ！」

「くひいひいひい……っ！」

抵抗を見せた姿に、数人の魔物憑きが同時に鞭を打ち付ける。

最大の痛みを与えられた遙は仰け反

ったまま硬直し、刀を手放しながら倒れ込んだ。

「うあ……はあはあはあ……あく」

しなを作るように床に倒れたまま、退魔巫女は息を荒らげた。

全身に感じる痛みはヒリヒリとした痺れに変わり、裂けた巫女装束の胸元からは薄ピンクの乳輪が覗ける。

「この巫女は人の愛を知らないゆえに悪魔に取り憑かれ、刀を用いて残酷な行いをしたのじゃ」

神魔官が呼吸を整えている退魔巫女のそばに立ち、信者に説き始めた。

「人の愛とは心の支えじゃ。その心の支えを今からこの巫女に教え、取り憑いた悪魔を祓ってみせようぞ」

その言葉を切っ掛けに、鞭を振っていた魔物憑きたちが遙に襲い掛かる。

「や、やめなさいっ。さわらないで……、汚い手で……あうっ」

巫女装束越しに無数の手が胸やお尻に這いまわり、布越しに淫裂まで探ってきた。

胸は力任せに揉まれ、遙は肉体を罵られる痛みと美貌を歪める。

「い、痛い、潰れ……あうっ」

「痛いのが気持ちいいんだろ」

「ち、違う。私はあなたたちのような者に……、あ、あふうううっ」

首を振って否定している最中、上着の合わせ目から侵入した手が胸の頂を軽くつまみ上げた。

「ど、どこをさわ……んんっ」

初めて感じた乳芽のくすぐったい刺

激に、思わず甘い声を洩らして肢体を跳ねさせる。

声を堪えようと唇を噛み締めるが、今度は鼻から抜ける吐息が赤眼の男たちを興奮させてしまった。

「ずいぶんという声を出したのう」

「違うわつ。今のは……はあんんつ」

神魔官の冷めた言葉を否定するが、つままれた乳首を扱かれ艶めかしい声を洩らしてしまう。

強制的に勃たされる頂からはジンジンとした痺れが肉果実へと伝わり、痛みしか感じなかった胸に新たな感覚を広げる。

「さわらないで、んっ、胸のそこ、そこは……」

床に仰向けにされ、両手両足が押さえられた。

「くうう……っ」

抵抗できない姿に美貌が染まる。

しかし、そんな彼女の羞恥ですら、彼らには興奮を高めるスパイスではない。

欲情にまみれた視線は身体中に這いまわり、淫部をまさぐる手が秘孔を窺ろうと淫唇を広げていく。

「やめ、どこをさわってるのよっ！あなたたちも、神魔官に魔物が取り憑いていることに気付きなさいっ」

遠巻きに見ている信徒に語りかけ、真実に気付くように促すが意味はない。みな冷めた目で遙を見つめ、悪魔憑きと蔑んでいる。

「お願い気付いてっ。んっ、気付かない

いと、あなたたちは魔物の……」

「うるせえよ」

「はくつ、ひきいいいいいいいっ！」

股間を齧っていた魔憑きが陰核を探り出し、緋袴越しにつまみ上げた。

女体の中で一番敏感な突起に触れた遥は、淫部を突き上げて悲鳴を奏あげた。

「面白え、腰突き上げてやがるぜ」

「やめつ、あがつ、くうんっ、はあうううううっ！」

魔物憑きが面白がつて陰核を扱き続ける。

強制的に淫部から頭の中にまで伝わってくる痛くもムズ痒い刺激に、退魔巫女は長い黒髪を振り乱して悶えた。

秘孔からは止められない愛液が溢れ、ショーツを瞬間に濡らして緋袴の色を変えていく。

「ずいぶんと感じているようですな」

「か、感じてなんて……ううくっ」

「そうですか？」

唇を噛み締めて悲鳴を堪えるが、

「なら、もつと強くしてやるよ」

「んふうっつっ！」

肢体を齧っていた手が同時に乳芽と陰核を強くつまみ上げた。

身体は激痛と痺れの入り混じった刺激でガクガクと震え、全身の肌からは

大量の汗が吹き出していく。

「なんなんだこの巫女は？」

「こんな巫女と同じ女だなんて思われ

たくないわ」

一般信徒たちから卑下する言葉がか

けられる。

彼ら彼女らは教団の敵として遙を認識し、罵られる姿を興味と嫌悪の入り混じった目で見つめている。

「そ、そんな目で見な……あひつ、ひいあああああ——っ」

プシュツ、プシュウウウ……。

信徒たちに目を背けてもらおうとした瞬間、乳芽と陰核をつまんだ指にさらなる力が込められ、大事な部分を乱暴にねじり上げた。

肉体の一部がねじ切れるような激痛と同時に、全身が感電したような痺れが突起から生まれて頭の中を貫く。

そのあまりの激痺れに四肢を押さえられた肢体はブリッジするように背中を仰け反らせ、布越しにもかかわらず緋袴の股間から愛液が吹き出した。

「もう十分じゃ、やめなされ」

「うはっ、はうっ、はあはあはあ……んあああつ」

なにが起こったのかも理解できずに

肢体を痙攣させていた退魔巫女は、神魔官の一言で悦痛みから解放された。

しかし四肢には力が入らず、下腹部はジンジンと疼いて愛液が溢れていく。

「イッチまったみたいだな」

「俺の指がピチヨピチヨだぜ」

「い、今のがイクという感覚……？

ち、違うわ、今のは痛いだけで

頭をよぎった感覚を否定するが。

「どうですか、痛みが快楽になった

気分は？」

「——っ!」

心を見透かした神魔官の一言で、遥は事実を受け入れざるを得ない状況におちいった。

身体中に感じる疼きと、ジンジンと痺れる肉芽と淫部が刺激を欲しがっている。

緋袴には否定できない証が染み込み、そのすべてが見られているのだ。

「愛され方は理解したようですな。では、今度は心を浄化するために人の愛し方を教えてしんぜよう。そこのお主、袴を脱いで差し上げなさい」

「は、はい」

神魔官に命じられ、一人の信徒が退

魔巫女の前で袴を下ろした。

「巫女様、お願いしますよ」

「あなたは……っ」

遥を騙し、この館に導いた男性信徒

彼のペニスには硬く反り返り、奉仕を期待して脈動を繰り返している。

「な、なにをさせよう」と

「その信徒の猛りを胸と口で鎮めてやるのじゃ。お主の所為でこうなつた苦しみを、愛をもって取り除いてやれ」

「ふざけないでっ。誰がそんなこと」

上着の合わせ目を掴んで後ずさる。

だが拒むことは許さないとばかりに、

赤い眼を光らせた男が女性信徒の横で

牙を光らせた。

「くっ」

言葉にしない脅迫に、彼女はうなず

く他ない。

「わ、分かったわ……よ……」

耳まで真つ赤にさせながら、遥は巫



女装束の胸元を広げてDカップの乳房を披露した。

カップなしの黒コルセットで強調された肉果実は薄ピンクの頂を上に向け、お椀型の形を緩やかに揺らしている。

「おおつ、巫女がこんな下着を着けているなんて、神魔官様の言うとおり悪魔が取り憑いている証ですね」

「ううっ」

肉果実を強調する下着を見られ、遥は羞恥に襲われながらも乳房を晒し続けた。

「早くペニスを挟んで舐めてやるのじや。それが愛の表現じやよ」

「ふざけ……っ」

欲望だけを強調した表現に激昂するのだが、しないわけにはいかない。

「し、してあげるわよ、これくらいいんでも……」

見せるように乳房を両手で持ち上げ、自分を騙した信者のペニスを胸の谷間で優しく包み込む。

「ふあっ」

（こ、これが男の人の……。こんなに気持ちの悪い形してるなんてっ）

初めて触れたペニスの熱さに驚くと同時に、遥はその形に気持ち悪さしか感じなかった。

胸が火傷しそうな熱と鉄のような硬さに怯え、漂う精臭に美貌が歪む。

「ほれ。早く上下に動かすのじや。さもないと、大変なことになってしまっぞ」

「わ、分かっているわ……。っ。はうっ、

んチュ、ふあむっ、んっ、んん」
「おふっ、巫女様が俺のチ●ポを、気持ちいいですよ」

急かされながら胸を上下に動かし、胸上から飛び出す亀頭に舌を這わせた。彼女を騙した信者は心地よさそうに呻き、亀頭をしゃぶる美貌と胸を見つめてくる。

「どうですか巫女様。僕のチ●ポは……おうっ、美味しいですか？」

（どうしてそんなこと聞くのよっ。こんな吐きそうなだけで）

信徒の言葉に憤り、舌に感じるカウパー液と雄臭に吐き気をもよおす。だが、同時に身体が熱くなるのを感じた。

恥ずべき姿が見られている。その恥ずかしさに鼓動が速まり、奉仕する胸の動きが激しくなっていく。

「んチュっ、んふっ、んんっ、チュふあっ、んっ、んっ、んっ」

（早く、早く終わらせれば……）
身体の変化を必死に否定しつつ、少しでも早く終わらせるために奉仕に集中する。

初めての奉仕にもかかわらず彼女の乳房は的確に肉幹を抜き、唇は亀頭を包み込んで切っ先に舌を這わせる。

「すごいしゃぶり方だっ。今まで何本もしゃぶってきたみたいだっ」
口調こそ丁寧だが、確実に遥を辱める言葉で責めてきた。

（早く、早く終わってっ）
「んチュふあっ、んぶっ、んっんっ、ぶうあっ」

奉仕を終わらせるために遥は頬を窄めて吸引し、亀頭全体を舐めまくる。長い黒髪は信徒の股間で揺れ動き、めくれ返る唇が男たちを興奮させた。

（早く終わらなさいよっ）
「おおおっ」

舌先が偶然先割れをなぞりあげた瞬間、裏切り信徒が全身を震わせる。

（こ、ここが気持ちいいの？ なら）
もう迷っている場合ではない。

遥は羞恥を堪えて亀頭を啜え、舌先で何度も先割れをなぞりあげる。

「んチュぶっ、んんっ、んチュっ、んっんっ」

信徒が天井を見上げて声を荒らげた。遥もこれで終わらせようと乳房で肉幹を抜き、亀頭を激しくしゃぶって彼を絶頂へ向かわせる。

「どうやら愛し方を覚えたようですな」
まるで娼婦のごとくペニスをしゃぶる退魔巫女の姿に、神魔官が満足気に話しかけた。

「ふう、ふうらげらいだよ、誰ふあんな……」
卑下する言葉に、紫の瞳を彼に向けて反論するが、

「うああっ、もうだめだっ。出るっ、出るっ！」

「んぶうううっ!? んぶっ、んえっ、んぶっ、んぐっ、ぶチュっ」

突然、裏切り信徒が遥の頭を押さえ、腰を動かし始めた。

肉幹を挟んでいる乳房は激しく揺れ、めくれる唇から唾液が飛び散る。

口腔は亀頭の熱さでサウナのように蒸され、鈴口から吹き出す先液が舌に撒き散らされる。

（な、なにこれっ、どうしてこんなに……こんなに激しくっ!?）

「んぐっ、ふむっ、んぶうえっ」
無理やり唇を突かれる息苦しさに涙が浮かぶ。

生暖かくヌルヌルとした先液は舌全体に絡み付き、吐き気をもよおす匂いが口腔に充満していく。

「や、やふえ、こんら……っ！」

「ぐおおっ、出るっ、巫女様の口に、おうっ、くああっっっ！」

びゅるっ！ びゅくっ、びゅるびゅるびゅるっ！

「んぶっ!? んぶうううっ！」
いきなり肉幹が引き攣り、退魔巫女の口腔に灼熱の粘液が吹き出した。

舌が麻痺するほど苦い雄液は頬裏や舌腹に絡み、穢れを知らない口に男を刻み込んでくる。

「んぶっ、やふえ……ふううっっ！」
紫の瞳に涙を溜めながら顔を振り、これ以上の口内射精を拒む。

だが、信徒は頭を放さない。
ドクドクと注ぎ込まれる精液で口腔をいっぱいにした遥は、息苦しさをあまり喉を動かして粘液を嚥下した。

「んぶっ、んぶうう……んぐっ、んぐっ……んぐっ……ゴクッ」

唇の端から白濁液を零しながらも遥は必死に飲み込み、胃の中にどろりと



差異次元
干渉波
とらえました！

共振コイル
出力増大中！

科学
我々の未来を
照らす灯

その科学が
また一つの偉業を
なすとげようと
しています



常識を超えた
出力のエネルギーが
得られています！



7時40分
君……



あの制服
となりの
男子校だよね……

バスで
見かける
だけなのに
……

少女のラブパワーが
増幅すると……？

襲撃！ 異次元生命体

THE ATTACK OF THE CREATURE FROM ANOTHER DIMENSION

漫画 / おおただけし

スキ……♡

ほう……
どうしよう
夕方のバスも
一緒になれて
から……

ほう……
帰ってすぐ
こんなコトが
日課になっちゃっ
て……っ
ほう……



じゃ今
ココで胸
見せてよ

へーお前
オレの事好き
なんだ？

毎日
しすぎて
……
妄想が
どんどん
変なコトに
……っ



そんな…
みんなに
見られてる…っ

え…っ
下……もっ

は…
はずかしい…



やだっ…

他の人は
あっち向いて
ええっ

んっ
いじっちゃ
ダメ…っ

共振コイルに
過剰な
エネルギー!!

こちら
科学防衛隊
スカイキーパー
1号

時空破断を
確認!

今すぐ超次元
共振コイルを停止
するんだ!

だめです!
「向こうがわの出力元が
近づいてきているんです」

まよっ!?



何だあれは!?

差異次元生物
だ……!

いったー……

何なのよ
このオモチャ……

ん?

ん!?



突如出現した
巨大生物は
市街地を南下中!!



あ!
ここで
国防長官の
会見です!

定期的に
発生していた
次元共振は
あの生物の
特殊な興奮性
精神波だと
判明しました



あの生物がコイルと
接触した場合
時空破断層が
極大化して
破滅的な災害が...

なんですかこれ!?

我が国は
非常事態宣言を
発令します



科学防衛隊が
我々に残された
希望です!

み...見られる
妄想しすぎて...

おかしく
なっちゃったの
から...



あれXス
だよな

隊長!
ファルコン弾頭でも
効きません!



何すんの
よっ!

スカイキーパー
2号による
限定核攻撃しか
ありませんよ!
まかせて下さい!

だめだ!
被害が
甚大すぎる!

隊長!
私に考えが
あります!

モロバシ
隊員!



ランドモラー
発進！

目標の
性器刺激に
向かいます！
スカイキーパー
1号から3号
配置につきます！

ひ…!?

防御粘膜
展開！

モロバシ君！
良い案だぞ！
興奮精神液を
最大限まで
引き出し

その瞬間
共振コイルを
逆転させ
元の世界へ
はじき返すとは！
これなら時空
断裂も正せる！

モロバシ！
たのんだぞ！

な…

了解！
ランドモラー
突撃します！

あっ♡

やっ



あのコマ
このくらい…
なのかな…?

まじっ

コレって…
男のコと同じ
くらい…?



だめっ
そんな太いのっ

入れたこと
な…っ



なんか
出てる—っ



あっ
♡

過加熱冷却液が
漏れ出しました!



ダメです
隊長っ
やはり
熱核攻撃の許可を…



モロ
バシ—っ!!

隊長っ
モーターの
本体がっ

あとみつく文庫の最新作が
カラー読み切り小説で登場!

OTOME
乙女騎士団が
枕営業するようです
THE BACKSTAGE

隊の
存続の
ために

さか い ひと し
小説 **酒井仁** 挿絵 **かな**
NOVEL ILLUSTRATION



食卓の中央で香ばしい匂いをさせているのは雄の丸焼き。ローストポークのオレンジソース添えに付け合わせの野菜、都でもめつたにお目にかかれぬ巨大香魚の揚げ物に、南国の色とりどりの果物。

なんとも贅沢な食卓を囲むのは、三人の立派な身なりの紳士、その傍らには三人の美少女。

少女たちがまとうのは凛々しい騎士服。だがリーダーである金髪の美少女の胸元は大きく開き、ポリューム感たっぷりの乳房も露わ。乙女の柔肌を見せつけるように酒の瓶を傾ける。

「さあ、王立歌劇団の座長様。わたくしのお酌でよろしければ……」

「う、うむ」

白髭を蓄えた初老の男の杯に酒を注ぐのは、豪華な金髪も美しい巨乳の美女、ティファ・T・ケインズマン。名譽と伝統ある「天馬騎士団」のリーダーにして名門貴族の息女である。

いまにもこぼれ落ちんばかりの巨乳の谷間に男の視線が注がれるが、すぐにハツとして目をそらす。

「では——文化芸術庁長官様どうぞ」

「……………」

黒髪ポニーテールの少女、ミサカに酒を注いでもらった少々肥満気味の男は、無言。その視線はミサカの東洋的な美貌に見とれているようだったが、隣の男をちらと見やり、すぐに視線を外す。

「ええと、ええと、シャ、シャルも注いだげるね」

「ああ……」

小柄で茶髪の少女の酌を受けた男は、白髪を見事なオールバックにしている。彼は王立音楽隊にその人ありと謳われた、名指揮者である。

孫のようなあどけない少女に思わず頬を緩ませるが、すぐにキツと顔を引き締めてごほんごほんとうざとらしく咳払いをする。

この三人はいずれもそれなりの経歴と地位を持ち、

かつ聖ペーガソス王国の文化芸術面の権威である。彼らを宴席に招いたのは騎士団リーダーのティファの発案。実はここ数年、騎士団の公務があまりにも激減したことから給金は減額され、詰所も狭苦しいところに配置転換されてしまった。

このままでは伝統ある天馬騎士団の存続の危機と感じたティファとその仲間たちは、ある目的でこの三人の男たちを接待することにしたのだ。

だが——

（ど、どうでしょう……なんだか空気が重いですわ……）

食事そのものは進んでも、男たちはほとんど会話を交わすことなく、ただただ少女たちの酌で酒を飲むばかり。ティファたちが話を向けるとにこやかに受け答えし、美少女騎士たちの悩ましい肢体に好色な目を向けてくる。

見るも艶やかな美少女たちの接待自体には満足しているようなのだが、同席している他の二人が気になるのか、ぎこちない空気は最後まで拭いきれなかった。これでは彼女たちの「目論見」に協力してもらうどころではない。

ティファがちらりと目をやると、黒髪の才媛は沈痛な面持ちで目を伏せて首を振るのだった……

「失敗だ——事前の情報収集が不完全だった」

翌朝、三人の天馬騎士たちは狭苦しい詰所で緊急会議を開いていた。

「まさかわたくしたちの超鉄板MAKURAが通用しないなんて、屈辱ですわ」

「なんか……あのおじちゃんたち、仲が悪いのかな」シャルロットの言葉に、ミサカは少し考え込むような仕草を見せる。

「でも、わたくしたちの今後の計画に、あのお三方の協力是不可欠……そうよね、ミサカ？」

「ええ。あの三人が本当に仲が悪いかどうかはともかく、王立歌劇団、文化芸術庁、そして王立音楽隊の協力がないと、私たちの計画は成功しない」そうと決まれば、と金髪の美女は豊かな胸を揺らし、力強く宣言する。

「作戦の練り直し、そして情報収集。今度こそ万全の態勢でリベンジに挑みますわ！」

その三日後。

騎士団詰所に呼び出された恰幅のいい男は、なにやら落ち着かない様子で三人の美少女騎士に囲まれていた。

「き、聞いたところでは我が不肖の倅ダニエルとその友人たちと何か計画しているらしいが……それが私とどのような関係があるのかね、天馬騎士団リーダー、ティファ殿」

「大ありですわ、近衛大隊長官グレゴリー・ネーベルスタン様」

王国の軍事の中核ともいうべき近衛大隊、それを取り仕切っているのが、この男。だが、いわゆる芸術文化方面に顔のきく男ではなかったはず。

「ネーベルスタン様。あなたはこれのお三方と王立貴族学院で同窓でいらつしやいましたね」

ミサカが差し出した三枚の写真に、偉丈夫は頷く。「あのねあのね、その三人のおじちゃんって仲がよくないの？」

あまりに無邪気かつストレートなシャルの問いに、ネーベルスタンは虚を突かれ、そして苦笑した。

「わたくしたちはこの方々の協力を仰ぎたく一杯接待させていただいたのですが、上手くゆかず……近衛隊長様のお知恵を拝借したいのです」

「むう……この三人を一度に宴席に招いたのか？それはまずかつたかもしれんな」

「といますと？」

ミサカの鋭い問いに、体格のいい近衛隊長は顔を

しかめてみせる。だが、美少女たちのどこまでも真剣な顔を見ると、ようやく重々しい口を開いたのだ……。

その日、ケインズマンの邸宅に再度招待された三人の紳士は、以前にも増して不機嫌そうに顔をしかめていた。

（まったく、またこいつらと一緒か）

（しかしケインズマン家の招待とあつては断れぬ）

（あの美しい娘たちに酌をされるのは悪い気分ではないしな）

互いにそんな思いを胸に、使用人に案内されて奥の間に足を踏み入れた三人の紳士は——目を丸くして声を失った。

「にゃん、にゃあ〜ん」

「……お帰りなさいませにゃん、ご主人様」

「うにゃ〜っ。シャル、猫さんになっちゃったっ」

三人のペガサスナイトは胸と腰以外を露出した大胆な半裸姿で紳士たちを出迎えたのだ。

しかもビキニ状の服はふわふわの毛並みも美しい毛皮でできている。両手には獣のようなグローブ、そして少女たちの頭には猫耳を模したヘアバンドがつけられ、まるで愛くるしい猫型モンスター娘のようだ。

「こ……これは……」

「な、なんと愛らしい……っ」

「ね……ねこにゃんにゃ……ッッ！」

この世界に果たして「コスプレ」という言葉が存在しなかったが、美少女騎士たちがどういう趣向で彼らをもてなそうとしているのかはすぐに理解できた。

だが、なぜ彼女たちは彼らが「無類の小動物好き」だと知ったのか。その情報源はもちろん、近衛大隊長官ネーベルスタンだった。

「あの三人が仲たがいをしたのは——学生時代のことなのだ」

近衛隊長の言うところによると、彼ら三人は芸術面に優れ、互いに認め合ったよきライバルであった。その彼らの友情にひびが入ったのは、三人が同時に同じ女性を好きになったのがきっかけだった。

その女性は王国城下でペットショップを営む女店主。三人は彼女の心を射止めるべく店に足しげく通い、それを契機に小動物好きになったのだという。

「まあ結局は、三人ともその女性には振られたのがな。三人ともペット、特に猫好きになったのはいが、実際に飼うことはなかったし、家人にもペット好きなどと口外してないそうさ」

「まあ、それはどうしてなのでしょう」

「わからなくはない、ティファ。愛くるしい猫を見るたびに、恋い焦がれた女性にあっけなく袖にされた青春の苦い思い出が甦るのだろう」

ミサカの容赦ない分析に、ネーベルスタンは苦笑するしかない。

「猫ちゃん可愛いよねッ。シャルも大好きっ」

だが——と近衛隊長は怪訝な顔をする。

「私知っているのはその程度のことだが、こんな情報が何かの役に立つのかね？」

もつともな疑問に、ティファは満面の笑みを浮かべ、ミサカは複雑な表情になり、シャルは事態を把握することなく無駄に愛想笑いをしていた。

「ご主人様、今宵はわたくしたちがにゃんにゃんご奉仕いたしますわあ〜っ」

ケインズマン家御用達の仕立屋に特別注文した「猫にゃんビキニ」に身を包んだ金髪美少女は、ノリノリで歌劇団座長の足元にしゃがみ込むと、肉球

グローブで彼の股間を優しく撫でる。「にゃん、肉球、肉球が私の股間をッ」

ティファ猫にじゃれつかれて鼻の下を伸ばす白髪男に、黒髪ポニテの猫が鼻を鳴らす。

「まったく、なんで私までこんな格好を……」

作戦とはいえ、ミサカはこの姿に顔をしかめる。

「おや、ミサカにゃんはご機嫌斜めでちゅか〜？」

黒猫少女にだらしなく顔を緩めるのは芸術片長官。

ミサカはため息を落とすと、つんと背を向ける。

「ふんっ、あいにく私は人間に媚びたりしないわよ。撫でたいんだつたら勝手に撫でれば？」

そんなつつけんどんな態度に小太りの紳士は、目をハート型にして少女の尻を優しく撫でる。

「うほっ、人に媚びないツンツン猫たん〜っ」

一方、茶髪の子猫はころんと床に寝転がると、両手を頭の脇で「にゃん、にゃん」させながら服従のポーズで名指揮者を見上げる。

「子、子猫たん……むは〜〜っ」

白髪の指揮者は夢遊病者のようにシャル猫の平らなお腹に顔をうずめると、猫少女の甘い体臭を胸一杯に吸い込む。

「きやあんっ、息がくすぐったあ〜い」

元々の猫好きに加え、猫のコスプレをしているのは極上の美少女たち。猫耳と肉球と乙女の真っ白な肌

の露出に、彼らが抗しきれはるはずもない。

他の男の存在すらすっかり忘れ、彼らにはにゃんにゃん少女に襲いかかる。

「あらあら？ ご主人様のごこ、にゃんだか膨らんでしましたけれど、中にはにゃんが入っているのでしょうか〜」

肉球グローブできこちなく座長の股間を何度も擦り、とうとう内側に隠された男の肉棒が外に飛び出してしまふ。

「きやあんっ、これは猫の大好きなソーセイジですわねっ。こんな素敵ないのするソーセイジを見た

ら、我慢できませんわ〜」

「にゃん、肉球、肉球が私の股間をッ」

第一話

妖狐転生・クイン退魔師綾辻藤香

高き気 悦獄に随ふ 妖狐は

平安の世を騒がせし
最凶の妖狐が現代に転生
美しい妖狐退魔師の
物語が幕を開ける!!

あら い ゆう
小説 NOVEL 新居佑

挿絵 ILLUSTRATION sian

郊外のベッドタウン。その駅前には、休日ということもあり、大勢の人々で賑わっていた。

「グオオオオオッ！」

しかしその平穏は、突如空間を割って出現した異形の化け物の咆哮によって、一瞬にして崩壊してしまふ。

「よ、妖魔だあつ！」

「うそでしょ……。こんなところにまで……!?!」

「み、みんな……。早く逃げろっつ!!」

いきなり姿を現した『妖魔』から逃れようとする人々で、穏やかな休日の駅前がもみくちゃになる。そんな人間たちの姿を楽しむかのように、人ならざる者がせせら笑う。

妖魔・デイダラボッチ。その身長は十数階建ての駅ビルを見下ろすほどに高く、一つ目で、筋肉質な肉体にふんどし一枚をまとい、右手には巨大な棍棒を握っている。

人知を超えた能力を持つ妖魔たちの度重なる破壊行為に、警察や軍隊までもが、まるで歯が立たず、人々はただ恐怖に怯える毎日を送っていた。

「た、助けて……。お母さん、お母さんっつ！」

我先にと逃げ惑う人波に押され、一人の幼い少女がデイダラボッチの前に取り残される。鋭い赤目をギョロリと動かした巨人は、右手の棍棒を振りかざし、か弱い少女に向けて容赦なく振り下ろした。

「……まったく、人が買物を楽しんでいるのに。何年経っても妖魔って無粋な生き物よね」

ザブシュッ!

巨大な棍棒は、しかし颯爽と現れた女が閃かせた大太刀の一撃によって、右肘から先ごと切断された。デイダラボッチは筆舌に尽くしがたい痛みを無様な絶叫に変えて、後ずさる。

女の年齢は二十代前半といったところ。百六十センチを少し超える高身長が、女性の肉感的な肢体の

ラインを引き立てている。

腰まで伸びる長くさらつとした栗色の髪をふわりと揺らし、整った美貌には挑戦的な切れ長の瞳が浮かぶ。

その女体は、たまらなくグラマラスなもので、薄手のシャツがはち切れんばかりの、まさに爆乳と呼ぶにふさわしい二つの量感がたぶんつと揺れる。

細身でありながら、熟成された大人の色香を振りまく下半身は、黒いホットパンツとタイツが、ムチリとした太ももにピッタリと張り付いている。

「お嬢ちゃん、ケガは……。まあ、私が守ってあげたんだし、あるわけないわよね。早くお母さんのところへお行きなさい。じゃないと、次は本当にケガしちゃうわよ?」

「あ……。う、うん!」

栗色の髪の女のどこか高飛車な物言いに、初めは怯えていた少女だったが、すぐに力強く頷くと、手を振っている母親のもとへと駆け出していった。

「あ……。あの。いや、あの。お方。は!」

「来てくれた。くうつ、やつぱりかつこよすぎだぜ。絶対無敵、冷酷無比な俺たちのヒロイン、最強の女王様……。退魔師、綾辻藤香様!」

少女を救ってみせた藤香と呼ばれた女性に、さっきまで逃げ惑うだけだった市民たちから、喝采の声に向けられる。

「ふふ、別にあなたたちのために来たわけじゃないわよ? その木偶の坊、いつまでこの私を見下ろしているつもりなのかしら?」

長大な大太刀をとんとんと軽く肩にのせた藤香は、巨人に対し、挑発的な態度を崩さない。

「ガ……。グウッ! グ、オオオオオッ!!」

藤香の傲慢な物言いに、怒りの感情を露わにしたデイダラボッチは、斬りおとされた右手の棍棒を左手で握った。今度はその体駆すすべての臂力を使つて、

藤香に破壊的な一撃をお見舞いしてくる。

「本当……。礼儀をわきまえない屑妖魔。……。妖狐天身!!」

ゴオッ! と藤香のグラマラスなボディから紫色の光——人が本来放つものではない、妖気の輝きが迸り、藤香を包み込む。

刹那の後、溢れんばかりの妖気の光で全身を包み、変身した藤香の『本当の姿』が、衆目の前に晒される。太ももをびっちり包む黒のタイツはそのままに、上半身は白い巫女服を模した退魔衣装を、腰から太ももにかけてはごく短いミニスカートに身をまとう。頭頂部からはピンつと立った大きな獣耳、ちょうど尾てい骨に当たる部分からは、ふっさりとした尻尾を九つも生やしている。

鋭い目つきに、高いピンヒールがこれ以上なく似合う絶対的女王の貫録、そして全身から発する有無を言わせぬ強烈かつ圧倒的な妖気……。それらがすべて退魔師・綾辻藤香が、千年の昔、平安の都で人間、妖魔を問わず最強最悪を誇り語られる。九尾の妖狐。が人へと転生した姿であることを示している。「これが全力? 笑わせてくれるわね、妖刀ムネマサ彦の太刀・煉獄っ!」

九本ある尻尾の一本が妖しく輝いたと同時に、強力な妖気をまとった梵字の羅列が大太刀の刀身に刻まれる。すると鈍く煌めく鋼鉄の刃に、梵字から噴出した灼熱の業炎が絡みつき、文字通り煉獄の刃を発現させる。

ジュブウウッ!

閃いた妖刀の斬撃で、巨大な棍棒が、まるでパタパタとできているかのように易々と溶断される。

棍棒まで失ったデイダラボッチは、怒りに任せ、その巨大な握り拳で、九尾の変身退魔師を殴りつける。しかし藤香は動じない。「まさにバカの一つ覚えね。斬殺確定、冥途の土

産にとくと刻んでおきなさい。あなたたち妖魔の絶対的支配者、九尾の藤香。その剣技をねっつ！ぜやあああつっ!!」

九本の尻尾がピンッ! と激しく立ち上がり、これまでとは比較にならない爆発的な妖気が、藤香と炎熱の刀身を包み込む。

瞬間、まさに雷撃にも似た速度で藤香の身体が一つ目の巨人に向かって跳ねあがり、後を追って何百、何千もの剣閃がデイダラボッチを無数の肉塊へと刻んでいく。

キンッ……。黒塗りの鞘に大太刀が収まった音が響いたと時を同じくして、ポツッ! と青白い狐火と化した何千という巨人の切れ端が駅前の中空に浮かんで消えていく。

その様子はまるで、鬼の魂を地獄へと連れて行く、狐の妖術のように艶やかで、見惚れるほど美しい光景だった。

「あらあら、おいしそうなら食べちゃおうとも思っただけ……」

藤香が右手の上に妖力で浮かせているのは、岩塊と見まごうデイダラボッチの心臓だった。全身を切り刻まれてもなお、不気味に脈打つ妖魔の心臓を、藤香は瞳を細めて、品定めする。

妖魔を狩る退魔師は、必要以上に派手な技を練り出したり、相手を苦しめたりすることはない。それは人の手に余る異能の力を継承する血族の自戒であり、相手が邪悪な妖魔であっても変わりない。

しかし退魔師の雄、綾辻家の現当主である藤香のその瞳には、慈悲の欠片も浮かんでいない。

過去から現在を含めても圧倒的最強と謳われる退魔師・綾辻藤香が刃向かうものに向けてるのは、一切の容赦もない冷酷無比な殺意だけだ。

「ぜんぜんおいしくなさそう。廃棄処分決定ね……ふふっ」

ザヴァアッ!! 右手の爪が鋭く伸び、躊躇なく妖魔の心臓を真っ二つに引き裂いて鬼火に変える。五本の指を紅に染めた妖魔の返り血を、舌でべろりと舐める藤香。その非情な性格は、九本の尻尾と獸耳以上に、彼女がかつて人間と妖魔の双方から恐れられた九尾の妖狐であったことを、周囲に改めて確信させるものだ。

「ふう……。まったく他愛ないわね。もうちよつと私を愉しませてくれる妖魔はいないものかしら」あれだけの大立ち回りを練り広げても、汗ひとつかかずに軽く言う藤香。現代科学と妖術によって作り出された藤香専用の退魔スーツ。その張り裂けんばかりの胸元が、たゆんだゆんつと大きく上下に揺れる。

サイドのスリットからむちむちの太ももが覗くミニスカート風の退魔スーツに、右手をあてがって、余裕たつぷりにセクシーな勝利のポーズを決めて見せる。

そんな藤香のもとに、平穏を取り戻した大勢の市民たちが押し寄せてきた。

「あら、また? 仕方ないわね。お前たち、お座りわ?」瞳を獣のように細め、不敵にほほ笑む九尾の退魔師は、迫る男たちの群れに向けて冷たく言いつけた。すると男たちはビタッ! と列を揃え、藤香の前に文字通り一斉に跪いた。

「ああっ、藤香様の生ご命令っ。私、感激ですっ!」「私もですっ! 麗しい我がが藤香様っ! お美しいその九尾の御姿。このような近くで拝見できて恐悅至極にございますっ!」

百人近い男たちが、まるで高名な仏像でも崇めるかのように、美麗の変身ヒロインの前に頭を垂れていく。

「ふふ、人間の牡たちは従順でいいわね。そう、私は九尾の藤香。ひかえなさい、跪きなさい。そうね、

今日は特別に一番手前のお前。私の靴を舐めさせてあげてもいいわよ?」

そう言う藤香は、彼女の目の前で、地面に額を擦りつけるように這いつくばっている、大学生風のでっぷりと太った男の前に、その黒いピンヒールを差し出す。

「ほっ、本当ですか!! お、俺でいいんですか!! おほっ、我ががアイドル退魔師のヒール! 退魔スーツ姿の藤香様のおみ足を舐められるなんて……俺、もうイキそうですうっ!」

「あらイクの? DMな牡ねえ。ならさっさとイッてみせなさい。この豚男、さあ、早くその汚らしい舌で私の足を舐めなさい!」

でっぷりと太ったTシャツ姿の男を罵倒しながら、藤香の尻尾がピンピンとクインの快感に打ち震える。周りの男性たちすらも、藤香がなじるたびに、身体をビクビクと震わせ、完全に女王様に平伏する奴隷たちといった雰囲気だ。

男が舌を出し、足先に脂ぎった顔を近づける。その姿を見下ろしながら、藤香が愉悅に浸っている。「……あ、いたいた……。もう藤香、また普通の人たちにやらせてるのさ!」

人垣を押しつけて、現れたのは一人の男子だ。年齢自体は藤香と同じくらいなのだろうが、身長は藤香とあまり変わらず、男子としては小さい部類に入る。体つきも華奢で、顔つきも幼く、いかにも頼りなさそうという雰囲気だ。

「なに、章伯なの? ふっ、いいところへ来たわね。見なさい、人間の牡たちが私の足を舐めようとしているのよ? たまらないわ。九尾の妖狐の私に相応しいすが……」

「もう、人にそんなことさせちゃダメだよ。それに藤香はもう妖狐じゃなくて、ちゃんとした人間で綾辻家の大正當主様なんだから。ほら、行くよ!」

藤香の前で跪いている男たちの間を縫って、章伯と呼ばれた少年の手が、変身したままの藤香の細い腕をぎゅっとときつく握りしめた。

「あ……な、なにをするの章伯。は、離さない！」

握ったまま、人だから連れ出そうとする少年に、辛辣な言葉を投げかける藤香。しかしその強めな言動とは反対に、頬にはうっすらとした赤みが浮かんでいる。

「ふ、ふんつ。まったく。下人のくせに、当主である私に意見しようなんて……！」

「当主様が、あんな恥ずかしいことしてたら綾辻が変な家だった思われちゃうだろ!? まったく、ほら行くよ！」

男のくせに、どうみても藤香より力がなさそうな章伯だったが、手を握るだけではなく、モデル体型の藤香をグイッ! と自分の胸元へと引っ張りよせる。瞬間、ほんのりと赤みがかつた藤香の頬が、ポツと朱色に染まり、獣耳がうれしそうにピンッと跳ねる。

「な……。章伯、そんな強引に……。くつ、ふん……わかつたわ。今日は下人の! あなたに免じて諦めてあげる!」

「下人下人って……。もう、藤香つたら……」

章伯がひとつ小さなため息をつく。それを合図に、藤香の九つの尻尾がどこかうれしそうにばたばたと左右に揺れ動く。

「……ふふ、そういう強引なところは、昔と変わっていないわね」

そう小さく呟くと、変身をといた現代最強の退魔師・綾辻藤香、そして綾辻家に仕える下人、村里章伯は、藤香がどうしてもと章伯を連れ出したショッピングの続きをしに、駅ビルへと入っていった。

今から千年の昔。平安の時代、都には異界の魑魅魍魎が跋扈しており、時の権力者や平民たちを恐怖

させていた。

妖魔たちの中でも最強最悪と呼ばれ、退治しにきた豪傑や退魔師たち、はては同族の妖魔までを、何百・何千と屠ってきた妖魔。それこそが九尾の妖狐であり、人に転生する前の藤香の姿だった。

「悪名高い九尾の藤香といえど、この私の知略と殺生石の前では、ただの女狐と変わりないな。くくく」

千年前、都を望む山中で、藤香は一人の人間の男と対峙していた。

男の名は法限。帝直属の陰陽師でありながら、外道に身を墮とし、人間界の権力だけでなく、妖魔の力をもその手に収めようと企む邪悪な男だ。

「ふん、たかが人間の分際で私を殺そうなんて。思い上がりも甚だしいわね」

現世によく似た、グラマラスな人間の女の姿をし、美しい衣をまとう藤香は、余裕ぶって見せるが、その表情には、普段絶対に見せない焦りの色が、浮かんでいる。

男が手に持つ妖しい色をした結晶体。それこそが人と妖魔の魂を固めて作った下法の力、殺生石だ。その邪悪な光は、下卑た政治的な駆け引きだけで高尚な地位を築いた男に、藤香を上回る力を与えている。「貴様の魂はさぞ強力な石の原料となるだろうなあ。死ね、九尾の妖狐!」

「……くつ!」

男が持った鈍色の石片から放たれた黒い邪気が、無数の刃となって藤香を襲う。藤香は唇をきつく噛み、ただ迫る刃たちを鋭く見据えていた。

ズッ! ザブウウウウッ!!

漆黒の刃が肉に突き刺さる嫌な音が山中に響き、地面に鮮血が散る。

「ぐはっ!」

しかしその血は藤香のものではなかった。突如、藤香の前に現れ、その身を盾にした青年が、血反吐

を漏らしながら崩れ落ちる。

「な……っ?! どうして、お前が……っ?!」

驚きを隠せずに藤香は、青年に呼びかけた。逞しく屈強な身体を誇示するかのような、薄手の衣服を身に着けている男に、藤香は面識があった。

「綾辻、章伯……なぜなの!? 退魔師がなぜ私をかばって……っ?!」

「私にもよく、わからん……。民草を、仲間を殺してきたお前などを……」

かつて何度となく刃を交えた当代一の退魔師・綾辻章伯。今回、法限の護衛役を務めていた男がなぜ、身を呈してまで自分を助けたのか……。

「……法限様の行いもだが……しかし、さっきのお前は、とても僂そうに見えた。守ってやらなくては……身体が勝手に……ごふっつ! とにかく、お前が無事で……よかった……」

そう言う章伯は、口から血を散らしながら、にこやかにほほ笑んでいた。その表情に妖魔への敵対心は見えない。馬鹿正直に身を呈して、藤香をかばったことをまるで後悔していない笑みに見えた。

「お前……あなた! くつ、うう」

瞬間、藤香の心に切ない感覚が広がった。感じたことのない胸の痛みが、青年に対する愛おしい感情へと変わっていくのを強く自覚する。

「貴様、私の邪魔を! いや、ふふ。九尾の藤香と綾辻の当主を原料にした殺生石か!! くくく、ちょうどいい。二人まとめて死……グアアアアアアアアッッッ!!」

下卑た笑みを浮かべる陰陽師の右腕を、目にも映らぬ速度で接近した藤香が、牙を立てて喰いちぎった。そのまま右手の鋭い爪で法限の左手を引き裂くと、握っていた殺生石が地面に落ちる。

「なっ、ばかな……。女狐ごときが私を……っ?!」

「あら、まだ口が聞けるのね? 陰陽師・法限。お

前にあの人は……章伯は殺させないわ！」
藤香は落ちた殺生石を拾い上げると、そのまま口の中に一呑みしてしまう。瞬間、藤香の妖力が殺生石を得て、一気に増大する。

九本の尻尾がゆらりと立ち上がり、紫色をした無数の狐火が、両腕がちぎれた法限を取り囲む。

「これが殺生石。あなたにはすぎた力ね。喜びなき法限。魂まで燃やし尽くしてあげるわ！」

無数の狐火が、増幅された主の妖力に従って、陰陽師を骨も残らぬ強烈な劫火で焼き尽くす。

「ガッ、アアアアッ!! きさ、ま……私の殺生石を! 許さんぞ、九尾の藤香!! この恨み、私の野望を必ず……ゴアアアアアアッ!!」

紫の光の中に塵となって消えた男の断末魔が、都を見下ろす山中にこだまする。法限の死を見届けた藤香は、倒れたままの章伯の側に膝を下ろした。気づかないうちに、藤香は涙を流していた。

「章伯……っ!! 章伯っ!! くっ……」

「うっ……。九尾の妖狐ともあろうものが、なにを泣いているのだ?」

法限の刃を受けた章伯は、まさに虫の息だった。藤香の心に痛切な後悔の念と、青年を助きたいという想いが強く生まれる。はつきりと気づいた。このどうしようもなくお人よしの退魔師に、自分は心を惹かれているのだと。

「章伯……。妖魔の私がこういうのは……そのすぐく恥ずかしいのだけれど……」

藤香は、悪名高い妖狐とは思えないほど、頬を赤く染めた恥じらいの表情を見せた。そしてその言葉

を遮るように、傷だらけの退魔師の青年は言った。

「そう……か。ふふ、今わかった。妖魔とはいえお前は女子。男の私から言うのが筋というものだな……。九尾の藤香よ、私はお前をいつの間にか、好きになつてしまっていたよう……だ……うぐっ」

「なっ、章伯っ!!? そんな、私もお前を……好きよ! だから死なないうでっ、章伯……っ!!」
「たとえ死んでも……藤香、お前と来世で必ず一緒……」

他人を屈服させることしか知らなかった藤香に生まれた、初めての愛情。その想いに反応したのだから。

呑みこみ、子宮に溶け込んだ殺生石から放たれた淡い光が、九尾の狐と退魔師の青年を包み込んでいく。

「――本当、あれは奇跡としか言いようがないわね。殺生石の力を借りて、私と章伯が今の時代に転生できるなんて。しかも私は人間に……」

あのと生まれ変わった感情も記憶も、物心ついたときにはすべて、この身に宿っていた。かつて妖狐だった自分が、まさか千年経って人間になれるなんて。しかも章伯の血筋である綾辻の当主の座についてしまっている。

(これは今でいう、運命、というもののよね。おまけに妖狐と殺生石の力もそのままだし……。はあ、あとはこれで章伯さえしつかりしてくれてたら……)

心の中でそう呟くと、藤香は小さくため息をついた。ショッピングから帰宅して、現在は夜。綾辻の大屋敷……その自室で豪華なベッドに寝転びながら、章伯が作ってくれた好物の稲荷寿司を口に運ぶ。

「はむっ、ぱくっ。ん……っ、おいしいわ。章伯のお稲荷さん。一仕事の後はやっぱこれねえ」

「ああ、藤香また寝転がったままっ。行儀が悪いよ。綾辻の当主様がそんな格好で……」

「相変わらず細かいわねえ章伯は。それともなに? 私のあられもない姿に、恥ずかしくなってるの?」

人間に転生しながらも、妖狐の能力を色濃く受け継いでいる藤香は、獣耳と九本の尻尾を露わにした、しかも際どいランジェリー姿の格好で、ベッドの横

に立つ章伯を挑発した。

「……昔は昔さ。今の僕は序列下位の低級退魔師。当主の藤香の身の回りの世話をするのが、現代での僕の役目なの。馬鹿なこと言っていないで服を着なよ、まったく」

「馬鹿なこと……。もうっ、章伯こそ馬鹿じゃないのっ」

耳を必要以上に立てて、残りの稲荷寿司を口に放り込む。怒ったように見せておいて、かわいくじろりと章伯を見つめる。けれど当の本人は、こちらに目もくれずに、無言で洗濯物を畳んでいる。

(なんつなのよ! 別に姿形や能力なんて関係ないの。あなたから好きだっって言ってくれたのに、どうして……。ああもう、章伯のバカっ!)

筋骨逞しく、名門綾辻の最強退魔師だった千年前の章伯と比べるつもりは決してない。今の華奢で頼りない姿でも構いはしない。

詳しい事情を知るはずもない他の退魔師たちを、当主の権限を使って無理やり抑え込み、この大きな屋敷で章伯と二人っきりの生活が始まってから、もうすぐ一か月。その間、どれだけセクシーな下着を着ても、お風呂の中で誘惑しても、いまだにキスのひとつもないなんて。

(胸が、身体が……疼くわ。どうしてくれるのよ、章伯っ!)

今夜はちょうど満月。人間でありながら、妖狐の特性を併せ持つ藤香の性欲が最も高まる晩だ。

じれったくなった藤香は、妖艶な下着を身にまとったまま、その豊満な肉体を章伯にそっとな近づけた。

「ん……あ、藤香……。ちゅっ、んんっ!! あ、ちゅじゅっ……。んんっ……」

藤香は切れ長の瞳を伏せて、純朴そうな章伯の唇に自身の艶やかな唇を重ねる。瞬間、千年もの間夢見ていた少年の温かい唇の感触に、背筋に甘い稲妻

が走り、勝手に興奮した尻尾がピンッと大きく跳ねあがる。

「ちゅっ、んちゅっ……はあ……章伯……」

唇を名残惜しそうに離した藤香は、まだびっくりしたような顔をしている章伯の顔を、ほんのり頬を赤く染めた、悩ましげな表情で見つめ返した。

「と、藤香……!? なんでもいきなり……あの、キス……。あつ」

章伯は初め、驚いた表情を浮かべたのちに、すぐに藤香のキスの意味に気づき、しまったという顔を見せた。そしてバツが悪そうに、両脚を合わせ、もぞもぞと動かしたまま、顔を伏せてしまう。

「(こ、これじゃ私が痴女みたいじゃない!? ああつ、章伯の意気地なし! ああ、もうっ!)」

その表情と仕草に、反対にこちらが恥ずかしくなり、藤香の頬が真っ赤に染まってしまふ。

「なっ……べ、別に! ただの気まぐれよつ。ようやく、その……同じ人間同士になつたから……この私と対等になつたなんて思わないことねっ!」

言つてすぐ、下手な言い訳をするのではなく、「あのとき助けてくれてありがとう。あなたを愛しています」と、素直に言えばよかつたと後悔する。

いくら奥手な現代の章伯でも、心根の優しさは昔となら変わっていない。藤香の方からその面と向かつて言えば、彼は必ず応えてくれるはずだ。

しかし、元妖狐の高いプライドが簡単にそれを口にさせてくれない。

「くっ……。あら、章伯つたら、なあにその股間の盛り上がりは? もしかして私の……その、そうよ。気まぐれのキスに欲情しちゃつたの? さすが下人、情けなくて、浅ましいのねえ」

「う、あ……藤香……。これは……ううっ」

見かけどおり、普段から奥手で気の弱い章伯の股間部が、部屋着を下から突き上げる様にきつく尖り

きつている。

(私つたらどうしてこう……っ!)

章伯が決して自分を嫌になつていくわけではないことは、起立した逸物と恥ずかしそうな少年の顔から見て取れるのに、藤香の口からは、それを罵倒するものしか出てこない。

「しようがないわねえ。そんなに私にお仕置きしてほしいのかしら?」

本心とはかけ離れた、いつもの女王様顔とした上から視線で、恥ずかしい乙女の気持ちを隠しつつ、章伯にベッドに仰向けになり、そして衣服を脱ぎ去るよう命令する。

裸になり露わになつた少年の勃起した肉棒は、華奢な体つきとは真逆に、藤香の獣の本能を刺激するのに十分すぎる遅しさと大きさを誇っていた。

(す、すごいわ。まるで猿の妖魔のみたい。ああ、章伯のオ……ン……お汁でベトベト、んんっ……はああ……)

長さ二十センチをゆうに超える剛直、その包皮はすでに剥けきつている。ガチガチに硬化した肉棒には、浮き上がった血管が力強く脈打っており、一際膨れた亀頭からは、とろみのある先走り汁が後から後から染み出ている。

その類まれな巨根に、千年前の頼りがいのあつた章伯のがつちりとした体軀が重なって、満月で発情した女性の興奮の度合いが増していく。

(やっばり章伯は章伯だわ……。ああ、ダメ。胸がドキドキして……。こんなにしたいのにも……っ)

平安の時代から変わらぬ想いを、ようやく生まれ変わった人間の女の肉体で表現したい。だがどうしても素直に心を開くことができない。

「ふふ、当主様の前で勃起してるはしたないオ……ンには、コレでされるのがお似合ひよね?」

藤香はそう言つて、仰向けになつた章伯の股間の

前、両脚の間に座る。そしてその長くムチムチした両脚を伸ばし、足の平で少年の肉棒を擦りあげていった。

「う、あ……藤香、そんなやり方……っ。そつちこそはしたな……ん、あああつ」

「感じての? 素直におつしやい、章伯? 私の足でオ……ン……ン擦られて、感じてるんでしよう?」

(こ、れ……っ。足コキいっ。なんなの? 足の裏で、指先で……章伯のオ……ン……ンがビクビクして……ゾクゾク、してくるうっ!)

勢いに任せて行い始めた足コキという、アブノーマルなプレイに、藤香の背筋をゾクリとした快感が駆け上つていく。

唇からは熱く艶っぽい吐息が漏れ出て、獣耳と尻尾の毛がゾワゾワと逆立つてくる。

足裏と十本の指先には、章伯の肉棒の固く、大きく脈打つ鼓動が直に伝わってくる。溢れる量を増していく先走り汁が爪の先から、指の間にまで絡まっ

ていき、ネチャネチャと半透明で淫靡極まりない性欲の糸を引いている。

「は……あつ。藤香の、足で……うあ、あああつ」

特殊な責めを受け、初めは驚き、恥ずかしそうにしていた章伯の声に、徐々に快感の微熱が混じってくるようになる。

藤香は悩ましい下着姿で、股の間にポリウムたつぷりのお尻を置いた妖艶な姿を見せつける。足の平で勃起しきつた肉棒をシユシユッと優しく、そしてときに激しく擦りあげていく。

(ああ、章伯の牡の臭いがすごいわ……。んっ、くせになりそう。もつと発情して章伯っ、私も感じて……あなたのモノを抜くの、すごくイイわっ!)

少年の逸物の先端から香る牡の濃い発情臭に、鋭敏な鼻がヒクヒクと反応し、それだけで身体が熱くなつてしまふ。

妖狐のサディスティックな快楽と、恋する乙女の、男に力強く組み伏せてほしいというマゾヒスティックな快感が藤香の内側で絡み合い、獣の官能を高め合っていく。

「と、藤香……すご……。んあつ、くうっ」

足裏だけでなく、十本の足指を勃起ペニスに絡ませての足コキに、初心な少年の身体が快感に震える。あどけない少年の眉根が、ハの字に下がり、肉棒から発する痺れるような快感に、没頭しているのがよくわかった。

藤香も足先から進むビリビリとした快感の電気信号に、九本の尻尾をビクビクと小刻みに揺らして、章伯との官能を牝の本能で享受していく。

（章伯ったら、私の足ですごい感じてるわ。もっと気持ちよくしてあげる。私でたくさん感じてちょうだい、章伯っ）

アプノーマルな責めをしているという、恥ずかしさが徐々に薄れていき、少年に対する愛情が、火照った女体をさらに淫らに目覚めさせる。

十本の細く長い指先を、器用にそれぞれ別のタイミングで動かす。

少年が一番感じている部位……勃起し、包皮の完全に剥けきったカチカチのペニスの雁首を、足指すべてを使って重点的にシユリシユリと、何度も何度も扱っていく。

「ああっ、藤香すご……っ。はあはあ、藤香の足……気持ち、イイッ！」

「どうとう本音が出たわね？ どんどん固くなってるわよ、章伯のオ●ン●ンっ。うふふ、もうイクの？ イっちゃういなさいっ！」

瞳をきつく閉じるほどの快感にうめく章伯を見下ろすと、背筋にゾクゾクとした閃きが走る。と同時に、まるで自分自身が性的に苛められているかのような錯覚に陥ってしまう。

もう十分すぎるほど大きいと思っていた章伯の剥き身のペニスが、藤香の精力的な足コキによって、さらに一回りも太くなる。

足の肌で触った感じも、まるで炎で打ち立ての鉄の棒のように、熱くて固い。

華奢な身体に宿った、千年前の屈強な章伯を思わせるその圧倒的な牡の性的魅力の肉棒に、藤香の牝欲が熱く刺激されていく。

（足コキい……。もう病み付きになっちゃうそうっ私、発情してる。章伯のオ●ン●ン擦るの、すごく興奮するわっ！）

大きい獣耳がピンつと立ち上がり、妖艶な下着姿の白い肌に、ジワリと大粒の汗が浮かぶ。水気を帯びた下着が熱く張りつめた肉感的な肢体に、ぴゅちりと張り付いていく。

ムチムチした太ももまでもしっかりと使って、熱く膨れ上がった雁首だけでなく、陰茎すべてを余すところなく丹念に、足平、指すべてを使ってシユシユシユツツ！ と擦りあげていく。

「あつ、あつっ！ はああん、章伯……っ。んっ、んんっ……ふうふううっ！」

まるで膣にペニスを突き込まれているかのように、女蜜が牝の花園からジワリと染み出してくる。汗だくになった全身が、両脚の激しい上下運動とともに淫らな発情臭を発散させる。

「くっっ、藤香……ごめんっ！ もうだめだ……僕っっ！！」

少年の逸物がビクンツと震え、自ら腰を突き上げてる。これまでどれだけ誘惑しても、性欲を露わにしなかった章伯の牡の反応に、藤香はこれまでにない満足感を全身で感じる。

勃起巨根の先端が最高潮に熱くなり、藤香の足指が根元から雁首を、思いきりズリユリイイ！ と擦りあげた瞬間……。

ドピユオオオツツッ！ ドピユウウウウツツッ！！

「ひあつ、あんっ……ああんっっ！」

足はおろか、壊れた噴水のようにぶちまけられた大量の白い男汁が、下着姿の藤香の全身にべつたりと牡の情欲の臭いを染みつけた。

ドロリとべつと熱いザーメンが、乳首の上を通って、藤香の爆乳を垂れ落ちていく。下着姿の女性に、パケツでぶちまけられたような精液の白が塗りこめられる。

（すごい勢い、それに量……。あなたのザーメン、とっても熱いわ）

敏感になった鼻をヒクヒクさせると、恋する人の濃い臭いが充滿していて、それだけでたまらなく幸せな気分になってしまう。

「ごめん藤香……僕、こんなに気持ちイイの初めてで……っ」

見れば、当主である藤香の足コキによって派手に射精した章伯は、はあはあと息をあげながら、申し訳なさそうにこちらを見上げていた。

「ふふ、堪え性がないわねえ。私の足なんかでイッチやうなんて……浅ましいっつらないわね、章伯？」

きつい言葉を発しながらも、少年から見えない位置で、九つの尻尾はふわりふわりと左右に触れている。

（私も……はあ、もう我慢できないわ。章伯、ああ……章伯っ）

欲情しきった牝狐の本能が、艶やかな下着に隠された女の秘園を奥からキュンキュンツと熱く蕩けさせる。

身体中から染み出した汗で蒸れた股間が、もう我慢できないくらいに燃え盛っている。

「藤香……。あ、僕たちちやっぱり……」

「ふふ、説得力ゼロね。コッチはさつきより固くなってるくせに……。あなた、もう辛抱たまらないん

数日後

ピュアピーチへ
B・F

大樹は預かった
返して欲しくば
指定の場所の廃ビル
まで来られたし

最後のピュアメイツ 桃香を待つのは…!?

美少女魔法戦士
ピュアメイツ
PURE MATES episode 6
すけさぶろう
漫画 助三郎
COMIC

でも
行かないわけには
いかないよ

人質をとられている…
最悪だよ…

このまの正体が
わからない…

この「ピュアメイツ」
連絡がとれない

それに…

私いま…
不思議と力がどんどん
湧いてくるの…!!

しかも本来なら
桃香の契約者である
ローゼ様を通して流れる
はずなのにこれは…

確かに今ものすごい「力」が
「王の器」から桃香に
流れ込んでいるピュア



さて本当にこの娘に
翠アズキが言っていたような
力があるのか：



前号までのあらすじ

妖魔バッド・フェアリーの肉奴隷に堕ちたピュアメイツの4人。さらに最後の一人、ピュアピーチのもとへ、従兄弟の大樹がさらわれたという知らせが入り…。





…な!?
なんで俺だけ…!?

それは
こっちの台詞だよ

なんで殺気も出さず
攻撃もしない人が
一緒に落ちてくるかな?

もうちょっとで
一緒に斬ってたよ

いや…
脅されて
仕方なく…

…でももうちょっとで
一緒に…俺
バッドフェアリーだぜ?

見ればわかるけど?

でも
人質としての
なんで
襲ってくるコト?

アンタには懸賞が
かけられてるのさ

今俺達を束ねているのは
ギムジンって奴なんだが
そいつがアンタを倒した奴に
首領の座を譲るって言い出してな

そんな話しても
大丈夫なの?

いや俺を脅してた奴は
アンタが斬っちゃったから

…ああ
いや何でもねえ

いや
とっても怖そうな二人が
こっち見てるんだけど

ノワールと
ネグロ？

逃げたほうがいいぜ
二人とも妖精王と
タメ張る実力者だ



バッド
フェアリーの
面汚しが!!



何故バッドフェアリーを
かばう?

気のいい人は
死なせたくな
くない?
じゃない?

それと私護る人がいる
ほうが力出るんだよね

気を抜いたら
一気にやられる…!!

こ…この人…
すごい力だ…!!

何故だろう
こんな強い相手
初めてなのに…

負ける気が
まったくしない!!

桃香に「王の器」から直接
力が流れ込んでるピュア…

それも
桁違いのカピュア…!!



なっ…!?

さらに変身だと…!?

ば…
馬鹿な…!!

よくも
ノワールを…!!

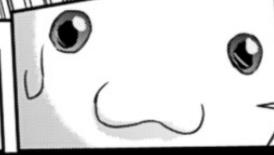


速い!!

しかしこいつの
変化した様相
どこかで!!

そつだ…
あれは伝説の…!!

「真の王」
の「器」が



桃香さんの
強さが私達で四番目って
仰いましたけど

桃香は時々ローゼ様を介さず
『王の器』から直接力を
引き出しているのはいくら

そんな事
できますの？

『王の器』が
真の王の
器めれば
可能じゃ

桃香さん
時々とてもなく
強くなりませんか？



真の王？

おつひに桃香さん
「真の王」の器「本来の
王」の器「真の王」の
強の形がそつだなのか…

「真の王」の
器がそつだなのか…



もしあの
桃香という娘が
翠の聞いた話
通りの者ならば…

「王の器」の力を
完全に使えるはず…
だとするよ…

その力は

妖精王を遥かに凌駕する!!





人畜の命を
盾にな

は！

監視は終わりだ
ヴェルデ
あの娘を拘束して
連れてこい

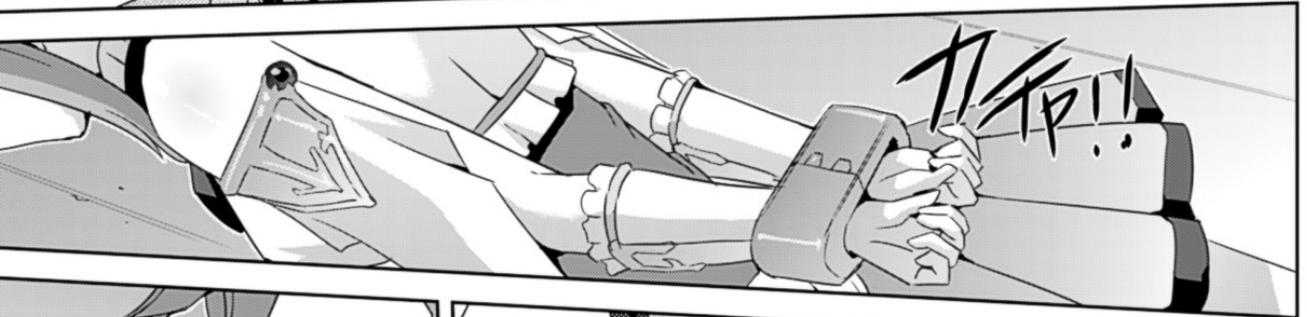


素晴らしい！
予想以上だ！



厄介な二人もあの娘が
片付けてくれた

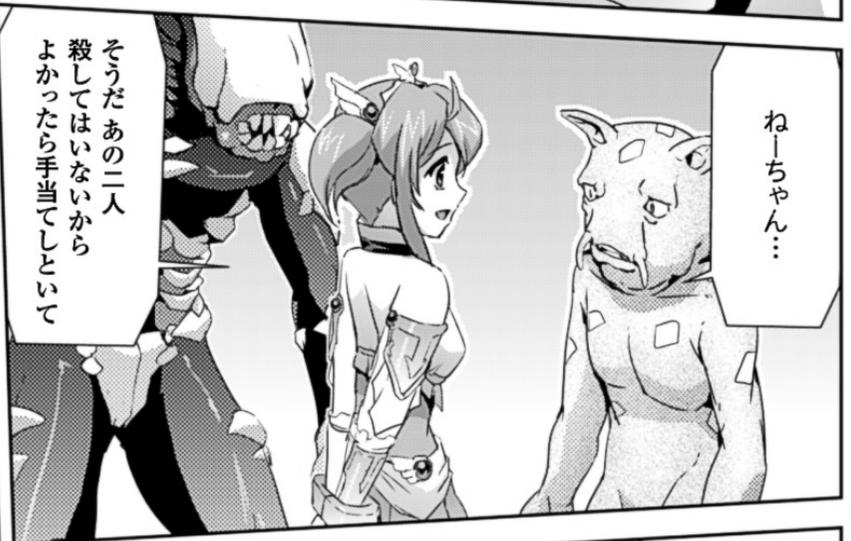
あの娘を我が物にすれば
俺が妖精界を統べる事も
可能だ



カチャ!!



ありがとう 貴方のおかげで
バッドフェアリーも
悪い奴ばかりじゃないって
わかったわ



ねーちゃん…

そうだあの二人
殺してはいないから
よかったら手当てしといて



私人を
見る目は自信
あるんだよね

二人とも
実はいい人でしょ
わざわざ一人づつ
かかってきたし





この女なぞ
お前が来た途端
オ●ンコをキyunキyun
させておる

虐められると
悦ぶマゾだからな



なに女どもも
悦んでセックス
しているのだよ



桃...
わ...
わらひ...



れ...
檸檬ちゃん...



わらひ
変態なマゾ♡

変態マゾの
イフの見ええ♡



対魔忍

NEAR FUTURE KUNOICHI ADVENTURE
TAIMANIN ASAGI 3

アサギ

~淫獄都市の雌忍~

第三話 アサギ先生の恥蜜授業

小説
NOVEL

キ フ オ サ ス
Kyphosus

挿絵
ILLUSTRATION

りんどう
竜胆

原作
ORIGINAL
Anime LiLiTH



圧倒的な快感の前に
再びアサギ敗北す！

登場人物紹介



井河 アサギ

天才的な剣術と体術、人知を超える光速のスピードが武器。対魔忍養成学校・五車学園の校長も務める。



甲河 アスカ

孤高の“抜け”対魔忍。かつてはアサギの下でさくら、紫とともに任務に投入されるも、ある時から失踪する。

沢木 浩介

アサギの婚約者だった沢木恭介の弟。現在は魔界医フルストにより、人体圧縮魔術を施され肉塊に変えられている。

前号までのあらすじ

ノマドによって愛する浩介を奪われたアサギは救出に動くも、フルスト、そして誰に捕えられ、触手調教の中で催眠刻印を施されることになる。さらに地下都市ヨミハラで調教として辱められ、その身体は官能に支配されつつあった。

「……」

今夜も、デモンズ・アリーナの観客席は、欲望に目を濁らせた男達で満員だった。

「楽しみだぜ。対魔忍の雌犬が、どんな無様を晒すかよう」「なんてつたつて今日は、あのパワーレディが相手だからな」

観客達のがやがやと喋り合う。眼下のステージはまだ照明が点いておらず、真っ暗なままだ。

「で、今日の試合はどんな趣向だろうな？」

「宣伝じゃあ、スマホで検索とか言ってたが……お、何だこのアプリは……」

ステージの暗黒の中、観客達の声が聞こえぬかのように、アサギは目を瞑り、ゆっくりと呼吸する。今回は武器はない。忍服は新調されたものだが、肌触りが気になった。ノマドが勝手にコピーした代物なので、本来の忍服と違うのは当然なのだが、それにしても妙な感触だった。動作の邪魔にはならぬものの、やや厚手で、生地が妙に固い気がする。

（それより、疲労も問題だわ……身体が重い……）

彼女は数時間前まで、雌椅子として陵辱されていたのだ。その後入浴と、わずかな食事が許されたも

の、睡眠不足で頭の芯が痺れるようだった。下腹部の粘膜も充血したまま、ずきずきと疼いている。

（く、ううっ……あんな格好で、嫌らしい男どもに乗られて、犯されて……自分のおしっこまで飲まされるなんて……思い出したくもない……！）

数日間にわたり不眠不休で犯され続けたのだ。彼女に今、見せ物のアリーナに立つだけの体力が残っているのは、自らの尿や男達の精液を口にしたらという屈辱の結果でもあった。

（こうなったら、何があっても必ず……生き残ってやる……！ 生き残って、助ける……浩くんっ！）

アサギは家族であり、恋人でもある少年の姿を思い浮かべた。彼を救出するという目的だけが、過酷な責め苦の中で彼女の精神を支えているのだ。

そこにアナウンスが響いた。

「それでは、本日の頂上戦を執り行う。まずは……百戦錬磨の『鋼鉄女傑』パワーレディ！」

「おおおっつ！」「来た!!」「いけ、いっけえつ」

歓声とともに、ステージの一角が照らされる。

そこには、プロレスラー姿の、筋骨隆々とした女がポーズを決めていた。アサギよりも頭半分ほど身長が高く、全身を覆う分厚い筋肉のおかげで体重も三割増しはあるだろう。髪は金色に染め、顔には炎のようなペイントを施している。

アサギはその女に見覚えがあった。同時に、脳裏にわざとらしい声が響く。

（あーら。前にアサギちゃんがつかり負けちゃったパワーレディちゃんがお相手なのね。じゃあ、存分にリターンマッチできるように、催眠刻印は使わないでおいてあげる♪ くくっ……）

催眠刻印により彼女を支配し、責め苦を与え続けている裏切り者、臍だった。

「……催眠刻印を使わない？ ふん。どうせしようもない引っ掛けでしょう？」

長年、臍の邪悪さを散々思い知らされているアサギはその言葉の本気にしなかった。

（あらやだ、信じてくれないの？ でも、イイことはまだあるのよ？ この試合にもし勝てたら、アサギちゃんの大事な大いいな、浩くん？ も人間に戻して、地上に還してあげちゃう。ジャジャン♪）

「なっ……!?!」

不意に少年の名前を出されて、アサギの心臓の鼓動が大きく乱れる。

（お、落ち着け。臍が約束など守るものか！）

動揺を鎮めようと、彼女は必死で呼吸を整える。

（私のことが信用できなくても、これはブラック様のご指示だから、必ず守られるわよ？）

アサギの心は乱れる一方だった。彼女を捕らえている闇の王ブラックは、一体何が狙いなのか。

「……ほ、本当なの……?」

（プッ、何その必死な顔！ 面白すぎるわアサギちゃん。ま、こればっかりは本当だつてばあ）

どこから見ているのか、臍の嘲笑が脳内に響く。

（……落ち着け……落ち着け、私。どの道、同じことだわ。負ける訳にはいかないもの……）

と、アサギの頭上から真つ白なスポットライトが降り注ぐ。その光が彼女を現実引き戻した。これから闘試合を強要されるのだ。

「……対するは、我らノマドに膝を屈した雌犬対魔忍！ 前回は強化外骨格・雷電に敗北し、雌椅子として諸君を楽しませてくれた、調教アサギだ！」

アナウンズに観客達の罵声が追従する。

「くたばっつちまええ！」「雌豚！ 雌豚あ！」

「ひひ、今度はどんな無様を見せてくれるんだ？」

対戦相手の女も、にやにやと笑って言う。

「……よう、久しぶりじゃねえか、くく。今日もハイハイ泣かせてやるから、楽しみにしてな」

アサギは何年も前に、この女と戦わされたことが

「……うりうり、さわさわ……」

「おつ、乳首空いた。よし、そりゃー!」

スマホには、忍服の乳房が大写しになっており、乳首にマーカーが表示されている。男の親指と人差し指がそこにピンチ操作をした。

「あはうっ!」

画面が大きく揺れる。同時に、眼下の闘技場でもアサギが仰け反った。

男の二本の指は、画面上で摘んだ乳首をくりくりと回転させる。

「ひっ、ひゃあううっ! な、何が、一体……!」

闘技場では、アサギが身体を不規則に震わせながらも、辛うじてラリアットを回避した。

「はははっ、さすがは淫乱、よく感じてやがるっ! 現実のステージでアサギが悶える様を横目で追いながら、男は画面上の乳首をこねくり回す。

「お楽しみ頂けているだろうか、諸君。このアプリ「調教リモコン」は、アサギのコスチュームに仕込んである人工筋肉を操作するものだ。是非、皆の力で、あの雌犬を躡けてやっつけて欲しい!」

「そ、そういうこと……! くっ、ううっ……ふざけた真似を……あうっ!!」

ようやく自分の身に起きていることを理解したアサギだったが、だからといって手の打ちようはなかった。人質のかかった真剣な戦いを、安全な場所に座った卑怯者達に、お手軽に妨害されるという屈辱に歯噛みするばかりだ。

「なお、アプリは無料だが、課金によりパイプ機能なども開放されるから、是非試してくれたまえ!」

「またかよ! あこぎだな」

「金なら払うからさっさと使わせてくれよ!」

辱めに細かく金儲けを絡めてくるのが、尊厳を勝手に切り売りされているようで、腹立たしさに拍

車をかけている。

そこに前蹴りが飛んできた。

ゴッ……!

パワーレディのゴツイブーツを十字受けてガードして、アサギは反動に後ずさる。その時、ぐりぐりぐりぐり……!

「くっ! んあつ、あ、あああああつ……!!」

抗い難い鋭利な愉悦が背筋を走り抜け、アサギが全身を震わせる。どこかの卑怯者の指が、とうとう淫核を摘み上げたのだ。

「ふふん、リモコンか何か知らんが大変だな。だが、遠慮しないぜ!」

パワーレディは容赦なく蹴りを連発してきた。

ゴッ、ガッゴッ、ドガッ……

よろめきながらも防御するアサギに、ハイテクの仕込まれた布地がぐねぐねと蠢いて、乳房を揉みしだき、股間をまさぐる。首から下の全身のあらゆる場所を撫でられ、くすぐられ、つねられる。

「あつあつ、く、糞……! くあああつ……!」

闘敵対魔忍の手足を、背筋を、びりびりと甘美な電流が流れては、鍛え抜かれた筋肉を虚しく戦慄かせて、行動を妨害しようとする。

「そらあつ!」

身体中の血管を走り回る痛切なむず痒さに翻弄されながら、アサギは掴み掛かる腕を辛うじて躲す。

「いつ……ひあああああつ……!!」

次の瞬間、乳首を見えない指に引っ張られた。同時に、子供のペニスほどにも膨らんだ淫核を荒々しくしごかれる。

「あやっ、止めろっ、そんなところしごくなつあつあああああつ……!!」

無数の指にしごかれる度に、海綿体の芯から鋭い悦楽のバルスが送り出される。しごき出されたバルスはアサギの身体を縦を貫いて、全身の神経を狂わ

せ、頭の中で閃光となって炸裂し続ける。

恍惚に視界が眩み、足腰ががくがくと震える。アサギは立っているのがやつとの状態だった。

（あくっ、動けっ、足っ! こんなところで……!）

（あんな奴らになんて、負ける訳にはいかないっ!! 動け……! 浩くん……くっ、うううっ）

「オラッ、オラアッ!」

強烈なパンチとハイキックが容赦なく飛んでくるのをギリギリで受け止める。

アサギは完全に守勢に回っていた。いや、体内で不規則に炸裂する大小無数の快楽のせいで、防御にすら集中できない状態だった。

と、不意にパワーレディの巨軀が沈み込んだ。ガゴッ……!

強弱無秩序な快楽に翻弄されるアサギがそれに気づいた時には、既に手遅れだった。

「しまったっ……うあつ!」

どすっ……!

ローキックに奇麗に軸足を刈られ、アサギはついにリングに転倒してしまった。

「ひやはっ、やつたぜ!」 「さま見ろ雌犬!」

観客達は、悪戯な悪童のように歓声を上げる。

（ま、まっ……やられるっ……! こんな快楽に負けたら……浩くんを助けられないっ……!!）

パワーレディが踏みつけてくる。

ガッ!

アサギは転がってリングブーツを躲した。

（ほら危ないっ! しっかりしないと、浩くんを助けられなくなっちゃうわよ? アハハッ!）

「くっ……ま、負けるものかっ!」

アサギは歯を食いしばって手足の戦慄きを抑え込み、立ち上がる。

（数秒でいい。数秒の間だけ、快感に耐えるんだ!）

（それだけ自分の身体を完全に制御できれば……）

それだけの自由が確保できれば、パワーレディ程度の相手なら戦闘不能にできる自信はあった。

「ちっ、しぶといな。行くぜっ、オオラララッ！」
アサギの考えを察することなく、パワーレディは力任せの剛拳を連発してくる。

ガッ、ドゴッ、パスッ……！！

それを捌きながら、アサギは精神を集中し、体内の気の循環を整えていった。

「ふっ、はあっ、ふっ、ふうっ……」

荒れ狂う欲情の波をまとめあげ、タイミングを合わせていく。そして、次々と送り込まれてくる刺激と、発情しきった肉体の間で、台風の目のような短時間の均衡を作り出すことに成功した。

（来た……！！ 一撃で落とす……）

それは、スポーツ界のトップアスリート達の得る境地にも似た、極限の均衡だった。快楽に苛まれる筋肉達も、この数秒だけは思い通りに動く筈だ。

ブンッ！

大振りのスイングを沈み込んで回避する。そのままパワーレディの背後に回り込み、延髄に気の籠った一撃を決めようとした瞬間だった。

ヴィイイイイイッ……！！

「っひっああああああつっつっ！！」

努力を嘲笑うかのように、今までにない強烈な震動が充血した淫核を襲いかかったのだ。

アサギの肉体の快楽バランスはあっけなく崩壊した。痺れるような快感が全身を支配し、かざした腕を振り下ろすことなく、仰け反ってしまう。

「おおっ、効いてる、さすが課金機能のバンプだけあるなあ」

「糞、羨ましいぜ！」「俺も課金してやるっ！」

卑怯者達からの屈辱的な妨害が、このタイミングでさらに強化されていた。

……ウヴッ、ウヴウヴウウッ……！！

「んあっ、あああっ……くっ、こんなっ……うあああああああつ……！！」

性感神経を直接揺さぶられるような悦辱に、膝がぐくぐくと笑う。そこに。

「ちよこまかと……喰らえっ！」

ドボオッ！

パワーレディの猿臂肘打ちが、動きの止まったアサギの水月を直撃した。

「ぎやふうっ！」

ずさああっ……！！

内臓を打ち抜かれる衝撃に、アサギは身体をくの字に折り曲げて転倒した。そこへ、パワーレディが飛びつくようにしてアサギの足首を掴む。

「ぐははははは……！！ さあ、捕まえたぞ！！」

獲物を仕留めた肉食獣のごとく咆哮すると、パワーレディはそのままアサギを逆さ吊りにした。

「がはっ……あぐっ、くっ……ごはっ……」

逆さ吊りで喘ぐアサギの、唇から零れる泡まじりの唾液が、頬を汚す。まだ猿臂による内臓ダメージのせいで、呼吸もままならなかった。

（うう、なんてことっ……！！ こんな、下劣な奴らにつ……いや、まだだ、まだ諦めるなっ！！）

知覚偽装のせいで、水月へのダメージが奇妙な快感となつて全身に染み込んでくる。絶望と快楽に挫けそうになる自分の心を、アサギは必死で支えた。

（アハハハッ、無様っ、無様だわアサギっ！ 催眠刻印の操作もないのに、こんな程度の筋肉バカに敗北するのよお前はっ……アハハハハハハッ！）

臍の嘲笑とともに観客達の歓声が響く。

「うおおおっ、やっつたあつ」

「よおし、もつと強い奴を課金してやる！」

ウアアアアアアアアンッ！

さらに強烈な震動がアサギの秘裂に襲いかかった。布を持ち上げるほど勃起した淫核が、びりびりと震

えているのはつきりと見て取れる。

「あぎひあああああつ……！！」

脳髓を沸き立たせるような震動快感に、逆さ吊りの身体を、壊れたブランコのように前後左右にくねらせてしまう。だが、掴む手は緩みもしない。

にゅぢゅるるっ、ぢゅるるるっ……

ぎゅぢゅうううううう……

「あああがああああつ……！！」

震動と同時に無数の指がアサギの媚肉を掻き回し、引つ掻き、こねくり回す。熱い愉悅の波が幾重にも股間から膣下へ、雌器官へ、内臓へと広がっていく。粘液が溢れ出して、染みがあつという間に忍服の膣まで到達した。

「へえ、もうどろどろに濡れて……何だよこりや、チポ並みに勃起してやがるじゃねーか！」

上から覗き込むパワーレディが言う。

（くっ、糞……こんなところで負ける訳には……助けるんだ、浩くん、浩くんっ……！！）

逆さ吊りのまま、もがくアサギ。その姿に、パワーレディはサディスティックに唇を歪める。

「ふん。このままぶち殺すのは簡単だが、それじゃ詰まらん……おい、アレを出してくれ。こいつが気絶するまで責め立ててやる」

ガゴン……

ステージ中央の床が開いて、下からミニサイズのパワーショベルのような重機がせり上がってきた。ただ、アームの先端についているアタッチメントは、バケットではなく、消火器ほどの円筒だ。

キヤリキヤリキヤリ……

重機はゴムクローラを回して、逆さ吊りのアサギに近づいてくる。中には乗っていないようだ。

「出た出たあつ！」「処刑重機来たっ！」

重機は円筒をアサギの顔の前に突き出す。

ガンッ！

「っ！」

轟音とともに円筒がびりびりと震えた。

ガン！ ガン！ ガン！ ガン！

立て続けに重機の円筒が震える。

（なっ……す、凄い出力で震動しているっ……！も、もしあんなので責められたらっ……!!）

「こいつは空気圧削岩機を改造したパイプさ。テーマみたいな強情女も速攻昇天って訳だ」

パワーレディは両足首を掴んだまま、アサギの身体をステージに下ろすと、すかさずその背中に腰を落として押さえ込んだ。

「あっ……!! ぐ、くうっ……」

そして下半身を仰け反らせ、逆エビに固める。アサギの股間がほどよい高さに突き出される体勢だ。

「おら、来いっ！ この超強力パイプで、たっぷり揉みほぐしてやるからよおっ！」

その行く先では、処刑重機の削岩パイプが轟音とともに震動している。電動ではなく圧縮空気で駆動しているため、震動の出力がケタ違いだ。

通常なら苦痛だけだろうが、知覚偽装を受けているアサギにとつてはそれこそ堪え難い快楽になってしまうに違いなかった。

「なっ……!! あんなモノにかけられるなんてっ！い、行くものかっ……!! くうううっ……!!」

ぐぐっ……ずるっ……

パイプのもたらすであろう恥辱に戦慄して、アサギは必死に腕を突っ張って抵抗する。頬は引き攣り、背筋を冷たいものが伝う。

「ち、無駄な抵抗しやがってっ……!!」

不自然な姿勢のパワーレディは力を出しきれず、一旦はアサギと拮抗する。だが。

ぢゅぬぬぬぬっ、ぐりゅりゅりゅりゅりゅ……

ぢゅぢゅぢゅ、ぢゅぢゅぢゅぢゅぢゅ……

アサギの全身を無数の屈辱的な愛撫が襲った。悪意ある観客達の介入だ。

「あくっ、糞っ、くうううううっ……!!」

胸の下にぶら下がる乳房が無遠慮に揉み込まれ、先端の勃起をこりこりと捻られる。肋骨に沿ってずきずきと痺れるような悦楽が流れ、腕の力が抜けそうになるのをアサギは懸命に支える。

「ううっ……やっ、やめろっんんっ……!!」

発情花弁を深く浅くなぞられて、身体の内底を切ない疼きがたうち回る。全身の筋肉が不規則に震えそうになるのをアサギは必死で押さえ込む。

張りきったクリトリスを手荒くしごかれる度に、衝撃のような愉悦が襲いかかり、意識が飛びそうになるのを奥歯を食い締めて耐える。

全身にどっと汗が噴き出す。彼女の意志に反し、下腹部の奥で雌器官が快楽を欲して身じろぎする。早鐘のごとき心臓は、甘く発情した血潮を全身に送り出していた。

「くくっ、いつまで頑張れるかなあ？」

今や、アサギはパワーレディだけでなく、彼女の筋力を快楽によつて奪おうとする観客達の指とも戦わされていた。そして、指だけでなく。

ぬりゅりゅりゅ……

じゅりゅ……ずりゅりゅ……

熱く滑らかな感触が乳房や臀部、秘裂に押しつけられてきた。その物体達は、執拗にアサギの柔肌の上を這いずり回って、欲情を掻き立ててくる。

指よりも太く、熱く、脈打つ感覚が無数に伝わってくる。アサギの肉体は、それが何かをよく知っていて、認識より早く興奮していた。這いずられた肌

の下の筋肉が、血管が、それを欲して強く疼く。

（な、何、これ……あ、ああっ!!）

観客達がズボンの前を開いて、スマホの画面に剛直を擦り付けているのだ。肌に押しつけられる無数

のペニスに、彼女の雌器官は激しく収縮し、強い本能的欲求を全身に送り出した。

「くっ、そんなモノっ押しつけるなっ……うっっ！」

がくっ、ずるなっ……!!

アサギは大きく引きずられていた。力が一瞬抜けてしまったのだ。慌てて腕を突っ張ったものの、破滅的な空気圧パイプはぬかるみきつた股間の寸前にまで迫っていた。

（まずいっ、こ、こんなっ、今やられたらっ……耐えなきや、耐えなきやっ……!!）

だが耐えるにしてもいずれ限界がくる。といつて、この体勢からの脱出は常人には不可能だ。無数の指による責めはなおも続いていて、パイプ機能が今は停止しているらしいことだけが救いだっつた。

（そうだ！ この状況でも、浸透勁なら……）

アサギは唯一の可能性に思い至った。今のパワーレディの姿勢なら、急所の一つである腎臓に手が届くのだ。通常のキドニーローが有効な体勢ではないが、アサギならば気を込めた掌打により、鎧のような筋肉を浸透してダメージを与えられるだろう。

（だけど、片手でも離したら確実にあれを……パイプを喰らってしまう……!! うっ、くうっ……あ、あんなので、あそこを……やられてしまう……!!）

片腕ではパワーレディの力に抵抗しきれないのは明白だった。もし失敗すれば、淫部への強烈な責めを確実に喰らうのだ。

「くくくっ、手が痺れてきたんじやないか？」

パワーレディが嘲るように言う。彼女の引つ張る力は揺るぐ様子も見せないが、アサギの筋肉疲労は限界に近かった。

（どっちみち、このままじゃジリ貧。危険な賭けだけど、やるしかない……!!）

覚悟を決めたアサギは引きずりに抗いつつ、呼吸を整えて体内を循環する気を練り上げる。そして、

アナウンスとともに、新たなアタツチメントが、剥き出しのアサギの股間に接近する。

……ぬぶぶぶぶ

「な、何を……うあああああ……!!」

金属の冷感にアサギは呻く。今度は、プローブが火照りきった雌肉に侵入してきたのだ。

ぐぶつ、ぐぶつ、ぐにゅ、ぎゅにゅつ……

「なんてぬるぬるなんだ。いやらしい雌穴だな」

「ははっ、びくびく動いてるぞ……!!」

観客席では、男達がスマホを夢中で弄っている。その画面には、鮮紅色に充血し、奥から止まらぬ粘液を吐き出しつつ、肉餌を欲してぐねぐねと妖しく蠢くアサギの雌腔が映し出されていた。

ぎゅぶぶつ、ぐにゅぐにゅつ……

「動くつ、動いてるつあああああ……!!」

観客達が指で画面に触れる度に、陵辱内視鏡が動いて発情肉髪がまさぐられる。

「ほほう、これがGスポットか。ざらざらだな」

小さな顆粒の密集した突出部を見つけた男が、画面上でその部分を指でドラッグした。

ぐりゅ、ぐりゅりゅつ……

「いひつつあああああ……!!」

アサギの身体を雷撃のような快感が縦に貫いて走り、頭の中で火花が散った。性感神経の集中した部位を、メカ触手の先端で引つ掻かれたのだ。雌器官がぎゅつと収縮し、どつと愛液が溢れ零れる。

やがて、陵辱内視鏡達はアサギの最深部に到達した。観客達の端末には、粘液まみれの肉壁の中央で、ひくひくと口を開閉する蕾のような盛り上がり映し出されている。

「子宮口がすっかり下りてきて、ぱくぱくしてる」

「散々触手を産んだ、使い古しの割にはいい色だ」

「あぎつ、あひぎつ、摘むなつあがつ、ぎひああ

あああああああつ……!!」

太い電流のような衝撃がアサギの中でのたうつ。メカ指が子宮口を摘み、引つ張ったのだ。

責め苦から逃れようとアサギの両手が床を力なく掻きむしり、背がくねるが、パワーレディの押さえ込みはびくともしない。胸の下で押し潰された乳房が脇にはみ出て、突った大きな先端がびくびくと痙攣するのが見て取れる。

「ははっ、いい反応だ。パイプよりもこっちのほうが風情があるな。嫌ならさっさと諦めちまえよ」

パワーレディがアサギの身体をぎしぎしと揺さぶりながら言う。

（ま、まずいつ、どんどん気持ちよくなつちやつてるつ……卑劣な連中に弄ばれてつ……くつ、耐えな

きや、耐えなきやつ……た、耐え……つ）

意識がばらばらになりそうな快楽に、目はすつかり上を向いて、瞳孔は暗く収縮している。犬のように浅い呼吸を繰り返す唇からは、唾液が泡となつて零れ落ちる。

削岩パイプの震動ですつかり茹だり上がった性愛器官を、今度は内側から直接責め立てられて、アサギの快楽は限界に近づきつつあった。

じゅる、じゅるるるつ……

その全身を、リモコン越しに何本もの熱く固いペニスの感触が這いずつていく。

ぐりゅりゅりゅつ……

「あぎつ、あひぎつ、ぐりゅりゅりゅ……」

Gスポットへの責めと同時に、子宮口への捻りと打突が繰り返される。

「あぎつ、あひぎつ、あひぎつ……まっまらあああ

あつ……耐えるつ、負けなつひうううつ……!!」

全身の神経を暴れ狂って走り回る快楽電流に、アサギはエビぞりのまま、がくがくと震え、叫ぶ。視界が霞み、意思力が失われていく。

「ははっ、いい声だ。もつと啼いてみやがれ」

「そらついつちまいなつ、イかせてやるよつ!!」

「おらおらつ、もう一度課金パイプだ」

観客達がスマホの画面を執拗にタップする。ウヴ、ウヴウヴツツ……!!

すると子宮口や、Gスポットを責めている陵辱内視鏡が強烈に震動し始めた。

「あぎつ、ひあああつあああああ……!!」

先ほどまでの責めに加えて、さらに内部からの震動により、アサギに狂気電流が流れ込んでくる。それは脳の中でピンク色の何千、何万という星となつて爆発していく。

快楽の限界を超え、破綻していく意識の中で、必死にアサギは思い出にすがろうとした。

（浩くんつ、浩くんつ……お願いつ、貴方の声を頂戴つ、そうしたら、耐えられるからつ、我慢できるからあああああ……!!）

恋人であり家族である少年の姿を、声を、懸命に思い浮かべようとする。囚われの少年の記憶を心に再生できたなら、まだ持ち直せるかも知れない。それは何の根拠もない、最後の希望だった。

「しぶてー女だな。だけど、もう限界だろ」

「あぐはつ、がはつ、私つ、わらしわつまらつあああああ……!! こ、浩くんつ……」

快楽に狂いかけたアサギの脳裏に一瞬、はにかむ少年の姿が浮かんだかのような気がした。

だが奇跡は起きなかった。

少年の姿は掻き消え、代わりに奇怪な肉球のイメージが映し出されたが、それもすぐにピンク色の嵐に呑み込まれて消えた。

（ああ……消えるつ！ 浩くんつ消えちゃうつ消えないでつ浩くんつ浩くんつ……!!）

最後の心の拠り所を失ったアサギは、そのまま一気にバランスを失って崩壊した。

男たちに視姦される
怪盗少女の処女穴!

紅の盗賊姫レイア

Deceitful thief Licia

第三話 異境の隸姫

ちくまじゅうこう
小説 / 筑摩十幸
NOVEL

すけさぶろう
挿絵 / 助三郎
ILLUSTRATION

筑摩十幸の新作「淫墮の姫騎士ジャンヌ 美姫転生」も36ページから掲載中!

登場人物紹介



レイア・リオーネ

王家の血を引く王女にして「レッドチェリー」の異名をとる怪盗少女。国を再興するため宝玉を探し求める。



エリザベート

ルハサン連邦の監察官を称する妖しい美女。レッドチェリー一味を捕らえ、肉拷問にかけける。

ブルゴック

王族の死亡により混乱するアルラン王国を乗っ取った将軍。

前号までのあらすじ

貴族ジェフティの庇護のもと、マリー、シャンティとともに宝玉を探し求める王女レイア。しかしエリザベートの囮により仲間を囚われたレイアは、彼女たちを救出に向かうも、性拷問にかけられ、その正体を暴かれようとしていた…。

「う……っ」
強烈に照りつける閃光が眩しくて、レイアは思わず仮面の美貌をしかめる。
「ダメダメ。お顔を上げて、背筋を伸ばして、もっとお客様によく見てもらうのよお」
パシッとエリザベートの鞭にお尻をぶたれ、レイアは屈辱にこめかみをピクピクさせながら気をつけた姿勢をとった。
全体に薄暗いホールの中で、レイアが立つステージにだけは目映ゆいほどの魔法灯の照明が集中している。そのステージを取り囲む扇形の席からは、大勢の男たちの淫欲にぎらつく視線が向けられていた。
（うう……こんな男たちに……っ）
レイアが身につけているのは卑猥な踊り子のような極薄の衣装。羽衣のようなシースルーのシルクが身体の所々を飾っているが、素肌のほとんどは露出させられている。たわわな乳房の頂点を隠しているのは赤いフサのついた小さなニブレス。股間も禿のようなスケスケの布きれが辛うじて恥丘を覆っているだけで、今にもワレメが透けて見えてしまいそう。お尻など紐が一本縦に走っているだけで、丸見え状態だ。くびれたウエストを豪華な純金チェーンが

ルリと取り囲み、ストレットに降ろした赤毛に揺れるアクセサリーも本物の寶石類だ。純金のブレスレットや指輪が手指のしなやかさを目立たせ、ヒールの高いサンダルがメリハリのある脚線美を際立たせている。
それらはエリザベートが用意したモノで間違いない。超高級品であり、卑猥なデザインの中にもレイアの高貴なる美しさを引き立てていた。
ただし美貌を隠す紅の仮面と、首に嵌められたゴツイ鉄付きの黒い首輪が、ただの踊り子ではないことを示している。
「ウフウフ。まずは自己紹介よお」
「くっ……み、皆様……」
「もう堅いわねえ。それに突っ立てるだけじゃ、面白くないでしょ。両手を頭の後ろで組んで、脚を開いて、お尻をプリンプリン振るのよお」
再び鞭を振るうエリザベート。鞭の先端には美麗な孔雀の飾り羽が取りつけられており、痛みはほとんどない。だが、その鞭の恐ろしさは羽に染み込んだ媚毒である。打たれるたびに毒が浸透し、レイアの処女肉を熱く火照らせるのだ。
「あくう……わ、わかりましたわ……ううっ」
血が出ればかりに唇を噛み縮めながら、レイアは命令されたポーズをとり、耳まで赤く染まった美貌を正面に向けて、事前に教え込まれた破廉恥な台詞を口にする。

「ど、奴隷商人の皆様……私……レイアは、処女でありながら……性欲がとて強く、マゾで淫乱な露出症というとても……恥ずかしい……性癖の持ち主なんです。幼いときからずっと……マゾ奴隷になって……ああ……大勢の殿方に……いじめられることを夢見てきました……はあああうん」
「ハアハア……このたび自らの……へ、変態性欲を満たすために……自分の意志で……ど……ど、奴隷

娼婦になることを……ああ……志願いたしました。どうか皆様……私を買って……いやらしい……牝奴隷に調教してくださいませ……はああっ」
火のように熱い息を吐き出したあと、レイアは腰をゆつくりと回し始める。ウエストを縛めるゴールドのチェーンが照明をキラキラと反射して、エロチックな雰囲気盛り上げる。ステージより一段低くなっている観客席からは、禿の股間はもちろんセクシーな腋の下のくぼみや乳房の下のラインなども、余すところなく鑑賞されてしまう。
「ふむ……仮面で顔が見えないのは不満だが、買っからのお楽しみか」
「しかも処女なら、かつてない高値が出そうですな」
早くも期待に満ちた声が漏れ聞こえてきて、オークション会場の熱気がグンと跳ね上がる。
（うう……恥ずかしいけど……堪えなくては）
激烈な羞恥にクラクラと眩暈を感じながら、レイアはエリザベートの言葉を思い出す。
最後の五つ目の宝玉は闇市場を流れて、今では隣国の有力奴隷商人シンチェンの手元にあるという。その国は独立戦争によって連邦から半ば自治を勝ち取っており、連邦監察官であるエリザベートでも手を出しにくいところだった。そこで娼婦として奴隷商人のもとへ潜入し、宝玉を盗み出すというのが、レイアに課せられた使命なのである。
娼婦といっても演技は宝玉を盗むまでなので、処女までは奪われないだろう。それだけはジェフティを想うレイアにとって救いだ。

与えられた猶予は三日間。その間に宝玉を手に入れないければ、マリーとシャンティは再び洗脳装置にかけられ、今度こそ完璧な奴隷にされてしまう。
「相手は腕の立つ調教師だ。さぞやお前を磨いてくれることだろう。宝玉と最高の牝を手に入れられるのだから一石二鳥とはこのことよ。ガハハハ。だが

調教されすぎて、本当にシンチェンの奴隷になってしまわないように気をつけるのだぞ。フフフ」ブルゴックのいやらしい顔が脳裏に蘇る。

「わかつてますわよ。私は誰にも屈しないっ」

オークション会場の中央に据えられたVIP席、そこに腰掛けた小柄な老人がシンチェンである。皺だらけの痩せ細った顔の中で、鼻眼鏡の奥の目玉だけが燐光でも灯しているかのように爛々と輝く。レイアに興味を持つているようで、まるで血に飢えた吸血鬼のようなただならぬ気配を漂わせていた。

細長い鼻髭を揺らしてチビチビとアルコールを舐めるように飲みながら、はだけた股間を若い女奴隷に唇奉仕させている。肉棒はまだ半立ち状態といった感じだが九十という年齢を考えれば異常な精力の持ち主と言って良く、見ているだけで餓えた体臭が漂ってきた。さすが東方の異国からたつた一人であり住み、一代で巨大な人身売買組織を創り上げ闊歩を支配してきた男である。

「あんなヤツに気に入られるようにしないとイケないなんて……」

惨めさと悔しさと胸が張り裂けそうだが、仲間を人質にとられていては、抵抗はできない。

「もつともつとアピールしないと、関係ない変態男に競り落とされちゃうわよ」

媚毒鞭でお尻をさわさわと撫でるエリザベート。

「あ、あうっ……わ、わかりましたわ……うん」

毒師としてのエリザベートの恐ろしさを骨身に染みてわからされているレイアは、眉根をきゅつと寄せて渋々頷いた。

「はあっ……はあっ……わ、私が本気で奴隷志願している証を……ああ……お見せしますわ」

（今だけの……我慢ですわ……）
股間を隠していた褲ショーツの両側の紐に指を引っかけてゆつくりと結び目を解きにかかる。

悪徳將軍たちにはすでに見られていたが、これだけ大勢の前だと、恥ずかしさもまた別次元だった。王家の女として、いやそれ以前に年頃の少女として、あまりにも過酷な羞恥地獄。ドクンドクンと心臓が高鳴り、色白の背中にじつとり汗が噴き出す。

「どうしたのかしらあ？ 手が止まってるわよお」

ピシィッと一際鋭い鞭が柔らかな尻肉を打った。

「ひいああ……鞭は……あひゃんっ！」

ピクンッと全身が震えた瞬間、ショーツの紐がほだけ、下着ははらりと床に落ちてしまう。

オオオッとどよめきが起こり、会場のすべての視線がレイアの聖域に集中した。

（あ、ああ……は、はずかしい……こんな姿を見られるなんて……）

そこには本来あるべき若草はなく、まったく無毛の肉土手と、深く縦に走るスリットが露わになっている。あの後も延々と拷問刷毛水車にかけられた結果、陰毛は永久脱毛されてしまい、童女のようにツルツルにされてしまったのだ。

ワレメをこじ開けるようにして肥大化された肉芽がツンと尖り立っており、さらに濃い桃色の花びらまでもがいやらしくはみ出している。

薬物改造を施されたクリトリスは小指の第二関節から上ほどの大きさがあり、男たちの目を嫌でも惹きつける。クリトリスにはパネ式のリングが嵌められて、さらに鈴までもがぶら下がっている。純金の鈴は見た目の美麗さと裏腹にかなりの重量があり、淫核を強く引く張つてレイアを苦しめていた。

「ツルツルのワレメちゃんとは……パイパンだったのか。それとも自分で刺つたのかな」

「それよりあのクリちゃんを見るよ。マコからはみ出て、とても敏感そうじゃねえか」

「ピラピラもエロい感じにはみ出しているぜ。さすが奴隷志願するだけのことはあるな」

（ああ……見ないで……こんな恥ずかしい身体を……見ないでっ！）

浴びせられる罵声が燃料となって、羞恥の炎を燃え上がらせる。異性に裸を見られるなど初めての体験であり、しかも性器は永久脱毛されいやらしく改造されてしまっている。あまりの恥辱に血液が沸騰し全身の毛穴から噴き出しそうだった。

「皆さん、クリちゃんに興味津々みたいよお。がに股に脚を開いて、オコも括げて、もつとよく見てもらいなさい」

鞭の先端がヒュッとしなり、軽く鈴を揺らした。

チリ——ンッ！

「はひいっ！」

澄んだ音色と同時に鋭利な快楽が突き刺さり、レイアはたまらず悲鳴を放つ。肥大化させられただけでなく、感度も数十倍に上げられており、わずかな刺激でも意識が吹き飛びそうになる。

「はあはあ、うう……や、やればいいでしょ」

震える両手指をクレヴアスに添えて左右に押し広げていく。ピチツと音がして花びらが開き、スウツと流れ込んでくる外気の冷たさに、いかに媚粘膜が熱く火照っているかを思い知らされる。

「そんなんじや見えねえぞ」

「もつと腰を突き出さねえかっ！」

情け容赦ないヤジが飛び、仮面の美貌は怒りと羞恥で真っ赤に灼けていく。だが宝玉を手に入れるためには、これを超えるしかない。

（うう……この変態ども……調子に乗って……もう、こうなったら好きなだけ見ればいいですわっ）

崖から飛び降りる心境で我が身を開帳し、グイッと腰も前に突き出した。

「ウオオッ！ や、やつぱりでかいっ！」

「あんなでかいクリトリスは見ることがねえぞ」

完全に露わになった肥大化淫核を見て驚嘆の声を

上げる男たち。それを取り囲むラビアも大きく肥厚しており、色も鮮やかすぎるほどの紅鮭色だ。
「あそこ……み、見られてる……ジェフティ様にも見せたことないのに……っ」

あまりの羞恥にカアツと身体が芯が灼け、足元もおぼつかなくなる。だが野獣のような男たちは容赦なく淫欲漲る眼で視姦を続け卑猥に改造された性器に魅せられている。

「エロいオ●ンコだな。本当に処女かよ」
「こりやあ、予想以上のドスケベ娘だぜ」

男たちのテンションが上がるにつれて、オークションの値段もどんどん上がり始める。

「ほほう、真つ赤なピラピラに極太クリとは、まるで椿の花みたいで綺麗アルネ。フフフ」

静観していた奴隷商人シンチェンも、身を乗り出すようにして入札に参加してきた。冷酷な切れ長の眼差しにも、徐々に欲情の色が浮かんでくる。

「はあつ……はあつ……あああ……そんなに……み、見られたらあ……はあうんっ」

「ああ、もう恥ずかしくて死んじゃうっ」

媚肉や肥大化クリトリスに突き刺さる男たちの視線が、まるで無数の蠟燭の滴のように感じられ、痛いほどの灼熱感が淫核を包み込む。その熱さが子宮にまで伝わってきて、体温が急上昇し呼吸も乱れてくる。

「ああ……頭がボウツとして……身体が熱い……なんですの……この感じは……？」

これまで感じたことのない未知なる高揚感に、レイアは戸惑いながらブルブルと腰を震わせた。

「ウフウフウフ。もしかして見られて感じているの？ レイアちゃんは露出症の気があるみたいね」

「ハアハア……そ、そんなこと……ハアハア」

ハッキリと否定できず、レイアは口ごもる。そんなはずはないと思っけていても、事実肉体は発情の兆

候を示しているのだから言い訳のしようがない。

実は洗脳装置によって、深層心理に男の視線に敏感に反応するよう暗示がかけられていたのだが、何も知らないレイアは、混乱するばかりだ。

「さあ、もつとアピールよお。変態になりきったほうが、シンチェン様に気に入ってもらえるわ」

そんなレイアの困惑の表情を見つめ、エリザベトは淫核リングに二個目の鈴を引っかける。

「ンあああ……ああ、はうん……そんな……引つ張られて……ひううっ……お、重いっ」

さらに肉芽を引き伸ばされる痛みと快楽が、鋭い錐のように恥丘に食い込んでくる。ギリギリと歯を食いしばって堪える美貌が、被虐の悦痛に引き撃つていく。

「ンフフツ、クリちゃんが疼いているんでしょ、レイアちゃん。ここでマンズリして、色っぽくイって見せてもらえるかしらえ？」

「あうう……ハアハア……マ、マンズリして……？」
「本当にウブねえ。オナニーのことよ。自分の指でクリちゃんを弄ってイクことよお」

孔雀の鞭が二つの鈴を転がすように弄ぶ。チリンチリンと鳴る音が、被虐のバックコーラスとなつて場内に響いた。

「あううっ……いくらなんでも……人前で……できませぬわ……あ、ああつ……あくうんっ！」

「露出狂の変態のくせに生意気ねえ。もうちよつと気分を出させてあげるわ」

さらに二個のクリップをゴム紐で連結したモノを取り出す。一方の小陰唇にクリップを噛ませ、ゴム紐をお尻側を経由させて、もう一方の陰唇にもクリップを装着する。

「ああ……こんな……」

花びらはパツクリと開かれてしまい、恥ずかしい乙女の何もかもが衆目に晒されてしまう。

「両手を頭の後ろに組んで、観客席をお散歩よっ」
ピシヤツとお尻を鞭打たれて、レイアはヨロヨロとステージから追い立てられる。

「オオ。変態娘が見せつけやがる」
「恥垢も残ってるし、やつぱり処女だな」

「うああ……ハアハア……し、視線が……熱い」
観客との距離がグンと縮まり、視線はますます強く鋭く肌や粘膜を刺す。ねつとり絡みつく牡の視線は、まるで媚毒に濡れた筆のように、レイアの身体に淫らな衝動を塗り込んできた。

「は、恥ずかしくて……死んじゃうっ」
目の前のピンクの霧がさらに濃く深くなり、レイアを淫欲の迷宮へと誘う。

（でも……どうして、こんな気持ちに……）
トクン……トクン……トクン……！
王女としてありえない恥ずかしい姿を意識するほど、動悸は激しくなり、体温はグングン上昇する。歩くだけで鈴が揺れて、苦しげに伸びきつたクリトリスに快美の電気が感電する。

（あうう……このままじゃ変になっちゃう）
絶え間なく送り込まれる淫悦に若く健康的な女体が反応しないわけがなく、クリトリスはますます紅く硬く充血し、処女の内側で膣肉がドロドロに熱く滾っているのが自分でもわかる。処女膜から染み出した愛液で、花園はもちろん太腿まで濡れてしまっていた。

「ほら、どんどん歩くのよ。そしてスケベな処女マコを濡らしなさいい」

鞭に追われ、レイアは淫夢の中を彷徨い続ける。どこかウツトリしたような表情を浮かべて……。そして場内を三周させられた頃――

「ああ……も、もう……歩けない……」
レイアはフラフラになって、うずくまってしまった。そこはちょうどシンチェンの席の前だった。

「ああ……も、もう……歩けない……」
レイアはフラフラになって、うずくまってしまった。そこはちょうどシンチェンの席の前だった。

チリリンッ!

朦朧としてきた鼓膜に老調教師の声が神託のように響いて、レイアはビクッと腰を震わせた。

「それと同時に、とても淫蕩でふしだらなマゾの血も流れているネ。普通に愛されるだけでは満足できない、無理矢理犯され、辱められることにこそ最高の快楽を感じる奴隷の血が」

見透かすように嗤われてレイアはますますドキリと困惑する。王女の正体はばれていないはずだが、奴隷商人の勘というやつだろうか。

「ハアハア……そんな……奴隷の血なんてえ……」
いくら肉體改造を施されたからといって、自分にそんなおぞましい性癖があるわけがない。だが今、奥底からこみ上げてくる妖しい情感はなんなのか。激しく身を灼く炎の正体はなんなのか?

「ほれ、もつとニッコリ笑うアル。そのテーブルに上がってお前のすべてを私に見せるアルヨ」

「あ、ああ……はい……」

シンチェンの魂まで透徹するような声に操られるように、レイアは無理矢理笑顔を作って高級テーブルの上にべたんとお尻をつくと、ゆつくり両脚を広げていった。

(これは演技……お宝を奪うための演技ですわ!)

震える指先を膺孔の縁にかけて、処女の中心部分を見せつけるように我が身を引き裂いた。神秘の扉が口を開け、まだ穢れを知らない処女膜が男たちの前にさらけ出されてしまう。

「オオッ。あれがレイアちゃんの処女膜か」

「綺麗な色だ。本当に処女だったんだな」

「うう……あ、ああ……」

ゾクゾクゾクッ!

周囲を取り囲む男たちの息づかいが感じられるほどのかぶりつき状態。生々しい視線で身体の内奥まで見世物にされ、ステージのとき以上に得体の知

れない昂奮が沸騰蒸気のように体内に噴き上がる。

(演技なのに……演技なのに……演技なのに……)
自分に言い聞かせるように心の中で反論。しかし突き刺さる視線は肉体的圧力を伴って、今にも処女膜を貫通してしまいう。全身の血は沸騰し、肉という肉が淫熱に蕩けていく。乳首はニブレスを突き破らんばかりに勃起し、クリトリスは親指ほどに肥大化して、装着されたリングがギユンッときつく食い込んで被虐の魔悦を増幅させる。

「ソっはっ……視線が……クリがあっ……ああん」
昂奮が大きすぎて呼吸もままならず、軽い酸欠になつて意識も朦朧としてきた。

(も、もう……頭も身体も……変になるう)
戦慄くたび処女穴からは愛液がビュッビュッと噴き出し、太腿からふくらはぎまでベツトリ濡らす。それでも止まらず、テーブルに水たまりまででき始めている。

(あううっ……みんな見ないで……そんなに見られたら……わ、私……もう……)
激烈な羞恥地獄の中、脳を中心に七色の虹が架かり、身体は雲に乗ったような浮遊感に包まれる。無意識のうちにお尻が左右に揺れ、一身に注目を集める勃起クリは、さらに一回りも大きくなって、あの重たい鈴を持ち上げんばかりの勢いだ。

(ああ……私どうなつてしまうの……?)
独壇場のレイアに魔法灯のピンクの照明が降り注ぎ、静電気のような奇妙で心地よい痺れが、背骨の中心を流れ落ちて子宮をジンジン疼かせた。なんのために演技しているのか、いや、もはや自分が演技をしていたことすら頭から消えている。

「ほら、ちゃんとご挨拶お。笑顔も忘れずにね」
「ううああ……見て……ください……レイアの……スケベな……し、処女膜……どうぞ……ご覧になってえ……あああん」

誘惑の微笑みで唇もふしだらに緩み、義賊の証であるはずの紅の仮面も、今では淫靡なアクセサリーと化していた。もつと見られたい……そんな狂った願望までもが、脳裏をよぎったりもする。

「ハアハア、やつぱり本性が現れてきたアルネ。こんなに昂奮したのは久しぶりヨ」
老人は嗶れた声を震わせ、皺だらけの手で自らの肉棒を抜き上げる。するとこれまで十年以上自立することのなかった肉棒が、若い牡のように完全勃起していくではないか。

「スゴいわ、シンチェン様が勃起なさるなんて」
「くう、俺もガマンできんっ」
娼婦たちは目を丸くして驚き、周りの男たちもそれにつられて、肉棒を抜き始めた。

「レイア、その笑顔、とっても可愛いヨ……ハアア……そろそろ……出そうヨッ!」
シンチェンはレイアの蜜肉に狙いを定めるようにして、肉棒をさらに激しく按摩する。十年ぶりに勃起した男根で感じる快楽は、まさにこの世の極楽であつた。

錆びついた輸精管の中に、久々の衝動が蘇る。まるで全身の細胞が若返るような高揚感に海綿体が破裂寸前に膨張した。

「ああ……そんな……シンチェン様……みんなも……ハアハア……一緒に……あああん」
男たちの獣じみた情念が伝染してしまつたのか、レイアも露出オナニーの快感に溺れていく。シンチェンの動きにリンクするように、レイアも特大クリを抜き続けている。

「一緒にイクアルヨッ! オオオオウッ!」
ドビュッ! ドビュッ! ドバドバドバアアア
鉛色の剛棒がいななき、白く粘つく塊が勢いよく噴き出して、クリップで開かれた処女粘膜に、膨れ

……

上がった淫核にドバドバと命中した。

「きゃあ!? ひいあ、ンあああゝゝゝゝッ!」
灼熱感に仰け反り、浮き上がった腰がさらに男たちを誘うように差し出される。

「ウオオオッ! デカクリにぶつ掛けてやるぜ!」
ドビュッ! ドビュッ! ビュルルッ!

射的の的を狙うように、他の男たちもレイアの淫核目がけて精を放った。激しい牡の欲情にクリトリスを打たれるたび、あたかも自分も射精しているかのような錯覚にレイアは陥ってしまう。

「あ、ああ、そんなにいい……あ、熱いいゝゝゝゝッ!」
（いやあ、こんな男の精液で……気持ちよくなるなんて……ああ……だめ、くるう……きちやうっ!）

熱く粘る精液がクリを直撃するたび、真っ白になった頭の中で、何かがバチバチッと火花を散らして弾けた。精液のヌメリが指の動きを加速させ、膨れ上がる快美に、テーブルの上の裸身がぐぐつと反っていく。

「ああ、もう、もうイキますわ……はあああ、レイアがイクところ……見てえ……ンニアアッ……イクッ……イツちやううッ……あああゝゝゝッ!」
おぞましい露出と被虐のエクスタシーに直撃され、仰け反る仮面の美貌に、さらに勢いを増した追撃の白濁液が浴びせかけられる。

「ンあああ……いやあ……あつ、はああああつ」
紅いマスクにドロリと垂れ下がる白濁精液が屈辱を刻み込む。しかし口元にはウツトリと恍惚の笑みが浮かぶ。

（ああ……すごい……見られながらイクのが……こんなに……すごいなんて……）

無数の視線と牡精を同時に浴びせられ、最低最悪の汚辱感で気が狂いそうになりながらも、官能の激流はレイアをつかんで放さない。それどころかさら

に勢いを増した虐悦の渦が蟻地獄のように引きずり込もうとする。

（あつ……ああ、もつとお……）

半ば失神したままレイアは腰をくねらせ、自慰の指も動き続ける。

「オホホッ! いいわよ、もつともつと何度でも気が済むまで、無様にいつちやいなさいっ!」

エリザベートが淫鈴に狙いをつけて鞭を振り下ろす。

ピシッ! チリーン! パシッ! チリンッ!
「おひいっ! そ、そ、そこおつ! だめええつ! あああ、またくるう! イクッ、イクイクイククゝゝゝゝッ!」

鈴の音と悲鳴を交互に響かせながら、レイアは被虐の階梯を何度も駆け上がった。いつた。

「ハアハア……私を十年ぶりに射精させるとは、大変気に入ったアルネ。この娘、一千万フルムで買うアルヨ! ハアハア」
シンチェンが宣言すると会場に大きくどよめきが起こった。一千万フルムといえば、通常の高級娼婦の百倍近い常識外れの金額であり、それに対抗できる者はもういなかった。

（やつと……これで……）
奴隷として競り落とされ、レイアは屈辱とともに安堵も感じていた。

（相手は老人一人……どうにもでもなりませんわ）
狂熱が引くにつれて、理性が回復してくる。シンチェンはさすがに疲労しているようで、回復には時間がかかるだろう。その間にシンチェンの部屋に忍び込み、宝玉を盗み出せばいい。

「これは私からのプレゼントあるネ」
「え? ち……ちよつと……」
クリトリスの鈴と金具が外され、代わって細く長

い金色の鎖がついたリングが嵌められてしまった。どういう仕組みなのかキユッと淫核の根元に食い込んで外れなくなる。

「あ、ああっ!? な……なんですのこれは?」
「それは古代の淫呪を刻み込んだ特殊な枷ネ。これは気に入った女にしか使わない貴重なモノヨ」

鎖をツンツンと引かれると稲妻のような衝撃が股間を走り抜け、まともに立つていことすらできなくなる。意志の伝達が奪われたように、身体の自由がまったくきかない。

「あううっ……どうしてそんなモノを……」
「ヒヒヒ……お前たちが連邦の回し者だということはおわかってるアルネ。私を甘く見ないことヨ」

「そ、そんなこと……っ」
狼狽えて振り返るとエリザベートが楽しそうに邪悪な笑みを浮かべている。

「ウフウフ。パレては仕方ありませんわねえ。ではシンチェン様、レイアをよろしくお願ひしますわあ」
ボンッとエリザベートの足元から白煙が立ち上がり、視界を奪う。煙が晴れたときには、連邦監察官の姿はもうなかった。

「フン、逃げたか。ではお前に色々喋ってもらおうアル。覚悟するアルネ!」
「ンあああつ!」
枷の鎖を手綱のように強く引かれて、レイアは身動きを封じられてしまった。蛇に睨まれたカエルのように、言いようのない不安がレイアの胸を黒く塗りつぶしていく。

それからの三日間はレイアにとつて悪夢のような時間だった。

「ほうれ、もつと尻を上げるアルヨ」
「うあ、あああ……いや、いやあつ!」
黒いボンデー姿のレイアは、男の言葉に従って

いよいよ始まる楽しい(?)学園生活!

思春期な アダム

第6話

天海雪乃

原作：さかき傘





でねでね
おにーたま

きのうはね
ミイがおさらを
あらったの!

へえりえらいな
ムツミちゃん
母さんも
喜んでたでしょ

えへへ
いーっぱい
よろこんでたよ

前号までのあらすじ

すべての女性を支配する、蛇眼に覚醒した睡月は、天使ミカ&エンジンに保護されつつ同居生活を送っていた。Hなお姉さんとツンツン少女に挟まれた少年を待ち受けるのは…?



ほらムツミ
そろそろ代わって

はい

あチアキ?

どう?
そっちはみんな
変わりはない?



んー
特には

……あー
お姉ちゃんが
今日は大学ない
って言い張って
起きないけど

昨日チューハイ
何本飲んだ？

二本で
やめた

大学あるね
叩き起こして

……うう……

ラジャ
そっちは？
なにか変わり
ない？

昨日
飲みすぎたあ……

と特にないよ
こっちも元気

じゃあ
また明日ね
なにかあれば
すぐ電話して

ホ...

...いまのところ
実家では何も
起きてない...と

うー.....

ビール

ミカさん
飲み物
ありますか？

却下。

はい
オレンジ
ジュース

けちんぽー

グ
グ

はあ...

あーもう
若くないわー

こんなに暑いと
寝ても疲れが
取れないのよね

エアコン
つけっぱだと
寒いし...

腰がいたーい
睦月君あとで
揉んでー

ゴロン

ここ何日か
ずっとですよ

整体とか行った
ほうがいいんじゃないですか

睦月君にモミモミ
してもらうのが
好きなの

他の人に
されても気持ち
よくなーい

な...何
言ってるん
ですか!

エンジン
起こしてこなきゃ



エンジン！
朝だよー

…暑い…

カキ
キキ

イラ
イラ

…なんでこう
毎日毎日暑いのだよ

人間界
だいつキライ…！

イラ
イラ

もう朝ご飯
出来てるよ

先にシャワー

ん？

のぞかない
でよね！



の…
のぞかないよ!

また根に
もってたんだ……

もー
ドア開けっ放し
じゃないか…

閉めとくよー

フン!

僕が
ミカさん達と同居
するようになって
三週間が過ぎた

ふふ…

イセリア 英雄戦記

The Legend of the Azepra War

第26話 覚醒する魔眼姫

小説 / あらおし悠 ゆう
NOVEL

ぼたん
挿絵 / 牡丹
ILLUSTRATION

魔眼を封じる忌鎖を無力化するため、
スレアを探そうとするメイベルローゼ。
女錬金術師と遭遇した帝国の末姫に
オークと異端審問官が強要したのは、
屈辱の肉棒奉仕!

「……フエイエンへ向かいましょう」
 フイオナは、呟くように、しかし決然とした表情の顔を上げた。

難民となった国民を避難させるか、メイズ再封印のため、行方知れずのアリオナを捜索するのか。

ミーシャの問いで選択を迫られたフイオナの逡巡は、短かった。

魔物の巣窟となろうとしている王都を元に戻すには、母の力が必要だ。だが不安に駆られる民や家臣を、捨て置けるはずもない。一刻も早く安全な地に導くのが、王女たる自分に課せられた最優先事項。

「それに……セリーヌも休ませてあげたいし……」

フイオナは、自分の膝枕で泥のように眠る女騎士の長い髪を、慈しむように撫でた。スライム化したゴルヴァーナとの戦闘で著しく消耗した今の彼女に、無理はさせられない。

「……了解したにや」

ネコ耳の大騎士長は、皇女の命に首肯した。いつになく神妙な面持ちで、まるで自分に言い聞かせるように。

フイオナはハツとして顔を上げた。見た目は幼くても、ミーシャは古参の騎士。母のアリオナとも、極めて近い間柄にある。もしかしたら、自分が思っているよりも、ずっと親密な関係なのかもしれない。

それなのに、救出を後回しにするというフイオナの決断に従うのは、断腸の思いに違いない。

「申し訳ありません。わたくし……」

「長たる者、臣下に迷いを見せるにや。それに、お前が母御を心配しておらぬなどと、このミーニャンも思つてなんかないにや」

項垂れるフイオナを、ミーシャが叱責する。厳しさの中にも、氣遣いを覗かせる口調で。

神妙な顔で大騎士長の直言を聞いてみると、黒ずくめの姫がカツカツと、こちらには不機嫌さを隠さない靴音を鳴らして歩み寄ってきた。

「お話は終わつた？ だつたら、さつさと移動するわよ。いつまでも魔物の国に居座っているなんて御免だわ」

メイベルローゼがフイオナを見下ろし、避難を急ぎ立てる。異国の姫の非礼極まりない物言いに、皇女を囲む騎士たちが色めき立つ。

「貴様！ 無礼であろう！」

「あら、イセリアが魔物に蹂躪されているのは事実でしょ？」

魔姫の挑発で、不穏な空気が一気に密度を高めた。もとより高潔な公国の騎士が、敵国バードベルグの姫に好感を抱いているはずもない。

「それ以上の侮辱は許さん！」

「許さなければ、どうするの？」
 イセリアの騎士たちが武器を構える。

イーバが素早くメイベルローゼの前に出て、剣の柄に手を添える。

一触即発。ジリジリと間合いを詰める睨みあい。だがそれを制したのは、凜とした皇女の声だった。

「今は、仲間割れをしている時ではありません」

静かに立ち上がり、騎士たちを見渡す。穏やかでありながら力強い瞳が、聖騎士団に冷静さを取り戻させた。己の役目を果たすべく駆け出して行く。

それを見送りながら、フイオナは、いまだ無然としているメイベルローゼに向きあった。

「……我が騎士が無礼を申しました。わたくしに免じて、お許しください」

頭を下げる皇女に、メイベルローゼは少し面食らつたようだ。それでも彼女は皮肉たつぷりの目を向ける。

「そ、そうよ。驕がなつてないわ。騎士がそんなだから、国が減んでしまうんじゃないの？」

フイオナは、その皮肉を素直に受け取つた。

「王家の不甲斐なきゆえに、イセリアが魔物に蹂躪されているのは紛れもない事実。その現実から目を背けぬために……今は、故国を棄てるのです」

そして凜々しくドレスを翻し、通る声で高らかに宣言した。

「いざ行きましよう、フエイエンへ。今一度、この地に公国の栄光を取り戻すために!!」

だが多くの民を率いての隣国への旅は、想像するまでもなく、容易なものではあるはずがなかった。王都だけとはいえ、その人数は万を超える。蟻のよいうな群れは機敏には程遠い。

「あー、もう！ ちつとも進まないじゃない！」

王都を出て数日。その夜は久しぶりに屋根の下にいた。街道沿いの粗末な宿だが、それでも久しぶりに野宿から解放されて気が緩んだのか。遅い夕食を摂りながら、メイベルローゼは旅の不満をぶちまけた。

「致し方ないにや」

小さな食堂の片隅で、向かいあいに座るのはフイオナ。そしてメイベルローゼが背にしたもうひとつのテーブルには、ミーシャとイーバが互いに牽制しながら向かいあう。

「今のイセリアは敵が多い。急ぎたいのはやまやまにやれど、襲撃を警戒しながらでは、自ずと歩みも遅くなるというもの」

「あ……あたしだつて、そのくらいわかつてるわよつ!!」

ちよつと不満を漏らしただけではないか。なのにミーシャに理路整然と説明され、メイベルローゼは儼然と頬を膨らませた。舌足らずのくせに偉そうなのが、尚のこと癪に障る。

「わたくしたちは、みなより優遇されているのです。文句を言つては……」

フイオナにまでたしなめられ、著しく自尊心を傷つけられた。

（優遇されている？ これが？）

視線を巡らせ、鼻白む。壁はあちこち剥げ落ち、天井には蜘蛛の巣。今夜の宿は、廃屋と見紛うばかりのあばら家だ。お世辞にも王家の者が寝泊まり

する場所ではない。

(……フィオナもミーシャも、よく平気な顔をしていられるわね)

確かに、難民の一部が民家を間借りできただけで、大半は今夜も野宿。本来なら、この宿もフィオナだけが使う予定だったのを、メイベルローゼが強引に割り込んだのだ。

当然、互いの姫にひとりずつ護衛が付き、結果としてこの奇妙な夕食風景が出来上がった。

「……セリーヌは大丈夫でしょうか」

フィオナが幼馴染みを気にかける。いまだ目を覚まさない彼女も、別の宿で眠っているはず。

「今は、ゆつくり休ませてやるにや」

「音に聞こえた大騎士長さんも、部下を甘やかすのね。お優しいこと」

「厳しければいいというものではないにや。十分に働いた者には、十分な休息を。お前のような裏切り者を出さないためににや」

「……チツ」

見た目に似合わず狡猾なのか。ネコ耳の大騎士長は、フィオナとは違った意味で皮肉が通じない。

「しかしミーシャ様。メイズVIIからの魔物の流出を食い止めるためには、スレアの探索が不可欠です」

「その通りにや」

あの女の奇妙な結界のせいで、メイズVIIの奥に進めない。そしてスレアを相手にするからには、やはりセリーヌの力が欲しい。言外に匂わすフィオナ

の本音を感じ取り、ミーシャも難しい顔で考え込む。そんな彼女たちの困り顔は、メイベルローゼに、アイデアという名の悪巧みを閃かせた。

「……それなんだけどさ。スレアの探索、私に任せてみない？」

突然の申し出に、イセリアの皇女と大騎士長は目を丸くした。

「どういう風の吹き回しにや？」

ミーシャの片眉が跳ねる。探るような彼女の目から視線を逸らし、メイベルローゼは無理矢理に笑みを作った。

「ど、どうもこうも……フエイエンに着いてからでは、魔物によるイセリアの被害は広がる一方。だったら別働隊を出して、迅速な対応を取るべきではないかしら？」

ミーシャが、さらに胡散臭そうな目で顔を覗き込んでくる。もちろん、その程度で臆するようなメイベルローゼではない。

「あいつには、私も因縁がある。ついでに、あなたの母親についても情報を集めてきてあげるわ」

「本当ですか!？」

フィオナが顔を輝かせる。メイベルローゼは、心の中でほくそ笑んだ。スレアは探す。だが別働隊を志願するのは、もちろん、イセリアのためではない。この身に施された忌鎧を解除し、魔眼を取り戻す。そして、あわよくばスレアの抹殺するため。

「もちろんよ! ああ、でも危険な旅になりそうだし、イーバの他にもお供

が欲しいわね。そう、例えば……セリーヌを貸してはもらえないかしら」

魔姫の目が食欲に光る。故国の平和を願う彼女たちに、この申し出は断れまい。だが、そう簡単に、思惑通りにはいかなかった。

「セリーヌはまだ無理というに、記憶力のない娘にや。よろしい。貴様のお供は、このミーニャンが務めてやる」

メイベルローゼは心の中で舌打ちをした。このチビ猫に「監視」されるのは、なかなか厄介だ。

「……いいわ。あなたなら護衛として申し分ない。出発は明日の早朝よ」

夜も更け、誰もが寝静まったのか、小さな宿の中は物音ひとつしない。

メイベルローゼにあてがわれた部屋も、ささくれ立ったテーブルの上で揺れる蠟燭の炎の音さえ、はつきりと聞こえるほどだ。

「セリーヌの件……よろしかったのですか?」

粗末なベッドで横たわるメイベルローゼに、部屋の隅で控えるイーバが囁いた。護衛にセリーヌを指名した目的は、彼女にも察しがついたのだろう。

「構わないわ。あの宝珠も奪えれば理想的だけど、あれこれ欲張りすぎて失敗しても、つまらないもの」

ゴルヴァーナとの死闘の末にセリーヌが手にした宝珠は、際限なく魔力を吸い取る魔具。

「あれを核に使えば、きつと強力な魔

装具になる……。大きな力を得ることが出来るのよ」

メイベルローゼは唇を噛み、己の下腹をグッと掴んだ。そうなれば、ここに貼りつき、魔力を奪い続けている忌鎧も意のままに操れるかもしれない。今は邪魔なだけのこれも、我が力とすることが出来るのだ。

とはいえ、目的が多すぎるのは失敗の元。まずはスレアを探し出すのが最優先だ。あの女さえ何とかできれば、すべてが思い通りに転がるからだ。

メイズVIIの「虚像空間」が解ければイセリアの信用を得られるし、何より魔眼さえ復活すれば、セリーヌなど何とでもできる。

「そして宝珠を手に入れ、忌鎧も我がものになれば……」

或いは、自分を虚仮にし続けた父やバインドベルグへの復讐も叶う——!

高揚するメイベルローゼだったが、かすかな物音を聞き当て鋭い視線をドアに飛ばした。同時にイーバも蠟燭の火を消し、剣の柄に手をかける。

——コツ……コツ……

辺りを憚るような足音が近づいてくる。暗闇で高まる緊張の中、その足音がドアの外で立ち止まる。

イーバが疾風のように部屋を横切った。暗闇に抜き身の刃を光らせ、何者かがノブを回す前にドアを開け放つ。

「——ヒツ!？」

「フィオナ?」

それは、身体の線が透ける、薄手の

寝間着姿のイセリア皇女だった。喉筋に冷たい剣を押し当てられ蒼褪めている。それでも、いくらかは修羅場を見て肝が据わったのだらう。竦み上がりたりはしていない。

「こんな夜更けに、何の用？」
「お、お礼を……しなければと思って……。正直を申して、バンドベルグの貴女がイセリアのために働いてくださるとは思わなかったのです」

メイベルローゼが動くのは、イセリアのためではなく自分のため。しかしここで本心を明かす必要はない。味方と思い込んでくれたほうが、後々、何かと便利だろう。そう判断し、視線でイーバを下がらせる。

「信じてくれるなら嬉しいわ。でも私の覚悟に見合うお礼が、まさか言葉だけってことは……ないわよね？」
メイベルローゼは、意味ありげな視線でフィオナの身体を舐め回した。ねつとりと、卑猥な笑みで。

別に何かを期待したわけではない。お人好しのお姫をからかっただけ。しかし驚いたことに、彼女は何の躊躇も見せず、するりと寝間着を脱ぎ去った。

「——!？」
蠟燭の炎に照らされ、オレンジ色に染まる白い肌。憎らしいほどたわわに実った丸い乳房。薬で進行を止めているとはいえ、懐妊しているとは思えない華奢な腰。
股間を覆う小さな下着を残しただけの、ほぼ全裸となった同性の優雅な立

ち姿に、メイベルローゼは思わず生唾を飲み込んだ。

ほっそりとした腕が伸びて、甘えるように首に絡んでくる。

「あ、あんた……んむっ!？」

メイベルローゼは息を詰まらせた。あつと思う間もなく、フィオナに唇を塞がれたのだ。柔らかな感触にくすぐられ、背筋に甘美な電流が走る。
(こ……この娘、何考えてんのっ!?)

突然のことに目を白黒させる魔姫をよそに、フィオナは喘ぎながら唇の隙間に舌を押し込んできた。

「あふ……ン……む……ちゆるっ」
大量の唾液を纏いながら、強引に割り込む濡れた肉片。ぬるぬると唇を擦られ鼓動が高鳴る。

「あ、フィオ……んむっ……ちゅ!」
「ふあ……メイベル……ちゅ、ちゅば……ちゆるるっ!」

下唇を吸われると、ゾクゾクする快感が全身を駆け抜けた。フィオナが顔を傾け、挿し込んだ舌で螺旋を描く。味蕾のざらつきと唾液のぬめりが心地よく、メイベルローゼは、まるで助けを求めるように、両手で彼女の身体にしがみついた。

(こ、この私が、こんな小娘のキスで……! でも……でも、あ……!)

きつと、数々の陵辱を受ける中で身についてしまったに違いない。皇女とは思えない巧みな舌技は、たちまち魔姫を同性キスの虜にした。
——チュ、ちゆる、じゆるる!

はじめ戸惑い気味だった口づけは、いつしか唾液を交わしあう濃厚なものに。横目で窺うと、イーバが呆気に取られている。主のキスシーンに、どう対処すれば判断できずにいるのだ。

(無理もないわ。私だって……私だって……ふああうんっ!)

舌が擦れる度に、頭が真っ白になっていく。薄く開いた目に映るのは、うつとりと閉じられた目蓋と、震える長い睫毛。そしてメイベルローゼの小振りな胸に押しつけられる、柔らかくて豊かな美乳肉。

それらすべてが妬ましく、衝動的に裸の乳房を鷲掴みにした。

「きゅふああん!!」
柔乳に食い込む指の痛みに、フィオナが大きく仰け反った。濃厚な唾液の糸がふたりを繋ぎ、重そうに垂れて切れる。唇が離れる名残惜しさに自分で驚きながら、メイベルローゼは魔姫らしい虚勢を張った。

「は……はあ……。あんた、どうしてこんな……」
「言葉以外のお礼という……わたくしにできるのは、オラリオで『自由の剣』の皆さんに教えていただいた、絆を深めるというこの方法で、精いっぱいご奉仕するだけ……」

そういえばこの女は、以前、そんなおかしい理屈を『自由の剣』の連中に吹き込まれていた。度胸は多少ついたようだが、単純で騙されやすいところは相変わらずのようだ。

「何が絆よ。身体を弄ばれただけでも気づかないで……」
つくづく愚かな女だ。だが、これを利用しない手はない。
「いいわ。楽しませて……」
自分も着ているものをすべて脱いだ。一瞬、彼女に比べて貧弱な胸を晒すことに羞恥を感じる。だがそれよりも、憎らしいほど巨乳の女を服従させる悦びが、身体を内側から熱く火照らせた。
(思えば、この女には確な目に遭わされてないわ……)

彼女を皇帝へ献上した時は、帝国内での立場が向上すると思つたのに。それが徒勞に終わつたどころか、父への憎悪を見抜かれ、口車に乗って国を裏切つたせいで陵辱まで受けた。
その元凶であるフィオナが奉仕してくれるというのだ。今度はどんなプレイで恥辱を味わつてもらおうか。
「……お舐め」
優雅に微笑みながらベッドに腰を下ろし、脚を開く。だが、余裕ぶつて二本の指を性器に添えたメイベルローゼは、衝撃を受けた。

そこは、自分でも驚くほどのぬるみと化していたのだ。濃厚な蜜が陰唇の髪から滲み出し、少し恥裂を開いただけで、とろみのある熱い雫が内腿を流れ落ちる。舌と唇だけで、ここまで女を欲情させるなんて。

「何ていやらしい娘なのかしら。ふふっ……そうだったわね。皇女様は敵兵だろうが魔物だろうが犯されて悦んじ

「どうやら僕は女の子運が悪いらしい」「うちのメイドはメイドなアイドル!」「妹はグラビアアイドル!」「1~3」「お嬢様はヒミツのアイドル!」「妹のリップバーजनはお兄ちゃんのもの!」「真帆先生のおあずけレッスン 結婚までHはダメ!」

やう、変態牝奴隷だものね」

「ああ……言わないで……」

侮辱のすぎる嘲りに身を竦ませ、それでもフィオナは、メイベルローゼの脚の間に恭しく跪く。そして催促するまでもなく、彼女は仇敵だった女の性器に口づけてきた。

「うふあ——っ!!」

甘い衝撃が走り、思わず顎を仰げ反らせる。しなやかな舌が、恥鬚を掻き分ける。ゾクゾクする快感に、メイベルローゼはたまらずシートを握り締めながらお尻を浮かせた。

「い……いいわ。もつとよ。もつと強く……深く……はっ……あッ……!!」

要求に応え、フィオナは鼻先を突っ込んできた。震える太腿に手をかけ、貪るように恥蜜を吸る。

「ん……んむ。ちゆる、ちゅばっ!!」

「あ、あう……はあッ!!」

鮮烈な快感に耐えきれず、メイベルローゼはベッドに倒れ込んだ。その間も愛撫を続けるフィオナの髪を両手で掻き乱し、自分の股間に押しつける。

「ああ、素敵……。もつと声を聞かせて……わたくしで感じて……!!」

皇女も酔ったように瞳を潤ませ、メイベルローゼの恥蜜を吸り上げた。

「……ぴちや、ちゅぶ、ちゅるるん!!」

「いひ?! ふあん、きゅふうう……」

小陰唇を甘噛みされ、淫核を小刻みに舌で転がされ、喘ぎが漏れる。内腿が強張り、足指が痙攣を起こす。

「い、いいッ! 気持ちいい……あ……」

そこもつと……あうああッ!!」

数々の陵辱の末に、心ならずも覚えた性技を、フィオナは惜しみなく披露し、駆使した。

「メイベルのここ、すごいですわ……いつばい溢れて……はあ……」

うっとり眩く彼女の唇が、テラテラ輝いている。いかに自分が大量で濃厚な蜜を漏らしたのかを見せつけられ、メイベルローゼは顔を火照らせた。見下していた女の愛撫で感じてしまった自分の淫らさが、無性に恥ずかしい。

そして、清純そのものだったフィオナが、同性の性器を舐めて悦ぶほど調教されてしまったのだと思うと、心のどこかでショックを受けると同時に、胸を高鳴らせずにいらなかった。

「む……無駄口叩いてないで、もつとしっかり舐めなさい、この売女!!」

胸に芽生えたおかしな高揚をごまかそうと、必死になつて口汚く罵る。

「ああ……そんな、わたくしは……」

するとフィオナは自分の肩を抱き、ゾクゾクと身体を震わせた。まるで、罵倒されて悦んでいるように。呆気に取られていると、彼女は愛蜜で濡れた口を拭おうともせず、妖しい笑みで脚の付け根にかぶりついてきた。

「いひッ……!!」

予想と違った場所にキスされて、思わず声が裏返る。鼠径部を往復し、さざ波のような痺れを生む皇女の舌。

「いいわ。その調……子ッ。あつ、はあ……こつ、今度は足よ!!」

メイベルローゼは、ことさらに高飛車な口調で愛撫を命じた。さもなければ、今にも情けない声で快感を叫んでしまおうだったのだ。

（き……気持ちいい……どうしてこんな……あ、くふうああウン!!）

唇を噛んで喘ぎを押し殺す。フィオナはそんな魔姫の命令通り脚を持ち上げ、内腿から膝の裏、そして爪先に唇を這わせると、何の迷いも見せずに足の指を口に含んだ。

「……ちゅば、にゅるるんっ。」

自分で命じておきながら、メイベルローゼは情けない悲鳴をあげた。ぬめる舌が足指の股を這い回る。異様で、それでいてたまらない心地よさは、舐められる側に奇妙な優越感を抱かせた。

「く……ふッ……あはははッ。あんたっ、お姫様のくせに……足なんか舐めて、平気……なの!!」

異様なまでに興奮し、爪先で口腔を掻き回す。しかし彼女は少し肩を擡めただけで、さらに奥まで咥え込んだ。「平気れふ、ちゅ……。わらくひの味方になってくれる方に悦んでいたらけるなら……ちゅば、じゅぶるるっ!!」

「はッぎゅうううううっ!!」

指の根元を執拗にしゃぶられて、尻肉が引き攣るほどの快感に、ちゅばけな優越感など軽く吹き飛ばされる。さらにフィオナは脚を持ち上げ、振動する舌で、膝裏、太腿の裏側、そしてアヌスにまで唾液を塗り付けた。

「はあう?! うあ……ふあッ。そ……そんなとこ……らめええええッ!!」

まさか尻穴にまでキスするなんて。放射状の皺をなぞる丁寧な舌愛撫は、乱暴な陵辱者とは比べ物にならない優しい快感で身体を包み込む。

「あ……あんた、こんなコトどこで覚えて……ふあうあッ!!」

「……あなたが教えてくれたのです、ちゅっ。パードベルグの監禁部屋で……じゅばっ、奉仕する悦びを……じゅるる、ちゅるるうううっ!!」

「ふうあああああうっ!!」

再び潤んだ性器を吸われ、メイベルローゼの意識が飛びかけた。（ば、馬鹿じゃないの?! あの時、私は……イセリアに恨みを持つ侍女をそのかして、あんたを犯したのに!）

恨みこそすれ、悦びを覚える筋合いの話ではないはず。にもかかわらず、懸命に快感を与えようとするフィオナが理解できない。それとも、汚され続けた彼女にとつて、もはやあの程度は陵辱の内に入らないとでもいうのか。

動揺する隙を狙ったように、フィオナもベッドによじ登ってきた。

「ふふふっ……」

そして妖しく微笑むと、重そうなお乳房をメイベルローゼの胸に重ね、唇を寄せてきた。思考の混乱のまま、無抵抗でそれを受け入れてしまう。挿し入れられた舌に吸いつき唾液を求めぬ。

「……ちゅ、ちゅばっ……ちゅるるん! ぶたりは唇を啄み、舌を絡め、互い



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>